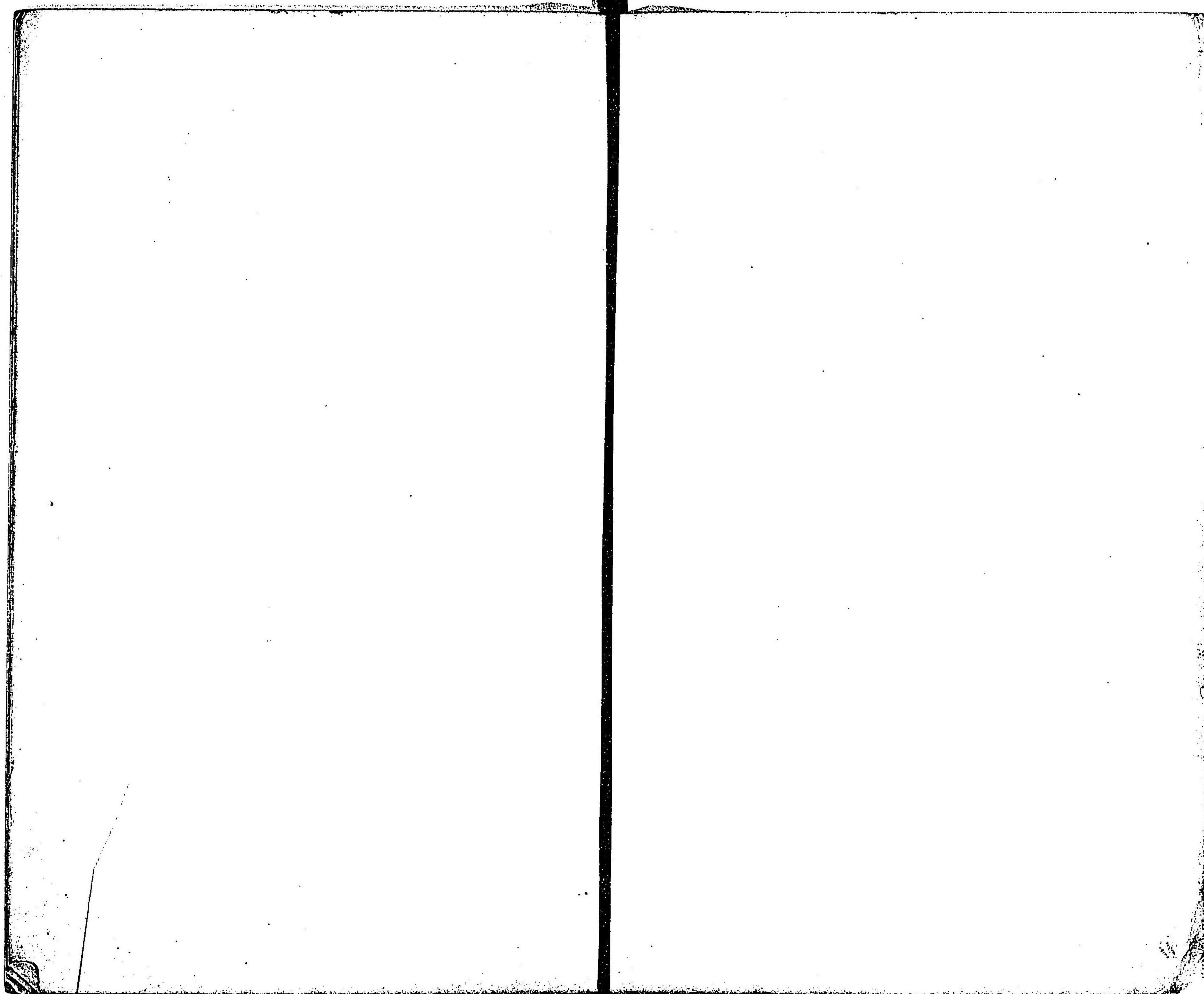


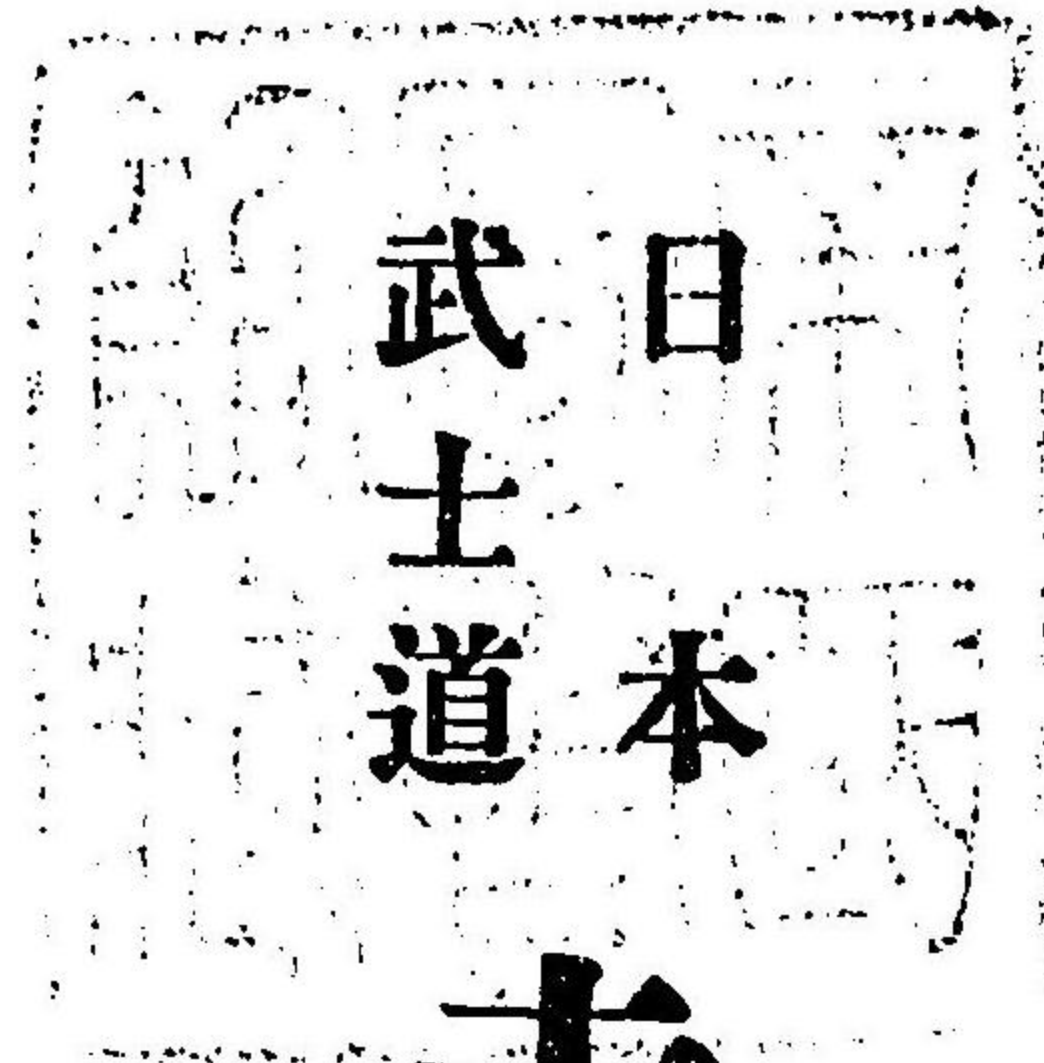
日本
武士道

赤穂義士

第一編



439
949



日本
武士道

赤穂義士

明治
42 4 0
内交



堀部安兵衛

大石瀨左衛門



佐野
馬

日本武士道 赤穂義士 第一編

堀部安兵衛

眞龍齋貞水講演

今回は義士銘々傳を申し上げます、此義士の面々が後に討入といふ目的を果しまして泉岳寺に引揚げ、細川毛利松平水野、此四家にお預になりました切腹仰せ付られ、今日泉岳寺に四十六士の石碑を残して武士の龜鑑と崇められる、此恐れ多くも朝廷より、明治元年十一月五日に勅語を賜はり、其勅文に曰く

汝良雄等固執主従之義、復仇死于法、百世之下使二人感奮興起、朕深嘉賞焉、今幸東京、因遣使權辨事、藤原獻一弔汝等之墓、且賜金幣、

今日は江戸が東京となりましたのは、御承知の通り参議大久保利通侯の上奏から遂に東京となり、恐れ多くも朝廷は東へも下向然るべくとあつて、遂に江戸西丸を皇居となしたまふ、其

行幸のとき高輪を御通葎の際、忠義の點を重んぜさせられて此御勅語を賜はりました、實に名譽是に過ぎ、尙内藏之助に從五位を賜はりました、主人内匠頭が從五位朝散大夫でございますのに、其城代家老、臣下の身をもつて同じ從五位を、後世恐れ多くも朝廷より賜はるといふは、定めし良雄の靈地下に喜んで感泣されたる事であらふと存じます、斯る武士の譽れを殘されましたるは、即ち赤穂浪士の人々が、元祿の昔は、實に天下は泰平、刀は鞘、弓は袋に收まる目出たき御代に、倍す驕は長じ、皆驕奢に流れたる頃ほひ、赤穂の浪士吉良殿を打た爲めに、何れも武士は臍を固め、俄かに擊劍柔術、と騒ぎ立ました、是が響き渡りまして日本全國に武士道を鼓吹したのが即ち赤穂浪士、大石内藏を始め四十七士の面々でございます、夫を近ごろ武士道鼓吹だなどと平凡奴が申すは片腹痛いくらゐ、武士道鼓吹だなどといふ意味は容易ならんことで、無學文盲の割鐘みたいな聲を張る奴が、武士道鼓吹なんといふ大言を吐ちらす奴は、天下の人を土人形のごとく心得てをる者でございます、今回貞水が申し上ます赤穂義士銘々傳につきましては、成べく事實に違はざるやうお話をいたしますでございます、就ましては重野博士、信夫恕軒先生、此の方々につきましても、貞水は折々義士の事にては御教授を蒙りました、又及ばずながら自分も千辛萬苦して、義士傳のことに付ては、除り塵器に申し上た

くないと存じまして、多年心配をいたして、今日國民新聞の紙上に現はして、諸君の御愛讀を仰ぐのでございます、乃で銘々傳のうちに最も意味の深い、先づ堀部安兵衛から申し上げます。此堀部安兵衛武府は、元越後の國新發田の浪人、中山安兵衛武府と申しまして、幼年の頃ほひより苦勞をいたしまして、實は新發田の城主溝口飛騨守の御家來で、沼垂の奉行をお勤めになりました中山安左衛門と仰せられました、文武兩道ともにも心得あつて堅固なる人、此御夫婦の中に出来ましたのが安太郎と云て只た一人のお子様、手の内の珠のごとく思召れまして成長を樂みになり、虫氣もなく成長いたしました、七八歳からして能く字を書き、書を讀み、十三歳から同藩に、叔父さんの菅野六郎右衛門といふのがございまして、眞影流の名人、是に就てお稽古を願ひ、十八歳の時に最早同家中において、中山安太郎どのは天晴れ熟練とまで言れました、十九、二十、二十一、頻りに學問を勵んでお在でございます、堅いのが通り者となつた。ところが其頃ほひに新發田の御藩中の若武士が、頻りに新潟の古町通ひといふのを遊ばした、何うか中山安太郎を引出さふではないか、親父の身分は郡奉行だし、金のある家の息子だから、彼を連出せば工合が宜い、と頻りに皆お勸に相成ますが、何うしても應じない、然るに一人の若者が、甲「何と中山を引出すのには、何うしても行んから計畧を用ひやう」乙「何ういふ計畧」

甲「臆病だから行のが恐いだらよ、と言たら必らず行たらよ」乙「此ア宜いところへ氣がついた」乃で某時、安田堀内松本元村なんといふ悪友が、甲「中山氏」中「ヤ、是は各々」甲「何と今宵は古町へ御同伴下さらんか」中「此方は學問を修業に暇なく、甚だ残念ながら各々のお交際として参るわけにまいらん」甲「毎も貴君は然やうな事ばかり仰せられる、我々の考へたには、新海まで参る途中が恐いから、夫でも交際をなさらんのだ、學問だの劍術だのと仰しやつて、毎もお断りになるといふのは、アノ途中の道が恐いのだ、ヤ、臆病だから行れないのでござらふ、何と各々、中山氏は見かけによらん臆病でござる」乙「然やう、此は又臆病、アハハハ、」武士たるべき者が臆病なんと言れましては、一刻も猶豫はならない、中「此は怪しからん、ヤ、途中の道が恐いの、臆病のとは何ごとだ、然やう仰せられまするなら一夜も同伴を致しませう、以後は相成ん」甲「然やう其許に於いて、我々にも同伴下さるといふは、是ぞ我々の面目でござる、サア参らふ」といふので、中「では此から宅に戻つて支度を致しまする」と言て中山安太郎は、此事を内々母親に申し、安「今晚は何かの催しがあつて、各自新海まで赴かれるといふ、此は御交際のために参らんければ成ませんから、一夜お許しを蒙ふりたい」甲「然やうなら行てゐらっしゃい」で身支度をして金子の用意萬端調へて、右の朋友と同道して、途中面白可笑しく各自打

話つて越後新潟の古町通りと鳥羽屋三郎助といふ、其頃ほひの立派な妓樓に登りました、サア大廣間にて藝妓を招で飲よ唄への大騒ぎ、各自娼妓を定めまして歡をつくして後にお撤宴となりました、ところが中山安太郎は威儀を正して、中「此方は誰も要んから此にて臥る」乙「何うか然やう仰しやいませんで、貴君様のお娼妓もチャンと定めてございますれば」中「イヤ、此方は婦人などは未だ傍らへ近よせんのである、其儀は捨置け」乙「然やうでもございませうが、何かにお手許の御用もございませうから」中「イヤ夫に及ばん、最早梅を延たら夫にて宜しい」寢衣も着換ずいたして褥の上に座つて、膝に手を置いて頻りに考へてゐる中に、四邊は漸々静かになり森々寂寥としてくる、スルト屏風の外に何やら人のをる容子だによつて、中「誰か夫にをるか」乙「ハイ」甲「誰ぢや」乙「ハイ、妾は今宵旦那さまのお娼妓として召れしました、玉吉と申しまする藝妓でございます」中「ハ、ア、何ゆゑあつて其方は此所にをるか」甲「ハイ他の朋輩の手前妾一人が御用なくお暇を頂いたとあつては、眞とに面目ない次第でございまして、切て今宵は御傍に仕かへまいらせて、お小用なりと御案内に参る心得でございまして、最前より此の屏風の外に控えてをりましたとございます」中「扱々夫は又お氣の毒なことだ、もそつと此方へ出て構はんから」甲「ハイ」

中「此方は仔細あつて婦人を傍へ近づけんのであるが、而して其方が是に出てをるのも不思議の縁であるワエ」玉「ハイ」玉「其方は何歳ぢや」中「ハイ、十八歳でございます」中「ウーン、折目正しく、斯やうな賤しき勤めをする者のやうにも思はれんが、斯やうなところへ身を沈めるのは、定めて其方も、此までの間には、種々身の上の話しもあるらふ、語つて聞せい」玉「ハイ、お尋ねあそばしましたるから申し上するが、素より妾は、斯やうな賤しき勤めをいたす家に生れた次第ではございませぬ、身の薄命を一通りお聞下さいまし」中「オ、是にて承まはらふから話して聞してくれ」玉「以前妾は、此新潟に廻船問屋をいたしました攝津國屋嘉兵衛と申す者の娘でございまして玉と申します、父母の間に妾一人の者でございまして、幼少から十一歳の頃ほひまでは、何うにか家も盛でございました、然所が難風のために、積出すところの親船が三艘、俄に難船いたしました、夫が左り前(破産)の始めとなりまして、父嘉兵衛は遂に病氣となりまして、醫師よ薬と充分手當をいたしましたか、一年半ほど煩ひましてトウ、此世を去りました父の葬禮は相當に致しましたるなれど、サア夫からは次第に家も困ることになり、母も是を苦にして一年の間に、立派に住居し家土藏も、皆な他人手に渡しまして、此古町の直ツヒ先に裏家住居となり、初めの内は母と共に何うぞ斯うぞ消光してをりましたが、座

して食へば山も空しくとか、遂に其日に追れるやうになりました、丁度昨年からいたして、妾を勤める者がございまして、藝妓になつて母親をと、只今病中でございます母を養ふために、當家に身を任せまして、漸う母親の世話もいたすといふ現状、馴るる業は、お客さまの機嫌を収り参らせるのも何となく届かず、朋輩の者も申しまするに、汝のやうな事では、何度お客様があつても、再びかゝるものではない、と言れまされたに、稼業の手前、身を切れるやうに思ひます、毎日日々辛き月日にお客様方の御機嫌を取り、夜更て主人より暇を貰ひ母の家に立戻り、此母親を看護いたし、又是に來てお客様のお席に出といふ、薄命の者でございしますので、宜くお察し下しおかれなく、満らぬことを申し上相濟せんでございします」と兩顔に涙を浮かべて中山の顔をデロツと見ました時に、中「ア、夫は又氣の毒な身の上ぢや、何うも最前より其方の起居舉動と申し、容子を見と尋常大抵の藝妓などは違ふと存じ、夫ゆる其方に尋ねしに、返すくも身の薄命、其話を聞いて思はず此方も涙を催した、シテ其母親は「玉未だ打臥てをります」中「然いふわけであるなり、定めて其方の戻りを待てるであらふからモウ歸れ……ア、此々、此は真に些少であるが、其方の母親に何ぞ口に適し物でも取て遣してくれ」玉「然やうな手當を頂戴いたしましては」中「イヤ、此は當家に其方を招いた櫻頭といふも

のではない、其別に此方が聊さか心づけ、受納いたして母親に何ぞ買て遣はしてくれよ」中「エー、御深切さま有難う存じます」中山安太郎の其深切に、玉吉も其心嬉しく押頂くうちに、早や鶏鳴曉をつげる中「ア、思はず其方の話しに實が入つて最早夜も明ると見える玉、ハイ、恐れ入ましてございます」中「復此方が参つて、其方を招いて一献汲であらふから、随分身體を厭ひ母を大切にいたせよ」玉、ハイ、有難う存じます」と涙を流して玉吉は喜びました。乃で一同の者は愉快を盡しましたるから、今サア中山氏参らふ」と古町を立出ます、他の人々は、昨夜の女子が何うの斯うのと、往來に人なきを幸に高聲に語るを、一人中山が昨夜が鳥羽屋の玉吉、彼の容子、ア、如何にも惘然な女子だ、と夫のみを氣にかけて我家へ立歸る、一同の朋友は、一同トウ／＼中山の堅物を引出してやつた」と頻に影で囁やいてをります、此方は相替らず堅固に學問劍術の修業に、他を顧みるの暇なく、然に此安太郎は玉吉の事が氣になる、親孝心ではあるし、食しからざる家に生れながら、薄命の續したために今は妓樓に勤の身の上、母を抱えて年端も往ず、定し苦勞をしてをるであらふ、と何となく感然で堪らないから、是は今一度往て酒の酌でもさして心を慰めてやらふ、と其後は只一人にて駕籠に打乗り、古町通の鳥羽屋の家に参りまして、右の玉吉を呼で酌をさせることになる、中「先夜に眞に失禮なやつ

たな」玉、ア、恐れ入ます、能こそ入せられまして、又彼の節は母に對してお土産を頂戴いたし、母親も謝は幾許か言葉に盡しがたく、毎日母は沼垂の方を拜んでをります」中「ヤ夫ほどに思はれて、恐縮ぢや……ア、少しは快いか」玉、何分手當も充分なりませんから、快と思へば又悪く、眞に心配でございます」中「オ、然やうか、此方も和女のことか何となく氣になつて成んから、何う致してをるか」と今日出て來たのだ、今そつと近う出い、一つ道すであらふ」と玉吉へ盃をくれる、其の時も只打語らひて何事もなく、安、是にて母に何ぞ與へよ」金子を渡して安太郎が立歸る、玉吉は喜んで送り申す、サア此が、一度が二度三度となつて、毎も來れば兄弟が久々に對面したといふやうな、有様で、少しも否なこともなく通つてをりましたが、如何に堅固なる中山安太郎でも、身は木石にあらざれば眞に柔順なる品の良い内氣の伶俐もので親孝心とさしてゐるから、ツヒ／＼玉吉の情に引込まれて、割なき中と相成りました、斯ういふ工合でございますから、何かに事を寄て古町に通ひます、乃で烈しくなつてきました、が、伶俐な安太郎だから、半年ばかり通ひつめて見ましたが、ヤ、若此事が父上に知たるなら、夫こそ身の過失、殊に近々御家老の溝口大膳どのの息女が、此方の妻となる御内役を母人から承まはつてみれば、右やうなところへ通ふといふは、甚だ宜しくあるまい、と我胸に

問ひ腹に答へて、遂に弗つり古町通ひを思ひ切てしまひました、而して相替らず學問の修業をいたして、其うちにモウ彌よ婚禮の支度結納交、近日結婚といふことになつて、兩家ともに其支度に毎日騒ぎ立てといふやうなわけ、最早君公にも御届と相成まして、彌よ明日は婚禮といふ前日、書齋に籠つて安太郎が本箱を開きして本を取出す、本の間からハラリと落た手紙、取上てみれば鳥羽屋の玉吉より贈りし玉章、安、オ、此は玉吉といふ、賤い勤めはいたしてをるなれど、容貌と申し心得と申し、此手跡の美事なること」と押抜いて見ますると、一言申し上た

いことがあるによつて、是非お目通りをしたいと、いふ文面、
 安太郎は、ア、彼ざりであつたが、此方が此まゝ結婚いたしたことを影にて承まはつたなら、不實なものと思ふであらふ、身分が違ふ彼の玉吉、夫婦になることは出来得んが、此ア今夜参つて、明日結婚をいたすのだから、篤と諭して手當などいたして、得心さして戻つて來やう、夫でなければ何となく気がしり、此方とても心苦しい、此ア然うしてやらふ、乃で安太郎が其手紙から如何にも、惘然に考へまして、母親の手前は、安宜しくお父上に」と沼垂から駕籠を仕立て大急ぎで古町通りの鳥羽屋へやつて來た、鳥羽屋の女中のお仲が、此は旦那さま、入ッしやいまし、マア弗つりも見限りでございまして」安、ヤ、此方も何ういたしても、當家へ参

つてをる暇がないので、夫がためにツヒ〜斯やうに遅なはつたワエ」仲、餘りも見限りでござい
 ます」安、就ては玉吉は何うしたんだ」仲、ハイ、モウ旦那さまの方へ幾度も手紙を出しても只
 の一度のお返事もなく、夫れゆゑ實は玉吉さんはお怨み申してをりました」安、ヤ、尤も至極で
 ある、數度送りし手紙は封だに切らず火中いたし、心の中に思ひ切たる此安太郎、ア、怨んでを
 ヲたらふ」と思案をいたして、安、何うか早く呼んでくれい、酒肴の用意をしろ」是から酒肴を命
 じまして玉吉の來るのを相待てをる、お膳部の用意、鳥羽屋の女中お仲が夫に出で酌をしてを
 る、其うちに玉吉が夫へ出まして、次の室からハツと手をついた、安、オ、玉吉、久しう會んで
 あつた、此方へ入れ」玉、ハイ」と次の室にゐて此方の座敷に入らない」安、ナせ、其方は此方へ
 入らんのだ」玉、イ、エ、此にて仔細はございせん」安、母に異りはないか」玉、ハイ、丁度今日
 が母の三十五日でございます」安、エ、ツ、偕は和女の母親はモウ亡き人の數に入りしか」玉、ハ
 イ、長い間御厚恩を受し旦那さまへ、何うか息あるうちに一言謝辭を申し上げたいと申してをり
 ましたので、何うか旦那さまにお目通りをいたしたいと、屢々お手紙を上げましたが、只の一度
 のお返事さへも此なく、其うち母は申し暮して相果せしでございます」安、ヤ、夫は氣の毒なこ
 とをいたした、夫とは知ずにツヒ〜何や彼や用事多ければ、遂に此方へも出向こと能はず、

嘸和女も落膽しであらふ」玉「有がたう存じます」空「何故此方へ入らんだ」玉「ハイ、此で仔細はございませぬ」空「許すから此方へ入れ」其うちにお仲が、仲「何か話してもございませうから御免あそばせ、一寸お銚子をと、宜い工合に其所を起つ、其跡で容子を見ると、玉吉は疊に手をつき下俯向て何となく悄然としてをる、空「コレ、氣合でも悪いのか、何うした」玉「旦那さま貴郎さまは近々御家老さまのお嬢さまと御結婚ださうでございませぬ」空「エ、ッ、何うして其事を存じて居る」玉「ハイ、餘り御沙汰がないゆゑに、當家の主人を頼みまして、母の病氣明日にも知んといふ場合、夫ゆゑ一言願ひをあげたいと存じまして、容子を探りに遣はしましたところ、御婚禮のお支度でも忙しいといふこと、賤しき勤めをいたす妻、お見捨ありしも道理、切て彼れほどまでに仰せられたことなれば、斯ういふ事情で何うしても婚禮しなければ成んから、其方は斯うせいと、打明て下すつても宜しからふと、今日までは身の薄命に是非もないこと、思ひあきらめて居ました、併し、旦那さま、此を御覽下さいまし」と突然次の室から差出した、空「扱は何なるぞ」と取上見れば一つの封書、然も上書は書置の事としてある。

空「此は怪しからんと扱くも遅しと讀下すと、充分覺悟の體、其手紙を渡すと玉吉は直に逃出さんの有様でありましたから、空「是はしたり」と早くも押へ、空「ヤ、其方は心得違ひをしては

ならんぞ」玉「ハイ」空「マア待て……實は言れて面目次第もないが、其方に手當をいたして、一旦誓した約束なれど、思ひ諦らめて貰はふと存じたんだが、何で其方は死ぬるなぞといふ無分別な了簡を起した」玉「ハイ」と言ながら安太郎の手を握りまして自分の懐中へ差入ました、スルト腹帯を締てをります、空「此りや何うしたのだ」玉「ハイ貴郎さまのお胤を孕して、モウ今月が六月でムいます」空「エ、ッ、夫は惘然千萬、今我胤を孕した此玉吉、此ま、捨る其時には、此玉吉のみならず、我子は暗から暗へやらねばならぬ、ア、何うしたら宜らう」と流石に中山安太郎思案にくれました、空「待て何うなるものではない是といふのも定まる因縁、ア、お父上や母上にも濟んが、此ままでは此女が死ぬると思ひ、若氣の過失とは申しながら、此玉吉の手を取つて一室の内に引入れて、空「決して心配するな、斯なる上は假令主親を離れ浪人するとも、其方を捨ておかん」玉「お嬉しう存じます」此から玉吉は機嫌をなほして、安太郎の傍らへ進みまして、其夜のうちに當家の身の代金を拂ひまして遂に夜の明ないうちに越後新潟を、玉吉を運ま

して立出る。

此方は中山安左衛門の家、當日結婚といふのに、肝腎なる伴安太郎が不在、薄々是を知たるところの安左衛門、新潟の古町に人を遣はして探らしてみれば、面目なや伴安太郎は、玉吉とい

ふ藝妓を連れて新潟を立退たりとある、スルト此安太郎が姿を隠したといふ事を聞いて、嫁御寮となるべき、家老溝口大膳どこの娘は、思ひに思ひ込だ一生の、華燭の式をあげやうといふ當日に二世と定める夫の行方が知ぬなどは、假令行方が知ずとも、妾は中山の嫁なり、身は實家でありといへど、最早心は中山家に往てをるも同様、夫をお見捨あそはすとは、餘りのことにお情けないと、遂に大膳どのの令嬢は、爰に意を決して美ごとに自殺を遂られた、ヤスラなりすると、藩中の騒ぎと相成りましたが、中山家は此事を承まはり、實に何とも申す言葉もなく、一時は大騒ぎになりましたもの、肝腎の御安太郎がをらざるゆゑ、父安左衛門どのよりは、大膳どのの方へ此由をお謝をなされ、如何とも人々に合せる顔もない、と言つて、爰に謹慎をしてお届をなさる、スルト君公に於ては此事についてお氣遣ひあそばされ、扱々安左衛門の伴は、如何なる悪魔の魅入りしか、婚姻の式を擧べき前日に身を隠すとは何事なり、と眞に有がたき君公のお言葉を洩させたまふ、モウ此事につきましましては藩中の噂々々でございまして、ところが大膳どのもお武家でございすから、是非に及ばん、謂ゆる佛説に申す過去の因果縁といふのであらふ、と御自分の娘の最期を心のうちでは慨かれましたが、表面では斯く申されまして、中山家へ對しては聊かも苦情がましいことは申されない、乃で忽ちの間に此噂

も薄らぎ其まゝと相成りました、依て君公へは伴安太郎勤當のお届をなされて、安左衛門殿は只管君公の御沙汰を待た。

ところが其後君公より、格別の儀をもつて安左衛門の心中を察する、相替らず勤務せよ。との仰せ、眞に面目次第もなければ、相替らずお勤をなされる、此方は中山安太郎、新發田や沼垂に斯る大騒動の出来いたしするの不知ず、玉吉の手を取まして逃れたのが、奥州會津の傍に坂下といふところがある、此坂下に以前父の家に仕へてをりました、茂助といふ者がをります、差あたり往べきところもないから、坂下の茂助を頼らふといふので、茂助を尋ねて参りました、ところが此茂助といふ男は、坂下に立歸りまして小間物などを商なひ、當時は坂下の遊女町廓内へ入つて商ひをいたしてをりました、夫に其尋ねて来る、容子を訊と、坂下も随分廣いところではございまして、直に分りまして、若い武士が美しい女を連れて、夜中茂助の家に来まして、安、お頼申す、
「茂、ハイ誰人さまで」茂助とののは御在宅でござるか「茂、誰人さま」と言ながら表戸を開いて茂、貴君は中山の若旦那さまではございせんか「安、ヤ茂助、爾も毎もながら異なることもないか」茂、何しろ此方へ入りあそばせ、私も此通り無事でをります、貴君は一人でございすか、お運なまでもございす

一六
すか「安」實は面目ないが連がある」茂「サアマア此方へ」後からしとやかに入りました玉吉、
茂「若旦那さま、貴君は何う遊ばしました」安「種々仔細があつて、此度國を立退て参つた、只今
何れをさしても知己とはなく、フト途中で其方のことを思ひついて尋ねては参つたが、茂助、
當分世話をしてはくれまいか」茂「何ういふ事か存じませんが、兎に角此方へも入りあそばせ」
茂助は我儘主人の若旦那さま、殊に親旦那さまには、此身を御丹精下すつたお影で自分も小金
を殘したために、此の坂下へ参つて小間物の商ひをしてゐる、其御恩のほどは忘れない、然れ
ば此若旦那さまをお世話申すも、仕へた親旦那さまへの御恩返しと、斯う心得まして、乃で段
々の御容子を伺がふと、無理ならざる人情のお話、乃で茂助が、茂「何うも定めし後にて大旦那
さまが、夫は〱御迷惑を遊ばすでございませうが、又貴郎さまは、御婦人の腹には赤子を孕
しをり、蒼の花を散すのみならず、赤兒を暗から暗へやらねば成ぬ御情合、此りや御無理のな
いこととございます、マアマア兎に角爾かたにお在あそばせ、其うち私が彼方の御容子を探
り申しあげ」爰で漸うのことに落着まして、兩三日厄介になつてをりますうちに、座して食
へば山も空しくの例ひ、聊かの金子のある内に何うにか活計の法を考へたいと、茂助に相談す
ると、茂「私は昨年女房が亡くなりましたして、目下獨身者でございます、夫で出商ひをいたしてをる

のですから、貴君方御夫婦で何かの師匠でも遊ばしたら如何でございます」乃で幸ひ玉吉は、
琴も三味線も唄も、遊藝にかけましては、大家の娘で幼年から仕込んだ、夫であるから、謂ゆ
る藝は身を助ける薄命となつて、爰で茂助の世話で、藝妓其他近所の子供などが稽古に来る、
又茶の湯なども仕込むといふ、安太郎は幸はひ手跡も確でございますから、五六人近所の子供
を集めて手習の師匠をする、夫がために何うぞ斯うぞ致してをります、茂「マア〱此で、何う
にか土地の人の世話をなされて貴君御夫婦、坊ちやんでも生れるのを待遊ばして、其坊ち
やんでもお連申して、私がお謝に参りましたら、お國表の親公様も、御勘辨遊ばさんことも有
ますまいから先づお身體を大切に遊ばせ」と茂助が慰めてゐる。
其うちに玉吉のお玉は、十月十日の月満まして、玉のやうなる男の子を生ました、近所からあ
稽古に来てゐる娘の親にて巧者のものや、或は産婆等が参りまして當時世話してくれました、
夫婦の喜びは一方ならず七夜に安之助と名前をつけました、蟲氣もなく漸々と日が経ます、
其うちに此子が漸う二歳になりまして、片言交りに物を申すやうになる、お玉は子供を育てな
がら傍はら稽古をしてやるなど、餘ほど骨の折ます次第、其うちに此お玉がフトした風の心
ちに臥りました、醫師も薬と手當もいたしましたが、遂に其甲斐もなくいたしてモウ〱〱

可んといふ事になりました安、茂助や」茂「ハイ」安「真に御苦勞だが、醫師を迎えてくれまいか」
 茂「ハイ、宜しうございます」直に始終願つてをります園田孝庵といふ醫師、早速見舞に参
 りました、安、コレ玉、確かりしてくれよ」玉「ハイ旦那さま、安之助は何處にをりませうか」
 安「坊は此處にをるぞ」坊「母さま、母さん」といふ愛らしき聲を出て母親に縋ります、安旦那
 那さま、如何やうにお手當下さるとも、モウ私は快なる見込もございませぬ、貴君は身も御
 大切に、安之助のことを何分お願ひ申します」安「コレ、哀しいことを申すな、悴のことなぞ心
 配するには及ばん、早う快なつてくれんければ、此安太郎が何とも致し方はない、此りや玉、
 玉」玉「ハイ、最う旦那さまのお顔が見えなくなりました」苦痛の中に其一言を洩す、流石の中
 山安太郎、思はずハラ／＼と落涙をいたす、安「此一子を殘して此世を去る其方の心中思ひや
 れる、必らず悴安之助に心を配となかれ」といふ内にお醫師がお入來になる、茂助も傍らから
 茂「御新造さま御新造さま」と聲をかける、茂「只今先生がお入來下すつた、お氣を確しかにお持
 なされ……ヤア坊ちやまは私が抱ます、お泣なすちやア可かせん、温順くしなくつちやア可
 ません」と子供を抱てゐる、流石母子の別れ、血が知すものと見えてシツシツと泣ます、先生
 は、真にも氣の毒であるが、最早此れが天命である、是迄の間御丹精下しおかれ、斯までお

手當をお盡しになつたが可んので、モウ私も諦めした、後々の御供養が御肝要で」とお醫師
 は手を引く、乃で泣々葬式は、彼茂助の寺へ葬むり、初七日も経ち、二十七日、三十七日、三十五
 日、四十九日、百ヶ日、弟子の人たちは、假令一日か二日でも師匠と頼んだお方ゆる、爰に各
 自皆弔詞に來り、或は安之助に物を持って來たりして種々申し述る、で、此子の成長を待のでご
 さいまするから、安太郎も力なく多くの子供を集めて寺子の指南、其うちに安之助が、三歳四
 歳五歳と蟲氣もなく成長をする、殊に伶俐ものでございませぬ、常に泣たこともない、モウ六歳
 の頃ほひから手習を仕込む、書物を讀せる、七歳八歳、九歳、十歳、十一と光陰矢のごとく、
 遂に此坂下にをります中山安太郎は、早や三十三歳となつた、嗚呼去る者は日に疎し、我
 妻玉も世を去て十年、何日まで斯る貧しき生計をなすか、と折々太息を洩すばかり、其うちに
 此茂助が病氣となりまして、醫師も藥の手當もいたしましたが、遂に養生叶はず没しました、
 親類も二三ございませぬが、皆力のない者ばかりだから、安太郎が主となつて爰に葬式も相濟ま
 した。
 相變らず安太郎は手習の師匠をいたしてをりますうち、重なる不幸が續きまして、茂助が死で、
 二月ほど経ますると、身體に無理がございませぬから、風を冒たのが充分の養生も出來ず、ドツ

カリと急に悪くなりました、サア手習の師匠も出来かねる始末となり、今日は先生のお身體が悪く、と子供が稽古をしないで歸る。夫が一日や、二日ではないから、漸次／＼に寺子の者は減てしまふ。其うちにモ一人も来なくなりました、近所の者が安之助に對つて、今お父さまは何うです」ぐらゐ尋ねるだけだ、搦て加へて持病の疝癪、折々胸にさし込で苦しむ時に小刀の柄頭を鳩尾のところへ當て、ウーンと苦しむ、僅か十一になる安之助が、倅「お父さま、確りして下さいましお父さん此邊でございませうか」と父の安太郎を介抱をする、安「ア！最う宜いぞ、モウ宜しいぞ」倅「ハイ、お父さん確りして下さいまし」安「ウーン……コン、ア！癪に良い薬を求めて来てくれるよ」倅「ハイ、お父さん少し待て、下さいまし」と子供心に氣遣しく思ひました。薬を求めて来いと父の言葉に、掻集めましたる鳥目が僅か八文、其始末でございませうから、今までとて衣類も届かず、眞とに鹿末なのを着て藁草履を穿まして、板下の宿の薬屋へ參つて、倅「癪に良い薬を下さいまし」と言ても、八文の鳥目では、何の薬種屋へ參りましても買ふことが出来ぬ、何うしたら宜らふかしらん」といふので段々とかへりましたるは、坂下の宿の越後街道に對する追分になつてゐるところ、其所でウロ／＼來ました時に、其所には立揃茶屋がございまして、一人のお武家がゐらつしやる、尤も御老人、若黨に鎗持、

此方の椽臺に腰をかけて何か頻りに話をしてゐたが、俄に其鎗持がウーンと言つて引倒かへつた、着「ヤイ五助、確かりしなくツちやア可ない……旦那さま、五助が又持病の疝癪を發しました」且「ソラ反しては可ないぞ」着「ハイ、五助、確かりしろ、五助確かりしろ、誰か水を持って来てくれる」五「ウーン」と齒を食しはる、着「エ、反ちやア可ない、然う反と可ないのだ、ウン、力のある奴だ、ウーンと押つけてゐる、旦那様が腰から印籠をお取出しになりました、且「レ、薬を遣はす、口を割てつかはせ」着「エ、旦那さま、五助が齒を食しはつてをッて口を開かせん」且「然やうか、然らば此薬を嚙碎いて口うつしにやつて遣はせ」着「エ、此五助の口へ、此ア驚いた」且「コン／＼汚ないことはないから然やうしてやれ」着「ヘエ、是が奇麗な女か何かなら宜いが、五助の野郎へ口うつしとは、何の因果で此思ひ」且「コン、何をグツ／＼致してゐる猶豫いたしてはならん、早く致して遣はせ」其うちに若黨の佐兵衛が薬を嚙碎いて、五助の口を割て口うつし、水を吞せる、背中を摩り胸を摩りする内に、其薬が胸へ通る、忽ちその間に苦みは止り目を開いて、五「ア！宜い心もちになつた」且「五助」五「佐兵衛さん、何だい」且「佐兵衛さん何ぢやアない、只今其方は相替らず癪を發したんだ、困るなア、其方は悪い病がある」五「ア！爾と話しをしてゐるうちに今日は苦しくなつた、夫から先は夢現つ、今日は不思議に

早く快なツた」佐夫ア只今旦那さまが下すつた、御靈藥が効たのだ」五「夫ア旦那さま、有がたう存じます」

且「コレ／＼五助、其方は悪い病がある、能く養生をせんと可んぞ」五「ハイ、有難うございませす、五六年前から此癩を受えまして、發りました時は如何なに苦しむか知ません今日は幸ひお藥で忽ち快くなりました」且「是は君公から頂戴した癩の大妙藥、此藥を服用ときは、如何なる癩でも立どころに癒る、是は公儀の御典醫半井通仙院どのの御配劑と承まはる」五「然やうな結構なものを下郎にお與へ下しおかれまして、有がたう存じます」且「ヤ、此方に謝辭を申すより、佐兵衛にヨウ謝辭を申せよ」五「ヘエ」且「佐兵衛が其方の口中に藥を口うつしに致してくれました」五「エツ、アノ佐兵衛が大汚ない」佐「ヤ、此は怪しからんことをいふ、其方が汚ないどころか、己が汚なかつた」立場の主人も、且「ヤ、何うも良いお藥もあるものでございまして、實に結構な御妙藥で」且「ア、此々、只今此に差置た印籠がないが」佐「ヘエ、お印籠がありませんか」夫は何うしましたことで、其邊に落はいたしませんか……然う言は只今此所に、十二になります子供がウロ／＼してをりましたが、彼の子供でも持て往はいたしませんか……ア旦那さま、彼所へ駆て参ります彼の子供がお印籠を持てをります……エ、太エ子供だ」若黨の佐兵衛

が此子供の跡を追かける。

此方は立場茶屋の主人が、且旦那さま、飛だこととございませす、彼は此宿に古くからをります浪人者の子のやうに思ひませす、何うして彼様なことをしたらふ」と言てゐる其間に佐兵衛は飛で往て、佐此子供、飛だことをする奴」と押へる、子「ア、御免下さいませし」といふのを襟上を取つてズル／＼ズル／＼引摺て来る、中山安左衛門どの此を見て、且「ア、此々苛酷ことをするな」印籠を佐兵衛は撈取て、且旦那さま、太い奴でございませす、子供の癖に大膽にも是へお置になつたお印籠を盗んで逃出不埒な奴」子供は地面へピツタリ座つて兩手を付て、子「何うか御勘辨下さいませし」且「コレ／＼、其方は何歳になる」子「ハイ、十一でございませす」且「ウー、十一歳になるか」子「ハイ」且「此印籠が欲しいのか」子「ハイ」且「扱は此根付が欲しいのか」子「ハイ、エ」且「ア、分つた、奇麗ぢやによつて、御緒の珊瑚珠の玉が欲しいか」子「ハイ、エ」且「何が欲くつて其方は此印籠を持て逃出したか」子「ハイ、お父様が御病氣でございまして、長く煩らつてをります、夫にお藥を買に出ましたら、お鳥目の足ないところから、お藥を求めることが出来ませので、自宅に戻りますれば、お父さんがお苦しむ、何うか良いお藥が欲しいと存じて是へ参りましたら、アノお鎗持の方が御病氣で倒れると、此お印籠の中のお藥をお服用せになり

ましたら直にお癒んなすつたんで、此お薬をお父さまに進ましたなら、御病氣が直に癒るだらふと存じまして、急に欲くなりましてございます」且「ウーン、然やうか、他の盗とは事違ひ、父の病氣を氣遣つて……」中「王「ハイ」且「其方は父ばかりにて、母はないのか」王「ハイ、母さまは私が二歳の時に病没しました、母さまのお顔は存じてをりません、お父さまのお話して私が二歳の時と聞てをります」且「夫りや又惘然なものぢや、而して其方の父は、長い間の病氣か」王「ハイ」且「フッ、夫は又惘然なものぢやな……母に會たいか」王「ハイ、亡くなりました母さまのお顔だけは覚えて置きたうございます」且「實に道理だ……」

乃で中山安左衛門どの、其子僧の腮へ手をかけて御覽になると、何うも我が倅の安太郎に、瓜を二ツと言たいが、割で其まゝ、見ると大人の衣服を子供に仕立なをしたもので、丁度肩揚のところは紋どころがついてゐる、其肩揚が下てゐる、其紋を見ると何うしても我家の定紋、中「ハテ」と腮へ手をかけて、チツと安之助の顔を御覽になつたが、中「其方の父の姓名は何と申す」王「ハイ、中山安太郎と申します」中「エ、ツ、其方は何と申す」王「中山安之助と申します」扱は此邊に倅中山安太郎、浪宅を携えてをると見える、此子僧の容子と申し嘸かし艱難に陥つて居ると見える、ア、憎い奴ぢやと思し召て、中「コレ、其方に此印籠を遺すほどに、其方の父

に宜う申せ、親は罰はあてんけれども、天罰のほど思ひ知れ、ト能う申せ、宜いか」其方の爲にはと口までは出ましたが、中「是を興するから參つて能父に申して聞せい」王「ハイ……ハイ」印籠を其儘、お手渡しになされた時に、安之助此を押頂き、王「夫では殿さま御免下さいませ」中「早う行け」遙かに退つて此容子を見てをりました若黨佐兵衛、鎧持五助、立場茶屋の主入始め、且旦那さま、お印籠をお遣はしになりましたか」中「親の病氣と承まはり、如何にも惘然の少年ゆゑ彼れに遣はした」且「實にお情深い、嘸喜びませう」中「彼れは尋常の盗みではない」乃で其まゝにいたしまして立場茶屋をお立出でになる、且「ヘエ、旦那さま、お氣をつけ遊ばして、此は又有がたうございます、御家來さま御機嫌ヨウ、有がたう存じます」一々手を附て茶屋の主人が口誼をする。

此方は中山安太郎、小刀の柄頭を鳩尾のところへ當まして、安「ウーン……ウーン」と呻つてをる、然所へ表から駈入しまして、王「父さま」安「オ、安之助、戻つて參つたか」王「お父さん、お薬を進ますから召あがれ」印籠の内から取出して其薬を父に與へ水を汲で參つて此を服用せる、立どころに其苦しみを免かれる、安「ア、快い心もちに相成たが、シテ、斯やうな結構なお薬は何所で其方は求めて參つた」王「お父さん、此お印籠を頂いて參りました、此お印籠の中のお

薬でございます」安「ナニ、何うして斯やうなものを」子「ハイ、お薬を買ふと思つてもおたから
 (錢)が足りないから、何所でも賣てくれせん、困つて此方へ來ますと立場茶屋で鎗持が倒れた
 のを、此お印籠の中から薬を出して飲せになつたら、直に癒りましたから、坊は此お薬が
 欲くなつたから、此お印籠を盗んで逃しました、然うしたら追かけて來て、私を掴まへまし
 て酷い目に遭ました、スルト其お年を老たお父さまに能似てゐるお爺さまが、私のことを種々
 お聞になりまして、私の顔を能見て此お印籠を下さいました、而して歸つたら父に能う申せ、
 親は罰をあてんが、天罰のほど思ひ知れ、と仰しやいましたよ」言れて、安太郎能々夫なる印
 籠を見れば、お父上が御秘藏になる、君公より拜領の、般若の面の金の高時輪、珊瑚珠の絡繰
 苗香の根付、安扱はお父上にてありしか」押頂いて、餘りに重いによつて其印籠を開てみれば
 一番深い中に一ばいの額銀がザラ〜。

安「ハ、ッ……扱はお父上が此邊を御通行に相成は、江戸表からお歸りなるか……コレ、其方は
 其お武士を能う見たか」子「ハイ、兩方の眼に一ばい涙をためてお在でございます」安「尤もだ、
 其お方は未だ遠くは行まい、餘所ながら御尊顔を拜したい、早く參れ、コレ、今こそ名乗て聞
 せるが、最前其方が此お印籠を頂戴したお方は、此父のためには大切なる親なり、爾のために

はお祖父さま」子「お父さま、彼は祖父さまでございましたか」安「オ、世にある時には彼の
 爺さまのお傍らにあつて、初孫のお喜びあるを、今は不孝にして斯る零落、仔細あつて表向さ
 る目通りは叶はぬが……サア早く參れ、順道を參つては可んから、此田甫の畔道を分て行ば越
 後街道、必らず途中にてお目通りの能はんことはない」と靈藥の力をもつて俄かに氣強く相成
 ましたる中山安太郎、伴安之助に手を引れ、安「早く〜」と心は急ぐ、畔道を傳ひたることに
 て、向ふの一筋の堤を見ると、子「お父さま、お祖父さまが彼れへ……」安「コレ、大きい聲をし
 てはならんぞ」と堤の下にハッがございまして、夫に刈取ました稻がズウィツと掛てございま
 す、其ハッのところへ坐りまして、其影なる稻の間からズツと首を出して堤を見上る、其傍ら
 に伴安之助も坐つて、斯う堤を見上る、若黨鎗持はズウィツと後より、御自分だけは一人先に
 アー味さな世の中や、現在の伴が此邊にをるといへど、武門の例ひ、一旦思ひ切た不埒な
 伴、勘當してみれば餘所ながら會ふことも能はん、と心のうちでは如何な風に相成てをるか、
 姿ぐらゐ見て遣はしたい、とブラリ〜と安左衛門のお歩行に、ガサリと言がしたから、思は
 ず杖をヒヨイと留て堤下を見下しになると、お羽うち枯した中山安太郎、兩眼凹んで頬骨高
 く今にも夫へ倒れんといふ有様、只だ無言で「安「ウム」と謹慎の體で堤を見上る、見下す中

山安左衛門、思はず中「此りや倅、ではない畜生……、其方ごとき者に言葉を交す中山安左衛門にあらざれど、ア、只今此に控える孫安之助に、何の罪もあらざれば言て聞す、其方が心得ちがひより一時は中山の家の騒動、其家老大膳どの始め、君公へ對して此方の胸中は今更のごとく、ア、思ひ出しても一刀兩断にしたい心だが、行方不明の其方、何とも致し方なく、遂に後々の始末はいたしたるが夫を苦に病み其方の母は、遂に夫が病根となつて世を去たワイ、不孝者畜生め、殊更お氣の毒なは大膳どの息女、其方に見捨られしとして即日自害、可惜者の花を其方の不所存から散らすやうな事になつたは、返すくもお氣の毒の至り、併しながら思ひ回らせば、然やうな孫が世にありながら、孫なるか、祖父なるか、と立派に名乗ることの出来んは、其方の心得ちがひからである、ア、其方には會わけには參らんが、此小倅、我が爲には實の孫なり、爾を世話することは能はんけれど、孫なれば世話して差支えなければ、何日なりとも世話して遣はす、然れども爾のごとき有様では、然るべき教育とでもでき兼ねる事であらふ、コレ安之助「王「ハイ」中「其方の爲には現在の祖父なるぞ、ヨウ面を見覺あけ」王「ハイ」中「未だ年端も行ざれど、爾の爲には父へ對する孝道のほど感ずべし、コレ畜生、能承まはれ、爾の如き親不孝者に、斯る親孝心の者が出れ出たるか……サ早く家來の目に留らざるうち行け……行

け」空「へ……」

中山安太郎は何の一言もなく、只ハラ〜と落涙いたして空「是までの不孝の罪は免し下しおかれたく、併し母人には最早や此世を去りたまひしか、夫といふのも拙者の不孝から、御怒りあらせらるゝは御無理にはあらねど、我倅を生し母親の、懷妊なしたる其ために振捨かねた拙者が未熟、遂に此が不孝となり、斯くまで母人に御苦勞かけるのみならず、現在の御父よりお言葉もかける、是も能はんとは情けなきことござる、今は後悔先に立ず、併し是はお父上に申すのではござらん、是なる悴安之助に申すのでござる」中「ア、最早夫にて相分つた、行け……行け……だが追々寒空にむかひ、其扮装は何ごとぞ、ア、長い月日も……イヤ、早く行け」王「祖父さま御機嫌よう」中「オ、其方も丈夫に生長せよ」王「ハイ」と其うちに後の方から若黨の佐兵衛、鎗持の五助、佐、旦那さま、何ぞ御用でございますか」中「イヤサ、用ではない、餘り眺望が宜しいゆゑ、思はず足を留て、四方の景色を眺めてをツタワエ」佐、エ、此邊は眺望は宜しうござります」中「ア、然やうぢや」ト後ろ髪を引るゝやうな思ひをなされて、茲に中山安左衛門、杖に縋つて老足を進めたまふ、何の氣もつかざる若黨佐兵衛、鎗持五助、高聲に話しどしながら此場を過る、安太郎は密ツと起あがり、お進みなさるお父上の後ろ影を見つめて、

安之助も立上り「王」お父さま、祖父さまが彼所に……」安「シッ……」終にお姿の見えなくなるまで延び上り……お見送りをいたし、熱き涙をハラ／＼と流し、安「早う悴 参らふ」王「お父さま、彼の立派な祖父さまは、彼は坊の祖父さまでございませうか」安「ア、其方には現在の祖父さまぢや」王「嬉しうございます」安「オ、尤も至極ぢや、コレ、父は此通り病身であるし、萬一父が病死でもいたした時には、越後の新發田の溝口さまの御海中、中山安左衛門さまといふは、即ち其方のためには祖父さま、今も目通りをしたお方だから、お尋ね申しても世話になれよ」王「ハイ……ハイ……、父さまも一緒に歸りあそばせ」安「此方はナカ／＼もッて家に居ることは能はんのぢやぞよ」王「ハイ」言ながら手を引あふて我が破れ家に立歸る、是から印籠を出して再三押頂だき、安「ア、親の情け、承まれば、母人は我等の不孝に遂に世を去りたまひお父上は最ども瘦れあそばした、本來此方が彼の時嫁に迎へて、立派に中山の家を相続をいしたなら、今ごろはお父上は御隠居あそばして、何んの御苦勞もあらざるに、御老體の御身を持せられ江戸表の御歸り、併しながら圖らずお目通りをいたすも、未だ父子の縁の盡ざるか、一子安之助が後年の是が幸福であらふ、亡き母人のお紹介か、是が二歳の時に亡なりし亡妻玉の紹介にて、今日斯る僥倖を蒙りしか、アラ有がたや嬉しや」と印籠の中の金を取出し、是を

財布に納めまして、印籠は押頂いて傍らへ載せ、ア「此さへあれば此貧苦の中も、當座の凌ぎに充分なり、此悴安之助を越後の新發田へ送り遣はし、お父上の御教訓を願はよか、然もなくんば叔父菅野の許へ遣はさよか、如何いたして宜らよか、と左つ右つ思案をするうちに、日はトツブリと没果てる。乃で安太郎は父の情によつて金子を與へられたによつて、其夜は安堵いたして、悴の安之助の傍らへ臥りました。スルト最前安太郎が、印籠から取出した金子を財布に入ましたるのを、窓の障子の破れから覗いてをりましたのが、信州の村雲無宿の喜助といふ無賴者、此會津の坂下へ来て、少し身體がいそがしくなつたから、高飛をしやうと思ふのだが羽がい(金)がなくつて、何う工面をしやうかと思案しながら、差かゝつたのが中山安太郎の住居の傍ら、覗く氣もなく覗いた時に、財布が目につきましたのを、一目睨んで、甚畜生め、此いつはべた、一人は子供だし、一人は病はうけてゐる浪人、此奴は今夜忍び込で彼の財布を奪ひ取りやア、羽がいが出来るのだ、と我と我胸に問ひ腹に答へて、其晩父子の寢息を伺ひ密かに忍び込ます、喜助が安太郎の首にかけてゐる財布の紐を密ッ取と取て、懐中に入つてゐる財布を引出さよとグイと引と安太郎が目を見

安、曲者ツと聲をかける、かけられて喜助は南無三と、長脇差の柄に手をかけ、抜打に切る、燈灯は消て真暗なところへ、不意に浴せかけられたから安太郎も武藝の心得はあつたなれど、暗夜の礫は防ぎがたくの道理、不意の重傷にアツと倒れるやつを、ボウーンと蹴返して、其まゝに致して戸外へ出ると、今まで真暗な空が少しく雲切がして、月が朧に現はれた、其月あかりに財布を透して莞爾笑ふ、

スルト父の傍らに臥つてゐた安之助、父が曲者ツと言た聲に目を覺し、十一歳ではございますが、膽力は大人も及ばぬくらゐ、密つて容子を伺ふうちに、父はキャツといふ有さま、其うちにミツ／＼と足音をさして、曲者は戸外へ立去る體に、安之助も密と起出で戸外を覗くと、曲者は財布を隠して月明りに眺めてゐる、爾れ父の體逃さじぞ、と早くも父の傍らにございます脇差、拵へは除て賣てしまつたによつて、込の部分と眞田の紐で巻である、夫を引提げ忍び足に近寄つて、拳も通れと、曲者の右の肋をのぞんでブツツリと突通した、ウーンと尻居に倒れるのを、又もグイと抉りあげた、アツといふやつを、引こ抜て透さず頭から浴せかけたから、村雲の喜助は、ウーンと重傷の痛みに進退自由にならず、其うちに安之助が、王皆さん来て下さいよ、賊が入りましてございます」大きな聲で吐鳴たてた、甲「ソレ浪人者の家へ何か来たのだ

らふ」と忽ちの間に近所中、蠟燭をつける、大勢其ところへ集まつて来る、段々容子を聞けば此通り、見れば安太郎は殺されてゐる、甲「何うして此曲者は」王「お父さまの響だから突てやりました」此からいたして直に坂下の宿役人に、其次第をお届をいたしました、お検視の出張ましたる時に、幼年とは申しながら、思ひ切て能も此通り肋を抉つた、其場を去す父の仇を打たのは天晴なものだ、と皆お賞になる、乃で殺された安太郎は、茂助を尋ねて来た者であるが、其茂助は先年死んでしまつたから、近所で其事情を知てゐる者は今は澤山ない、安之助は十一ではございますが、物が能分るから是にお尋ねになると

安「越後新發田の溝口飛騨守の御家來の中山安左衛門といふは私の祖父さまでございます、昨日は祖父さまにお目にかゝりました、此金と印籠は祖父さまから頂きましたのでございます、父さんと共に祖父さまに、堤の下でも目にかゝりました、私だけは引取てやると祖父さまが仰しやいました」役「夫では此屍骸の始末をして、越後新發田へ届け遣はすが至當、就ては其筋でやらふか、土地の者がするかといふ、御相談になる、村雲の喜助は素より無宿者でござりまするか、小屋者、非人の手をもつて始末をいたす、安太郎の屍骸は土地の者が寄つて、是を火葬にして瓶に收めて新發田へ届けることにした。

借夫れから右の役人の御相談につきましましては、土地に五兵衛といふ者がございまして、此が、
 五「イヤ、私の子供が此中山安太郎どの、御健康の時分に、一二年お世話を蒙りました、幸ひ
 私が此度越後の新潟に用事があつて参りますから、此子さんを送りまするだけなら、私が
 送つて宜しうございます」役「ヤ、夫は真に奇特なことである、然らば其方に任せる」斯ういふ
 事になつて、彌よ此坂下を安之助が立出でることになると、土地の人たちも、△五兵衛どんが
 遺骨と坊ちやんを送つて下さるといふに、斯ういふ鹿末な衣服を着せたといふては、土地の者が
 送る甲斐がないから、何しろ金もあるが、此金は悉皆先方へ届けて、子供衆の衣服だけ調へやう
 といふので、爰で坂下の宿で持寄て、安之助の服装から残らず支度をして呉れました、夫ゆゑ
 當時會津の傍の坂下には、安兵衛武庸の碑が某所に立てるわけでございます、乃で彌よ立出
 の時に、甲「夫では五兵衛どんと頼申します」五「私が請合申しますから大丈夫、御安心下さい」
 で安之助は年に行ないが、安「永々有がたうございます」低頭をした時に皆涙を流して、△併し
 彼の子も是から新發田へ往て祖父さまの許に居なされば結構だ」と一同見送つてくれました、
 乃で五兵衛が途中は安之助を馬に乗せ、頓て越後の新發田へ入りまして、中山安左衛門と諷ま
 した、夫ア大層なもので、何しろ新發田は越後屈指の都會でございまして、五「ア何うも立

派だ」と中山安左衛門の宅を伺つて来ると、當時は御城下にて御番頭五百石、夫ア横識なも
 のだ、直に相分りました、門構へでございまして、門を入れば玄關がまへ、安之助を連れて、安
 太郎の骨を収た瓶を脊負て、五「お頼申します、お頼申します」△何うれ……何分から参つた」
 五「ハイ、私は會津の傍の坂下の者でございまして、五兵衛と申します」△ア、然やうか、何用
 あつて罷り越した」五「此方さまのお孫さまのお供をしまして罷り出ました」△ナニお孫さま、
 御當家さまにはお孫さまなどはないが、夫ア何かの間違ひではないか」五「イエ、間違ひではご
 ざいません」△第一旦那さまは兩三日前にも戻りになつて、夫がために未御休息中であらうし
 やる、お孫さまとは怪しからん話した……何れだ、孫といふのは」五「是へと連申しました」
 △「此様な孫が御當家にあるものか」五「では、中山安左衛門様と仰しやるのが、未他にもござい
 ますか」△「御當家御藩中には、此方の中山安左衛門様ばかりで、他にはない」五「夫では確かに
 此方のお孫さまでございませう」△「お子様がいないのに、お孫さまがあるといふ道理はない、併し
 待てゐる、お伺ひ申すから」五「夫ではお孫さまの名前は、安之助さまと申します、私は坂下の
 五兵衛と申します」△「然やうか、控へてをれ」奥へ来て、△「申し上ます」中「何だ」△「ア、唯今
 會津の傍の坂下の五兵衛と申します者が、十二歳になります還ましい幼者を連れて参つて、御

當家さまのお孫さまを連れて来たと申しました、手前が御當家さまにはお孫さまはないといふに、何でも此方のお孫さまで、名前は安之助と申すのだと言て動きませんから、お伺ひ申します」
 執次の口上をお聞なすつて中山安左衛門、お心の中に、ア、懐かしい、夫では彼の坂下の宿を
 離れたるとき、堤下のハサに掛たる稻の影より、孫安之助を連れて悴安太郎が此方に會しが、彼
 の有様では悴安之助を育てること覺束なしと思ひ、此方が申した一言を方に、孫の安之助を送
 つて遣せしか」と思し召て、中「コレ」中「ハイ」中「夫は此方の孫に違ひない、參つたのか、
 會て遣はす」中「へエお孫さま……ウヘエ、夫ぢやア最う少と町噂に申せば宜つた」中「何を思
 圖く言てをる」中「へエ」安左衛門御自身にお玄關に出て、中「其方が五兵衛と申すか尋ねを蒙
 ひつた安左衛門は手前だ……オ、安之助か」中「祖父さま」中「オ、能參つた、アコレ家來ども、
 此は此方孫に相違ない、其五兵衛と申す人を此方へ通せ、サア構はんから、安之助此方へ參れ」
 嬉し喜んで安之助は祖父さまに頼りました、孫は子より尙愛の増ものなれば、中「遠慮ない、此
 へと、手を取つて引き上る、嬉し喜んで奥の一室へ伴なはれる、今まで權柄づけに言てをりま
 した執次、其の他が出て來て、中「是は貴君が五兵衛と仰しやいますか」中「最前貴君は、再三御
 當家には孫はないと仰しやいましたな」中「彼のお孫さまならございませす、他のお孫かと思つた

ものですから」其様に孫があるものか、中「先づ此方へ」と言て大層な扱かひ、中「此方へ」早速
 ながら五兵衛お許を蒙りつてお目通りをする、中「此度は孫の安之助を送りくれ、眞に満足に至
 り、何か、坂下において、此幼者についてお頼み申したものがあるか」中「五、申し上するが、恐
 れ入ますが、私は新潟へ用事がございまして御當家さまのお孫さまをお送り申した次第でござ
 います、就まして此方の親父さまは、お氣の毒なことでございませす、其事は私が申し上すよ
 り、坊ちやんが申し上た方がお分りが宜しうございませう」中「然やうか、コレ安之助、其方の
 父は如何いたした」中「祖父さま、彼の時祖父さまから頂きましたお金を、お父さんが喜んで財
 布の内にお納めになりました」中「オ、ッ、僅かな金を夫ほどに喜ぶやうになつたか」中「スルト
 其晩、お父さまが、坊は大きくなると祖父さまの許へ往と仰しやいました、楽しみにいたして
 臥りました、スルト夜中に、何だかガタ／＼といふ音で、坊が目を覺して見ましたら、曲者が
 入りましてお父さまは切殺されました」中「ナニ、曲者の刃に殞れしと、ア一言甲斐ない白痴奴
 だ、夫ほど未熟な悴めにあらざれど、不孝不忠の天罰を蒙り、扱は曲者の刃に殞れしといふ
 は、正しく天の御罰を蒙りしならん、シテ夫から如何いたした」中「夫からお父さまのお手當を
 するよりもと、曲者の容子を見ましたら、戸外に出まして、臘月夜に財布を眺めてをりますゆ

そ、背後から父さまの脇差で肋を突てやりました、倒れましたから、又眉間のところを切てやりました」中「ナニ扱は其方が其場に父を殺せし曲者を討取たか」安「ハイ、夫から御近所の人に来て頂きました」中「コレ五兵衛、只今幼年の安之助が申すこと、夫に相違ないか」五「其通りでございます、土地の人も、御検視の會津様のお役人さまも、大層お譽めでございます、實に後世恐るべき者であると仰しやいました、而して其曲者の右の方の肋が扶つてございまして、臟腑が夫から出てをりまして、實に宜い氣味でございまして」中「フウーン……」

五「夫に此親公さまは萬事お心得のよいお方でございまして、全くお疲れ遊ばして能く眠りてございましてから、此ア逆も及ぶところではない、と皆氣の毒に思ひまして、實は此手前が脊負て参りました此お瓶は、此お方様の親公さまのお骨でございましてから宜しう」中「ハ、ア、扱は此中には、勘當なしたる奴なれども、斯く白骨となつて立ち歸れば是非に及はん、死すれば罪の消るもの、ヤ、是は五兵衛、眞とに喜ばしく存ずる其方も仔細は分るまいが、過し頃ほひ親に迷惑をかけて當所を立去たる倅、君公にお届として勘當いたしたる者は其後は彼地に足を留め、夫婦の中に此幼年の出来たるものと見える」五「ハイ私どもの子供なぞもお出の時から二年ほどお手習ひのお世話を受まして、此お方の母親さまは、お年は若い、眞に品の良しお奇

麗でしたが、此お方の二歳の時お亡になりなりました」中「ア、然うであつたか、夫も眞に惘然千萬兎に角其土地の者へは、此方も主を持つ身、罷り出て謝辭を申すわけに參らんから、此方から宜しく申しくれい」五「申し聞します」中「兎に角兩三日逗留してくれい」と強ての仰せなれど、五兵衛は町人、お武家さまの御身分ある家に泊るは、何となく窮屈、乃て一晚泊て頂いて、種々下され物がございまして、喜こんで此五兵衛は新海をさして出立に及びました、此方は中山安左衛門、何しろ孫に違ひないから、一旦勘當いたしたるから、御自分の爲には先倅分にしてあつた菅野六郎右衛門、此が只今劍道の指南番をしてをるで、中山安太郎のためには義弟となつてをつた、夫を迎ひにやりまして、中「實は安太郎の倅安之助が只今送られて来た、倅安太郎は其許も知る通り久離切て勘當したものである、其倅であつてみれば、假令孫であつても、惘然だが手許に置くも如何」安「夫は私がお世話をいたしませう、君公の方も私からお届けをいたします、乃て眞に羽振の宜いところの菅野六郎右衛門どから、此事を君公へお届をいたしました、然所が溝口飛驒守さまが中山安左衛門の一子安太郎が家出の後妻は世を去り、一人の老體をもつて忠勤怠たらず、折々御前に召れてお慰さめのお言葉等を下しおかれる程のお方、然れば、吾其安之助に目通りを申し付る」と仰しやる、で、十一歳の時に君公へお目通りをいた

しまして成身なしたる其時は、中山安左衛門の家相續の儀を申し付る、と仰せられ菅野六郎右衛門に對して、充分に文武ともに仕込めよとある、眞に何うも有がたい君公の言葉と六郎右衛門涙を流して受をいたして、御殿を退りまして此事を安左衛門に申聞ますと、安左衛門は御殿の方を伏拜んで、三拜九拜をして君公のお情によつて、此幼年なる安之助に中山の家相續の、君公に思し召を持って下さる、ア有がたき仕合せと、夫から安左衛門、翌日御殿に御禮に罷り出たるとき、君公から段々のお尋ねがあつた、據どころございせんから、安太郎が坂下において曲者の手にかゝりましたるは、不忠の罰にございます」君公は是をお聞遊ばして、お落涙あらせられ「安左衛門心中を察するぞ」中併しながら此孫が、其場を去す曲者を打て、不孝者の安太郎の讒討ちをいたしましてございます」安「夫は天晴な少年ぢや、蛇は寸にして其氣を現はすとか、必らず後世天晴なる武士となるべく、ア夫を樂しめ」中「有がたい仕合にございます」

乃で君公の方もお察し下しおかれ、勘當いたした伴なれど、最早世を去り白骨となつて來たのだから、懇切に葬むり遣はせ、とのお言葉、底で此新發田に寶光院といふ曹洞宗の溝口家の御菩提所がございます、爰に安太郎の遺骨を葬むりました、尤も此寶光院の住職が、安太郎の俗

縁の叔父に當つてゐる人だ、夫だから引請てくれたのだが、普通の記録に書殘されたのには、此寺へ安太郎が來て、申し分がないから伴安之助を菅野に頼んで、切腹をしたとに後の人は皆思つてをります、サア斯うなると安之助の評判が宜いから、自然に叔父六郎右衛門も、充分學問を教へると何うも伶俐だ、一心不亂に修業をいたします、一を聞いて十を知る、劍術が好で力技を好む、十一歳で米俵などを軽く取扱ふ、流石に中山安左衛門のお孫さんだと、言て皆家中で目をつけました、十五歳の時にモウ叔父さんから眞影流の免許でございます、然れども叔父が若年者に免許をやれば慢心すると思ふて呉れない、中「まだ」其方は幼年、未々」と言て、何うも免許であらふと思つても與れない、是が叔父の家いところ、乃で何うも安之助では弱々しいからといふんで、十五歳の加冠の式の時、安兵衛と改名をする、然るところ祖父さまが御病氣、看病は朝夕夜中怠りなく、遂に醫藥の効なくいたして、中山安左衛門茲に歿する、矢張寶光院に葬式をする、直に安兵衛へ、中山の家相續仰せ付られたのだが、未だ十五歳なれば、叔父菅野六郎右衛門から君公へ願ひをあげて、君公のお許しさへございますれば、此より五ヶ年ほどの修業をさせたい、乃で君公も、其儀然るべしと仰せられましたから、中山安兵衛武庸と名乗て、十五歳の暮に至りまして、叔父が後見となつて中山の家を引請くれましたるから、

叔父の許しを得て、此から越後の新發田を立出でまして、安兵衛が、加賀、能登、越中、信濃と段々に武藝の修業をいたし、此至るところの道場に臨んで他流試合をいたし、又は高名の先生を尋ねまして、一宿を願つて立會をいたし、巡り回つて丁度三年目、上州多野郡藤岡より東北に一里半、又高崎より東南に一里半、蕪川を帯び、其西の方の岡に入幡宮がある、此を人呼で山名八幡と申します、此山名八幡に参詣をいたさんといふので、安兵衛武庸、此山名八幡をさして来りまする、ナカノ立派な八幡、夫ア其等で、十一ヶ國の守護として山名氏の勸請されたもの、故に山名八幡と名づける、二天門あり、鐘樓堂あり、安兵衛此二天門を入り本社を拜殿に来て賽銭を捧げ、柏手を拍つて社の容子を見てあれば、先四百年は過たるものと見え、老杉老松雲に掛え眞に神寂て物凄き社で、拜を遂げて日も西山に入んとするによつて、前なる農民茶屋に来て、安「免せよ」並「ハイ、入ッしやいまし」安「ア何うだな、其方のところは酒があるかな」並「お酒は何うもございません」安「ウーン何かないか」並「エ、濁酒ならございませ」安「夫ア結構だ、夫を一杯商ふてくれ、ア草臥た」並「ハイ、エ、旦那様はお若くておらッしやるが能御信心で、只今は八幡さまへ御参詣」安「然れば當國に名高い八幡と承まはり、藤岡といふところより回つて参つた」並「夫は結構で、貴君さまは何方で」安「己は越後だ」並「ア、然

やうでございませるか」
 此から安兵衛にもましましては、安「モウ一杯モウ一杯」と濁酒を四五杯、安「ヤ、親爺、眞に濟んが、何うも疲れてはゐるし、快い心もちに酔てきたから、何と其方のところへ泊てくれまいか」並「モウ今に婢や娘が農業から歸つて参りますから、此様な手狭で、旦那さまをお寝かし申すところがございません、若貴君さまがお寂しくないと申し召たら、八幡さまの御拜殿が廣うございますから、彼のお拜殿に私が布團を持って参りますから、宜しければ彼所にお休み遊ばせ」安「八幡宮の御拜殿に臥つてもお答めは蒙むらんか」並「エ、私どもで承知なら宜しいので」安「夫は幸はひ然らば然らういふことに致さふ」乃で此茶屋の親爺が、並「夫では只今八幡さまの御拜殿にお裾を延ますから」と布團を肩へかけまして八幡さまのお社へ来て、拜殿を明まして

並「エ、今日は何うかお客さまを御拜殿にお寝かし下し置れまするやうに願たう存ます」眞に田舎の人で朴訥なると、八幡宮を朋友のごとく心得て、其所へ裾を延まして、並「サア旦那さま此方へ入ッして下さいまし」安「然らうなら御厄介に相成らふ、眞に有がたい、何う致さふと存じたら、其許等の情によつて此へ一宿願へることになつた、眞に有がたいこと」並「何ういたしましてサア此方へおらッしやいまし」其うち安兵衛御拜殿に来て、柏手を拍つて、安「何卒いた

して此御拜殿に、真に勿體なきことござるが、往くれまして難澁いたす旅の者を哀れ一夜の
 ところを貸せたまふやうに」と心中にて禮を述て、乃で「安」親爺や「益」ハイ「安」明朝早く起る
 かも知んから、朝飯の用意をしてくれよ……アコレコレ待て、未其方に代に與せんであつた
 によつて「益」イエ、夫は旦那さま「安」イヤ〜氣になつて可んから何卒受取てくれ「益」左やう
 でございますか、此は又多分に「安」イヤ苦しうない「益」然やうなら頂戴いたします、有がたう
 ござります、御緩くりと休み遊ばせ此所なら静でございます「安」此様な静なところは何所
 にもない「益」然やうなら御機嫌宜しう「乃」で安兵衛は心の中に、ア八幡宮の御拜殿に一夜臥
 といふも不思議なことなり「ア」此といふのも、此も神に不思議の御縁といふもの、國表新發
 田を出る時は、斯る御拜殿に一夜臥るといふは夢にだに知ず」と頻りに考へるうちに、夜嵐は梢
 を拂ひ物凄く、森々寂寥たる山名八幡の御拜殿のうちに、思はず睡眠を催はし、鼾息の聲高く
 打臥ましたるは、豪傑中山安兵衛武庸、グウーツと臥つて、既に一眠りしたかと思ふと、ガラ
 〜〜といふ鈴の音がする、フト眼を見開いて安兵衛考へた、ハテナ合點の行ぬは、最早大
 分夜も更てるやうだが、今ごろ此神前に詣ずる者があるのか、其うちにボン〜と拍手を拍ら
 せ山名八幡宮、何卒いたして我家を哀れみたまへ、廣大の御利益を授けたまはるやう願ひ奉

つる、我家は數代念流をもつて吾儕までは續き候らふ、然るに吾儕眞に病身にいたし、殊に又
 能弟子を取立得ること能はず、數代の念流は我代に至り、爰に中絶いたしなば、先祖流祖へ對
 しても申し譯此なく、我體を丈夫になさしめたまふやう、又良き弟子を授けたまはるやう、此
 二つを一心を凝して念じ奉つる、依て擁護の毗を垂させたまへ、何卒御利益を授けたまふやう
 家内安全武運長久武藝繁昌、と祈つてボン〜と拍手を拍つ。

安「ハ、ア、此ア何者か心願をしてをる」ト此の時安兵衛スツクリ起上り、狐格子の傍まで進ん
 で覗いて見ると、星の明りに脚絆草鞋、大小帯さんだ一人の武士、デモ夜陰深更に至つて、此
 社に一人來つて拜をいたすは、ヤ、餘ほど豪膽なもの、何のくらゐ度胸があるか試してやらふ
 と、安「只今詣でたるもの、爾において我を念ずること毎夜なり、今爾の願ひは聞届け得さする
 によつて夢々疑がふことなかれ」△「アツ」といふと其武士、一足後へ退り刀の鯉口をきつてハ
 ツタと社を白眼で、△「ヤヨ、此社に曲者ありと覺えたり、我心願の妨げなす憎くい奴イデ此と
 ころに現はれて尋常の勝負に及べ確かに五音の通ずるは人間と覺えたり」此とき安兵衛、安「ア
 イヤ暫く」と社の内より聲をかけ、安「只今の御無禮、夫に出で、謝辭をいたす」と格子を開て
 夫に出で、安「是は甚だ失禮いたしたり、吾儕は越後新發田の溝口飛彈守の家來、中山安兵衛武庸

と申す、武藝の修業をもつて諸國遍歴の途中、行暮れ此御拜殿に一夜を明すを願ふたり、然るに貴殿の御心願なされるを、此の社の拜殿にて承まはり、夜陰深更に此神寂たる御社に進んで御心願なされる、天晴れる御膽力、就ては如何ほどの御膽力あるやと甚はだ失禮なれど我も試し申し上たるところ、其御心底の大丈夫なる恐れ入てござる抑も其許は何人にて、良き門人を得たいと御心願なされるか、是はまた貴殿に於ても、如何に行暮しとは申しながら此山名八幡の御拜殿に、夜陰深更恐れ氣もなく打臥とは、デモ大膽なる、何をか隠さん吾儕はツヒ是より一里ほど離れし馬庭村に住居いたす、樋口十郎右衛門とは拙者でござる」安、扱は貴殿は馬庭念流の達人、大先生にて在するか、樋口は恐縮の至りなれど、吾儕こそは馬庭念流の樋口十郎右衛門でござる。

讀者諸君に一寸貞水より申し上げて置ますが、私どもの業體の人々が、モウ樋口十郎左衛門といふことを弘めてござりますが、此樋口家は、其家の主人となつて家督相續をすると、幼名は何と名乗ても、十郎左衛門といふのが主人の名前でござります、夫から隱居すると十郎兵衛といふ、然るに皆誤まつて十郎左衛門々々々と申します、樋口十郎右衛門といふのが、樋口家代々の當主の名前でござりますから、尤も右衛門と左衛門だから大した

違ひはないやうだが、其家の人が見ますと違つてゐるんだから、貞水は十郎右衛門で申し上げますから、然やう御承知を願ひたい。

此時安兵衛は、安、扱は兼々御高名の程は承まはつて候ふ、實は諸國を修業いたし、時日あらば貴先生の許を訪問して、御流儀の程を拜見つかまつりたく存じたり、然るに今宵八幡宮の御拜殿にても目通りをいたすは好機會、今より兩三年の間、先生のお手許にて修業つかまつりたく、御許しあらば此より御供仕つります」樋、ハ、ア、體格と申し膽力と申し、扱こそ今宵結願なるに、其許進んで我が門下に入たしとは、是ぞ八幡宮のお紹介、アラ喜ばしや、吾儕速かに承知いたし候ふ」安、此ぞ我身にとつても幸ひなり、忝けなう存ずる」

乃で農夫茶屋を起しまする、夜明近くになりましたるから親爺が眼を覺した、安、オ、何かと昨夜は厄介になつたが、只今此先生の御供して參るによつて、是なる拜借の布團等は速かに返しを」此は旦那さま……此は、馬庭の先生でござりますか、マア此は失禮をいたしましたしと、此邊では數代通つた先生、馬庭の樋口といへば、上州で知らない者はない、上州どころか日本全國に響きわたつた馬庭の樋口大先生、爰で安兵衛をお連になりまして馬庭村へお歸りになる、多くの門人御出迎ひ、樋、今日同道なしたる此中山安兵衛といふは、我門人となられた

り」と一同の門人を集め、爰に免許取の人が大勢をります、夫等の人々を集めて入門の披露をいたし、此から安兵衛、此先生について三年修業する、足かけ三年の修業で、馬庭念流を極意に至りました、允可皆傳をスツカリ受た、尙此より一修業いたしたいが、先生よりいたして斯のごとく皆傳を賜はる以上は、一度國表へ立歸り、中山の家のことについて、叔父の菅野六郎右衛門に相談いたしたく存する、種、ホ、ウ、新發田藩士の菅野氏は、確か二代目ではござらんか「然やうにございまして、我祖父さまの舍弟に菅野家を相續いたした者がございます、其子が二代目菅野六郎右衛門にございます」種、ア、夫は然うだ、此方は其菅野六郎右衛門といふ人は、確かに同藩士の者から承まはつたが、眞影流の達人、天晴な武人でござる「安、先生は能夫を御承知でございますな」種、イヤ、二代目なることは確に承知いたしてをる、ヤ、夫は「國表に立歸られたら其菅野氏に、馬庭の樋口が宜しく申したといふてくれ」安、確に御傳言をいたします、で、爰に一同が集まつて、中山氏の歸國を祝す、と言つて祝盃を舉ました、彌よ安兵衛、越後新發田をさして瀧ぎよく立歸ることになりました、然るところが越後へ歸つて叔父の菅野六郎右衛門を尋ねると、六郎右衛門は三年前御當家において、聊か御重役へ對する意見が立ず是非なく一度も暇願を差出して、新發田の溝口さまのお家を浪人いたしまして、江戸表へ

出たと承まはり、安兵衛武庸落膽いたし、叔父上が在さん以上は、誰を力に御當家にて中山の家を相續いたすべき殊に叔父の意見が立ず、御當家を退きしとあらば、此方御當家にて御奉公するも、何となく心苦しく、君公へ對して如何にも不忠ではあれど、此りや叔父上を頼つて参るより外はない、叔父が歸參することになつたら、其時再び溝口家へ仕へ奉らん、乃で意を決して容子を聞ば江戸表とあるから安兵衛、其まゝ越後新發田を出まして直ちに江戸表へ出ました、乃で馬喰町に宿を取まして、毎日叔父さんの所在をお捜し申したが、何うしても分らない、サア安兵衛も今日は淺草近傍、今日は神田邊、下谷、本郷小石川、又は牛込市ヶ谷邊、四ツ谷赤坂廻町、或は麻布芝品川、本所深川と諸方へ巡り廻つて捜したが知ない、主取仕官をなされて居るか、或は又何所かに浪宅をかまへてお在なざるか、折角跡を慕ふて江戸表へ出たのだが、何ういふ事にしたら宜しからふ。最早宿屋の住居も二月となつた、漸々懐中は寂しくなるし、此まゝに過したら眞に困るが、と考へ始めた。

丁度一日兩國の廣小路をブラ／＼と搜して橋の真ん中へ来て橋下を斯ら覗き込むと、夫ア傳馬、荷足、五大力、或ひは家根船、猪牙船、茶船、釣船、何うも何繁昌、水面の分らんほどに船を浮め通航をする、大層なものだ、安、アア、江戸の繁昌は是だ「其うちに家根船に藝妓か何か

あがりまして、頻りに三味線の音をさして漕上て来る、空此ア廣大なものだ、ウーン、此ア恐れ入た、何うも是工合は遠く國許などでは見ることは能はない」上みれば及ばぬことの多かりき、笠着てくらせ己が心に。下みれば及ばぬことの多かりき、上見て通れ兩國の橋」といふ、實に兩國の川中の繁昌、目を驚かして安兵衛、見惚れてると、ソラ一ツといふ騒ぎ、何事ならんと橋の真中に立上ッて見れば、五十四五に四十八九の男が兩人、ドン／＼駈て來まして、甲「モシ／＼武家さま、安兵衛は朱鞘銀鎧の長大小を帶て其所にをります」空「何だ」甲「エーお武家さまとお見受申して、お願ひ申しあげます、彼所へ大勢の若い者が參ります、彼は私どもが横山町の花主で、土蔵の建築に着手ッてをります工事場で、仕事をしてをる大工の若い者でございます」空「ウーン」甲「夫が只今午飯休に、一寸向ふ河岸の珍らしい觀物小屋へ參りまして、木戸で喧嘩をいたしました、夫といふなア兩國八ヶ町といふ者が、何所へ參ッても巾の利く者でございます、八ヶ町の若い衆だと言いますれば、觀物などは、無料で入りましても仔細はないのでございます、夫を木戸を突た(拒絶)とか、突ないとかいふところから喧嘩になりました、夫から引返して、彼の通り得物得物を持ちまして、只今大勢押出して來たんで、觀物小屋へ參りますれば、忽ちの間に負傷人も出來ますれば人も死す、然うなりました時は、私ども初め

其筋沙汰となりまして、折角の御建築も一寸汚するといふやうなわけでございますから何うか貴君さまに、大層茲に助かるのでございますから彼れを制止して頂きたいのでございます何うか仲裁人を願ひたい」空「然やうか、夫は仔細はない、然ば彼等が先方に行さへしなければ宜いのだな」甲「然やうでございます」空「ヨシ己が制止てやらふ」忽ちの間に安兵衛武庫、兩國の橋の真中へ突立あがる只今大鎧、手斧、得物／＼を持したる大工の若い者が甲「ソレやれ／＼、炮烙調練の小屋を破ッ壊してしまへ、ワア一ツ」と調の聲をあげて十五六人、此とき橋の真中に突立てをる安兵衛は、空「アイヤ各々、得物／＼をもッて自盡何れへお往である、心得ちがひをなされては可ん、彼れにをる親方衆の言ことをお諾なさらんか、血氣の勇に逸ッて後の大事を考えんとは何ごとぞ、吾儕お仲裁をいたすによッて、暫らく留まッて我が言ことを聞ッしやい、仲裁人は時の氏神、我等に任して此ところをお退候らへ」甲「オ、イお武家、何を餘計なことを言なさる、爾さん方の出るところぢやアない、其所を退てくねんニ、己たちは木戸を突れた日にやア、兩國八ヶ町の若エ者の面が立ねニんだ、炮烙調練の觀物小屋を破ッ壊すんだ、退てくれ、退てくれ」空「此はしたり各々、強いはかりが男ではないぞ、我理解を諾ことが能はんとあれば、是非に及ばん、強て通らふといふ者あらば、片ッ端から撫切にする、言ふことを諾なけ

ればサア来い」腰なる大刀スラリと引抜て大上段に振冠ッて、屹と前面を白眼だ。

ワア！ツと一同後へ退り、甲「抜たア〜、危ねエ、倉、爾、先へ往け」倉「馬鹿を言エ、己ア抜た刀なんざア嫌エだ、親の遺言だ」甲「爾の親はゐるぢやアねエか」倉「ナニ母アの遺言だ」甲「馬鹿ア言エ、母アは健康ぢやアねエか」倉「オ、イ、甘鹽の秋刀魚のやうな物を引き抜た、危ねへぞ〜」倉「サア各々、吾儕へ任せることが出来ないか、出来なければ、是非に及ん、此方の武士道が相立んに依つて片ツ端から各々を切倒す」甲「危ね〜、少し待てくんね」倉「オ、オ、武家、危ね〜」其うち仲裁人が飛込で参りまして、乙「何うか武家さま、お任せを願ひたら存じます」倉「ハ、ア、最う仔細はないか」乙「私に此兩國の米澤町にをります、車屋仁兵衛と申します者で、只今若い者は皆制止してございます、私が仲裁人をいたしますで、貴君さまのお影さまで大事にならないで、一同も引揚ましてございます」倉「ハ、ア、夫れはモウ仔細はないか」乙「モウお影さまで有がたうございます、先何うか手前と一緒に往て願ひたい」と最前頼みました大工の棟梁らしい者が、丙「旦那さま、有がたうございました、私は橋町の大工の清五郎と申します、未熟ではございますが、職人を大勢使ッてをります、貴君さまの御威光で喧嘩にもなりませんで、無事に収まりました有がたうございます」又一人来て、丁「私

は、エ、旦那さま、清五郎の肝煎で利吉と申します、眞に有がたうございまして」紋「旦那さま、私は世話役で紋次郎と申します、有がたう存じまして」安「ウン、ヤア、無事に収まッて宜々なア」利「然やうでございまして、マア旦那さまが此ところにお在下ならなければ、モウ今頃は如何なことになるか分りませんで」清「ア、早く旦那を尾張屋へお運申して」利「夫が宜しうございます」是から横山町の尾張屋といふ、大きな立派な御茶店がございます、其尾張屋へ中山安兵衛を案内をいたし、一同が来て代る〜低頭をする、安兵衛馴ないから、何したらと思ッてゐる、其うちに廣間の方へゴタ〜人が参る、安兵衛を席へ座してゐて兩側へ並んでゐる一同が、乙「エ、旦那さま私は向ふ河岸に盲人の炮烙調練を觀物をいたしてをります、興行師の太藏と申します、木戸番のゴテ萬と申します者が、ツヒ八ヶ町のお若い衆をお見それ申しました、紛紜が大事にならふといふのを、お影さまで引續いて稼業も出来ますといふもの、有がたい仕合せでございます」安「オ、然やうか、兎角喧嘩といふものは、些細なるところから大きくなるものだ」太「夫が旦那様のお影で、只今無事に車屋の親方のお仲裁で、首尾よく和解手打をいたしました」安「ホ、ウ」太「併し貴君さまが第一のお仲裁で、斯やうな事にお馴あそばしませんから、車屋の親方が萬事なさいました」安「然やうか、仲裁人は時の氏神、武家方の和談

和熱、其方どもの和解、夫は結構だ、其うちに大工の棟梁の方からも町噂に謝辭を述べて、
 「就ましては一口差上たいから」と安兵衛に立派な料理で、大勢が接伴て酒を備める、や大
 酒だから、安、此は千萬添けな」と酒を飲む、△是は甚だ失禮でございますが、何か口
 に適ましたものを召上られますように」と水引をかけまして目録を千疋(二兩二步)△此は一
 體何だ△是は御受納下しおかれませう様…双方から致して謝儀の印でございます△安、
 ン、斯やうな事が例にあるのか△御意にございまして、お仲裁を願ひますれば謝するは禮で
 斯やうな事は誰人に限らず致すので△安、ア、然らば江戸表は、喧嘩の仲裁をいたすと酒を飲
 て目録を贈るといふのが例か△先然う言たやうなわけで△
 安兵衛ニコ／＼して、安、然やうか、失では是は此方が受ても宜いのか△夫は旦那様が受下
 さらないと、私どもの方で何か謝儀をしなければ成ますん△然やうか、夫は千萬添けな
 △△も宿は何方でございます△安、馬喰町三丁目越後屋吉兵衛方に泊つてをる△△ア、越吉にお
 泊りでございますか、お送り申しませう△乃で安兵衛大勢に送られました、越後屋方へ立歸
 りました其の頃ほひに千疋とされた日にやア大したものだ、安兵衛其夜考へた、此ア先叔父上に
 お目通りをするについて、其居所の分らん其間、當家に滞在をしてゐるうちに、最早囊中無錢

ともなり、宿の拂ひにも如何と思つたが、江戸といふところは妙なところだ此れア△明日ッ
 から市中を歩いて、喧嘩があつたら、其喧嘩の仲裁をし、當分は日を透らう、面白い稼業だ、
 ナアに彼等ごときを制止するなア何でもない△其うちに越後屋の主人が、△旦那さま、今日
 は兩國で大喧嘩になるといふところを、旦那さまの御威光で制止になりましたさうで△安、ヤ
 弱い奴で、刀を抜たら皆な震えてしまつた△夫、夫ア驚ろさすとも、結構なことをなさいまし
 た、棟梁輩も觀物の方の親方輩も喜んでをりました△安、然うか、夫は先宜つた、人が喜ん
 で此方が利得かるんだから、此ア當分行るべしだ△此から安兵衛、毎日のやうに越後屋吉兵衛
 方を出まして、彼方此方と市中の喧嘩を捜して歩行、當今とは違ひまして、夫ア喧嘩は江戸
 の花と言たくらゐで、名物の中にも數へられて、火事喧嘩大名小路、初鱈魚、割烹屋業に火消
 錦詣、餘分の方に、伊勢屋、稻荷に犬の糞、汚ない名物で、然ういふくらゐでございしたか
 ら、明治の今日は警察のお取締の届さますから、餘り喧嘩はございせんが、夫でも時による
 と衝突をして、忽ち警官の御厄介になるのは、東京市中では毎日、數へてみれば三つや四つ
 はございませう、元祿の昔は、夫は／＼ナカ／＼盛んなもので、喧嘩でもして人でも打るのを
 自慢にいたした頃ほひ、其翌日安兵衛馬喰町を出て、淺草のお見附の此方へ來ると人立がして

なる、見ると若い者が肌脱になつて喧嘩をしてゐる、ナカ／＼烈しい打合ですから、誰も仲裁
 をする者かない、ところへ、安退々、退々「一同の見物を押分て、安」コレ、何ゆゑ斯くの通り
 喧嘩におよぶ、仲裁人は時の氏神、拙者が仲裁するによつて任せろ、甲旦那、打捨といへば
 んねエ、此野郎を打ッ殺さなけりやア、己の面が立ねエ」乙武家さま、有がたうござえやす
 が仲裁人にやア及ばねエ」安「イヤ、然やうなことを言んで此方に任せろ」甲「オイ武家打捨つ
 といへばおくんねエ」安「コレ、言ことを請んか」乙「ア痛い、腕が打ちまふ」安「待々、彌々爾等兩
 名、此方に任せんとあれば武士道が立ん、爾等兩人を此ところへ捨り殺すぞ」乙「エ、御免下せ
 エやし」安「サ仲裁人の儀は此方がいたして遣はすが、双方ともに相頼むか」甲「何卒宜しく願
 ます」安「夫では来い、往來では可んから」甲「へエ」安「幸ひ此所に鯉屋があるから、此方暫らく
 鯉も食んから、是に參れ」鯉屋ぢやア、女入来しやい」安「二階が明てるか」乙「へエ、二階
 は明てるります」乃で安兵衛兩人を二階へ連込み鯉とお酒の注文をする注文物の出来る間に安
 兵衛兩人を前へ置て、安「ヤ、其方どもは親が／＼か、主人持か、夫とも一本立で妻子を養ふ
 者か、未夫ほどの年でもないが」甲「エー旦那、私らは藥研堀の壁職の吉五郎の弟子でございま
 して、松藏と申します」安「何處だ」乙「二十二でございます」安「然やうか、其方は」乙「エ、私は

神田の豊島町でございまして、壁職の棟梁の金兵衛の弟子でございまして大吉と申します」
 安「フッ、何ういふもんで一體喧嘩を初めた」乙「エー夫は其何でございます、實は親方同士が
 交情が宜しうございまして、お互ひに仕事を致あつてをりますんで、昨日休でございましてか
 ら、丁度兩人が出あひましたから、淺草の觀音さまからブラ／＼と、吉原へ繰込みまして、兩
 人で遊んだんでございます」安「ウーン、夫が何うした」乙「夫からマア一杯飲まして、歸りがけ
 に酔はらつたもんでございますから、昨夜の娼妓が宜いとか、悪いとか言ううちに、此野郎が、
 ヤイ松、爾の買た娼妓ア、恐ろしく、小田原提灯みたいな長エ面だ、斯う言アがツたから、大
 きにお世話だ、己が買た娼妓を爾が批難にやア及ばねエ、といふと、此ん畜生、何だ一晚買た
 娼妓の事を言れて腹が立つか、彼の長エ面の女に惚たか、と斯う吐しやアがる、夫から一つ言
 ひ二つ言ひ、トウ／＼喧嘩になつたんでございまして、夫れで旦那の御厄介になるやうになつた
 んで、眞に濟ません」安「ハ、ア、諍らんとから喧嘩をする奴だな」乙「然やうでございます、ツ
 ヒ自分の買た娼妓を悪く言れて、癪に障るもんだから」安「ハ、ア、其様な事から平素も互ひに
 宜い中で、喧嘩をする奴があるもんではない、然らば以來は交情よく水魚の交をいたして、ウ
 ン、其の方ども職人とあらば、腕を能く磨いて親方には相當の恩を蒙ひつてをるであらふから

其の親分に對して苦勞をかけんやう恩義を報ひて、天晴れ一家をなし、妻子を儲けて確かりや
 るが宜しい」松「ハイ、有がたうございます」安「只今酒を取て遣はすから一杯飲なほせ」松「何う
 も御迷惑をかけた上に、此様な御心配をかけちやア濟ません」安「イヤ遠慮をするな」其うちに
 お酒が来る鰻が焼て来る相方へ酒をさしてやる、太「有がたう存じます」安「以來は決して喧嘩を
 してはならんぞ」松「へ、有がたう存じまして、貴方さまは何と仰しやいます」安「此方は越後
 新發田の浪人中山安兵衛武庸と申す」松「へ、有がたう存じます、私どもよりか未お年は下の
 やうでございますが、流石は武家さま、恐れ入ります」安「ヤ、飲め、其やうに四角張て坐
 ツてをらんで、膝を崩して鰻を食え」松「太吉」太「何だ松藏」松「何うも斯ういふ粹な方さまが
 越後新發田あたりから出ていらしッて仲裁人をして下さるのだ、有がてエな、江戸ッ子だなん
 と云て、己ツちの喧嘩を見てゐやアがッて、確かりやれなんと言つて、仲裁人なんぞをしやうて
 エ奴は一疋もゐやアしねエ、何うも旦那、有がたう存じます、爰の家は鰻が自慢でございま
 す」安「ア、然うか、遠慮をするな」太「へ」安「食え、己は此大きいもので酒を飲む」松「へ
 エ、然やうでございますか」安「時に己は一寸厠へ行く」松「へ、行て入ッしやいます」
 其後で兩人は、松「ア、何うも驚いたなア、實に何うも感心な意氣な旦那だ」太「本當だ……大層

長エも雪隠だア、オ、イ」ボン／＼／＼手を拍いて、松「女中さん」女「ハイ」松「未だ旦那は何か
 い雪隠かい」女「ハイ、モウ疾にお歸りになりました」松「エ、ッ、お歸りになつたエ」女「ハイ」
 松「何うしてお歸りになつたんだ」女「チト用事があるから先へ戻ると仰しやいました」松「然
 うか謝辭も碌に言ねエうちに先へ歸る、サア歸ると言ア、兩人が送ッたり何かすると面倒だてエ
 んで、黙止ッてズツとお歸りになる何うも分ッたお方だなア……ヤ、待よ、オイ支拂は」松「貴君
 方お兩人から頂けと仰しやいました」松「エ、ッ、何うも昨夜娼妓が去ちやッてからトロ／＼眠
 ヲた、其間に見た夢が何うも宜ねエと思ツたが、トウ／＼此様なことになつちまツた」太「満ら
 ねエことをいふな、オイ女中さん、支拂は何程だ」太「彼の残らずでは、鰻が澤山出ましたんで
 お酒を五升ほど召上ッてをりますから」女「恐ろしい大きなもの、大きなものと言つてガブウリ
 ン／＼飲で、第一遠慮をするな、遠慮をするなと幾度も言たが、成と此ア遠慮をしなくッ
 ても宜ツたんだ」女「三步二朱と三匁五分」松「大變なことになつちまツた、オイ女中さん、濟ね
 エけれど誰か一緒に往てくんねエ、第一爾が己の娼妓が長エ面だなんと言アがらねエけりやア
 此様なことにやア成ねエんだ」太「長エから長エと言たんだ、此ん畜生」復始めさうになつたが
 松「ヤイ待て、又武士が飛込んで此上散財をさせられちやア成ねエ、女中さん濟ねエが、己の親

方のところへ一緒に往てくんねエ、お互に女郎買から馬を引張て来てエな、随分やりもしたし、話しにも聞てゐるが、鰻屋から馬を引張て行てエな珍らしいな」本「己ア驚いた、アノ赤エ鞘の大小を見てもゾツとする、人を馬鹿にしてゐやアがる、遠慮するな、遠慮するなツて風が悪い」這々の體で兩人は親方のところへ馬を引張て来る、親方は此話しを聞て噴出して、登「有がてエも武家さまだ、好い懲戒をして下すツた」登「宜い面の皮だ、ウンと飲食をして黙止て歸ツた武士を貰るにやア及ばねエ」本「粹な話した」登「些とも粹な話しぢやアねエ」親方が鰻屋の方の代價を拂ふ。

此方は安兵衛、毎日日々市中を止行てゐる某時は恐ろしい得物を引提げ、得物くをもつて繰出して来るといふやうな大喧嘩、其中へでも飛込んで仲裁をする、サア何うも俠客の喧嘩、飛込で仲裁をする、蒸の者の喧嘩、飛込でつて仲裁人をする、彌「安兵衛は顔が廣く相成ましてモウ今では吉原であらふと、品川であらふと、板橋千住新宿のやうなところでも、何所へ行ふとも、此安兵衛の顔の賣ないところはない、然うかと思ふと、錢がありやア直に菓子を買て、子供を大勢集めて、其子供に此菓子振まつては喜ぶ、乃で子供は朋友のやうに、王「ヤア鬼安が来た、鬼安が来た」と言て安兵衛を大騒ぎやる、斯ういふ工合ですから、如何な

る葬式でも遂にはブラ／＼附て行く、而して其貰ツた饅頭や何かを子供にやる。

スルト爰に入町堀松屋町に穴藏屋萬吉といふ者がある、弟子が大喧嘩をしたために安兵衛の厄介になつて仲裁人をして貰ツた、夫れが縁で萬吉が馬喰町邊にでも来ると、萬「先生おますか」と言て越後屋を訪問る、丁度今日は安兵衛が出かけやうといふところへ、穴藏屋萬吉が来て、萬「先生、丁度宜い何所かで一口やりませう」安「ヤア此穴藏屋萬吉どの、只御馳走になるのは眞に氣の毒であるが、相手を見付て喧嘩でもしては何うだ」萬「冗談言て……併し先生はお名前が高くなりました、兎に角お在なせエ」と言んで、馴染だから横山町の尾張屋といふのへ連れ込で、安兵衛に酒を御馳走しながら、萬「ねエ先生、何日まで宿屋にゐたツて致方がねエ、私の家へも入來なせエ」安「ヤ、千萬忝けないが、自分でやれるだけはやつて見やうと思ふ」萬「マア其様なことを言ねエで、何うです私のところへも入來なせエ、職人や子供や女房はをりますか、決して爾さんに御不自由はさせませんから、お入來なすツちやア如何です」安「ヤ、夫は千萬忝けないが、實は此方はマア宿屋にをる方が」萬「入費が要るぢやアございませんか」安「入費が要ツても仔細はない」萬「だツて私の町内に、菅野六郎右衛門といふ劍術の先生が去年から道場を出して、モウ百五六十人も弟子が出来ました、大したものです、元も醫師さまの住でゐた家へ

道場を假に造へてやつてゐるんだが、何うも年を老てゐるが良い先生で、方々の御藩中が追々弟子入をして、大分盛んになつて來ました」安萬助どの「萬エ」安何といふ先生「萬エ、菅野六郎右衛門といふ先生」安「エ、ツ」萬「ア、吃驚した、先生、何で大きな聲をなさるんです」安「ア、千萬添けない、扱は此までお尋ね申してをツた叔父上は、八町堀に御道場を開いてお在なさるか、アラ喜ばしや有がたや」萬「何を先生、獨り言を言てお在なさるんです」安「只今其許の話の菅野六郎右衛門といふは、我が爲には天にも地にも只一人の叔父上、實は今日まで叔父上を尋ねてをツたのだ、何うか案内をしてくれ」萬「へエ、先生の叔父さんとは一向に存じませんでしたが、夫ア不思議なことだ、夫ぢやア私が御案内をいたしませう」安「何卒然やういたしてくれませうやうに」是から馬喰町の越後屋かたへ参りまして、拂ひをいたして穴藏屋萬吉に案内をして貰ひまして、八町堀松屋町三丁目へ來て見ると、町道場を開いて、眞影流指南菅野六郎右衛門武明、といふ表札が出てゐる、叔父上のお名前を見るや安兵衛は御懐しく「安萬吉どの大きに御苦勞だ」萬「夫ぢやア先生、私は一丁目でございますから、何うかモウ此方にお在になりやア私もお尋ね申しますが、御遠慮遊ばさずに入しつて」安「ア、此で此方も安堵したお頼申す」萬「何うれ」一人門弟らしき者が出て参りまして、安「誰人さまで」萬「拙者は

越後新發田の浪人中山安兵衛武庸と申す者、先生へお執次を願ひたい」萬「ハイ、暫時お控え下さい」其うちに暫らく經て菅野大先生、御自身に「萬、オ、安兵衛なるか」安「ハ、ツ、是は叔父上」萬「能く無事でをツたな」安「へエ」萬「ア、先通れ」安「有がたいことでございます」安「ア、レ、是人は此方の忤同然の甥であるぞ」△然やうでございますか」ト兩三名をりましたる者は平伏いたす。

安「是は叔父上御機嫌よう」萬「如何いたした、朝夕其方のことは心配いたしてをツたが」安「ア、恐れ入ましてございます」萬「其方は何ういふところから此江戸表へ参りしぞ」安「ハイ、私は叔父上の御健全である御尊顔を拜し眞に以て安堵いたしましたござる、實は叔父上の仰せられる通り、加智能登越中信濃、段々と修業いたしましたして上州に参り、馬庭の樋口先生の許にて修業いたし、皆傳を頂戴ましてでございます、又先生も叔父上を御存知と見えまして、宜しう申し傳へよといふお言傳までございました」萬「オ、然やうでありしか、ア、馬庭の樋口先生の許にて修業いたした、ヤア其方は宜いところへ氣が付た、念流を修業いたしたか」安「叔父上の御丹精又馬庭念流の極意皆傳、眞に私も御影をもつて修業いたしてございます、夫より新發田に立戻りまして、叔父上にも目通りを致さふと存じましたに、御浪人あそばしましたる事を承

まはり、叔父上が溝口家に在すれば手前も力強く存じまする、叔父上が御浪人あそばしては、私のみお家に仕へてをるも何となく心ざびしく、假令何方へお往で遊ばされやうとも、お尋ね申してお目通りの能はんことは有まい、お側にあつて御恩を送りたく存じまして、實は第一番に江戸表を志ざしましてございます、諸方を段々お尋ね申しても相分らず、夫ゆゑに馬喰町の越後屋方に逗留して、毎日市中を捜し……」

「實、ホ、ウ、夫では何か、近ごろ市中にて喧嘩の仲裁人なぞをしてをる浪人にて年若の者があるといふ噂を聞き、何うやら其方の」

「然やうでござる、江戸といふところは、仲裁人をいたしますれば、多分の謝金を贈り呉れます、取て金銭に眼眩んでいたしたわけではございませぬ、何分にも貯へて支消つくし、宿屋の拂ひに差支え是非なく仲裁人を其日の活業と、喧嘩を捜して歩行ました」

「實、ヤレ、是は不思議なることをやりをツたなア、併し是に尋ねられたるは、真に力を得しぞ、最早喧嘩の仲裁人を止て身共の許に能く膽を練り、老體なる六郎右衛門を助けくれよ」

「實、ア、恐れ入りました」

「コレ、此方は御重役との意見が會ず、自分の意見の立ざるところより、溝口家を浪人いたし、江戸表へ罷り越たるに、幸ひにも此の道場には今は二百名ほどもお通ひ下され、身に餘る喜こび、却つて此方が心やすく存ずる、併し老體の身の上であれば、其方が参りしを幸はひ、何卒其方も

門人衆へ稽古いたしてくれまするやう」

「實、ア、恐れ入りました、未熟なる吾儕、御傍らにあつてお代稽古などいたすでござらふ」

「是から安兵衛武庸を傍らへ置き叔父の菅野氏は大層御安心あそばして、夫から安兵衛充分にお代稽古を勤るやうになると、評判が宜い、劍術は眞影流も出来るし、馬庭念流も出来るといふんだから、夫ア能仕込でくれる、倍す御道場で勵んでゐるうちに、甚はだ失禮でござるが、是は若先生、國表から到來しましたから、御平素召にして下さい」

「などと云つて袴地を持って来る、實、是は叔父に承まはらんければ頂戴は能はん」と叔父さんに此事を尋ねると、實、折角の思召であるによつて頂戴をしてあげ」

「乃で是を受けるサア若先生々々と言つて大勢が騒ぐやうになりました、或ひは御馳走のために割烹屋へ連て行く、又は新吉原へ同道をする、乃で安兵衛が叔父さんに對つて、實、倍叔父上、甚だ恐れ入りまするが、三年の間手前にお許しを願ひたいことがある」

「實、何だ」

「實、何うが私はお酒を充分に飲まして、氣樂に三年の間は過したい、其代り三年過ますれば、速やかに改まつて御苦勞はお掛申さんから、何うか三年間手前にお許しを願ひたい」

「實、フン、妙な願ひだ、其方が限つて三年の間何うかしてくれいといふ事なら、夫は速やかに許して遣はす、其方の事だから全然身を崩してしまふやうな事はあるまいから、夫は承知だから宜しい」

「サア許してやると酒も能飲る

併し朝から正午過ぎまでの代積古などは缺たことはない、夫ア充分やる。

爰に伊豫の國西條にて三萬石松平左京大夫此が紀州様のお分家で、江戸表の上屋敷は青山百人町、是を穩田の左京さまと申し上げました、ナカ〜お勢ひのお家柄でございます、ところが此紀伊殿のお分家だけございまして、文武兩道ともに君公を始め御家中が御熱心でございます尤も紀州は南龍院殿頼宣公といふお方さまが、夫ア何うもお優れあそばしたお方だ、徳川常陸介と仰せられました、御幼少の時より御利發で大阪御陣の頃ほひには、安藤帶刀先生直次に背負さつて、お十一歳にて戰場にお働らさあつたるお方、其紀伊家の御武勇といふものが、御分家左京大夫さまへ皆染渡つてをりまする夫ゆゑに皆優れた御家來がございまして左京大夫の御家老の中には久世山地長野澁谷普沼、皆優れた御家老で、然るに此左京大夫さまが、彌々武藝のことについて、眞に重きをお置き遊ばすといふは、御三家のお控へである、東照宮徳川内府二代の御幼君竹千代の補佐役にお見立になつたのが酒井雅樂頭忠世公、此忠世公に、家爾は仁をもつて竹千代を諫めよ」と仰せらる、土井大炊頭利勝に對はせられては、家「其方は智をもつて竹千代を諫むべし」青山伯耆守忠敏公に對ひ、家爾は勇をもつて諫むべし、必らず武藝を怠るとなかれ、武を怠たるは當家の死脈と存せよ」と仰せられる、夫ゆゑに竹千代様の御養育に

ついでには文武兩道ともに相伴なつて進ませたまひ、御利發なる御幼君に相違ないが、後に大猷院殿と申しあげる、家光公御盛の頃ほひは、全く文武の兩道をもつて、諸藩をお押へ遊ばしたくらの、夫れが御三家の御分家にまで響いてをりましたが、何うも益々武は盛んにおやりになつた、左京大夫さまは、何うもお心に御指南番が御意に召さん一刀流でございまして村上庄左衛門、其舎弟が同姓三郎右衛門、兄弟にてお抱へとなつて、左京大夫さまの御指南役、君公がお出來になると言つて、何うも此村上のお氣に召ん、左余は餘り信じられん」と仰せられて、君公が近ごろ餘りお用ひなさらん、ところが兄弟は御家中の者に指南をしてをつたが、何うも御家中の者が、何だか悪く威張つてばかりゐて、劍術の指南かたが面白くない、何うか宜い先生が出來れば宜いが」と思つてゐる、遂に君公からいたして然るべきところの指南番があらば召抱へよとの仰せ、サア然らなりますると御家來方が、良き先生を君公にお執持をして我が手柄にしやうと思ひますが、倍良いと思ふものは昔なお抱へになつて、幾人もあるのは、矢張り世間に幾人もある、其うちに左京大夫さま御家來の日根野又右衛門といふ、此お方が八丁堀の松屋町に、越後新發田の浪人で眞影流の達人、菅野の六郎右衛門といふがをりまするが、此お方は最も優れたお腕前でございますと申し上げた、乃で早速日根野又右衛門に仰せ付られまし

て菅野六郎右衛門の心中を問ひ糺せとの御沙汰、君當家に奉公いたす所存あらば、如何なる腕前の者か手の内を見たい」と仰せられ、且心得ましてござる。「ト此から八丁堀の松屋町の菅野先生の許へも稽古に出た時に、丁度若先生が稽古、先生は、見場にて安兵衛の稽古の致方を吃と見てわらッしやる。

乃で日根野は菅野先生の前へ口誼する。宣「此は、毎日御出精でござる」且恐れ入りました、今日は少々先生に申し上げたいことがござる。宣「然やうでござるか何用か」と一室へ入れまして日根野又右衛門を召れました。且借先生、私御主人左京大夫様、先頃より武藝指南の者をと仰せられ、各自心懸をりまするが、幸ひ手前が尊師と仰ぐ貴君様、先ごろ君公に申し上げましたところ、御隨身の思召がござれば、手前よりお執持をいたしますが、失禮ながら御心中を伺ひたく存じます。宣「ハ、ア、ヤ、此方は最早老先も短きものでござるが、主家を仔細あつて浪人をいたし、斯の通り道場を開きお影として道場も繁昌いたしをるが、一人の甥安兵衛武庸、深く考へれば幸ひ此御奉公、お請をいたした方、然るべきやうに思ふ、宜しくんば何日なりとも罷り出で、お手見せをいたしても宜しうござる」且夫は又早速の御承知、手前の申し上げました甲斐もあり、今日歸郷をいたしますれば、君公に此の事を申し上げ御沙汰をいたすでござる。

宣「夫は又何分宜しう」此から日根野又右衛門どのが穩田のお屋敷へ立歸りまして、此を左京大夫さまへ申し上げる、乃で其翌日お使者が來つても屋敷へ召れる、各自が出ましても相手をいたしたが、何うも御老人とは申しながら、お上の御前で、左京大夫どの、御家來を打もせず打れもせず、能うあしらつてゐる、其上居合を抜て御覽に入た、左京大夫様は殊の外御意に叶はせられ、左「ア、天晴れな早術」全くエイヤツと言て援する呼吸は目に留らん、水戸様の御家來に田宮勘八郎と仰しやる、田宮流の居合の名人がござりました、某日光園公の御前に出ましたる時、光此りア勘八郎「勘ハ、ッ」光武藝者は太刀風三寸にして身を翻へすと云ふが、然やうかと「お尋ねでございます、勘、尊命のごとくでございます」ズルト其後何のお尋ねもない、五六日を経て御庭を御遊覽仰せ出され、然所が此後樂園は、當今は天然の樹木の大きいのも、七八本も切拂ひました、又數度の地震のために、お池の阿波の鳴戸の景なども最早崩れて其形を認めず、大石も多くお取片附になりましたから、今日はヤンの形のみ残つてをると言て宜いくらゐの後樂園彼所は以前天然の風景を備へましたる所、吉祥寺本妙寺といふ兩つの寺がござりました、本妙寺は丸山へ替地を下しおかれ、吉祥寺は駒込へ替地を下しおかれ、乃で水戸様が是にお庭をお造へに、天然の樹木に添て、奇石は伊豆の山々からお取寄になり、

又某時は三代將軍家光公、自ら此にお成となつて御指揮を遊ばしたといふくらの、然れば結構言んかたなく、其庭の蓬萊島の傍まで光圀公が徒歩で往らせられる、其の後より朝比奈彌太郎其他の方々一同ゾロ／＼御供をいたしました、其中に田宮勘八郎も加はつてをりました、スルト池に鯉が澤山をりますから、公ソレ鯉をやれ」と仰せられる、此時鯉をドン／＼投込ますると、バクツリバクリと二三尺ぐらゐの緋鯉黒鯉が相争そつて此を食る、餘念もなく一同是を見てをりました、其中に田宮勘八郎がボンヤリとして、群がるその其鯉を見物いたしてをりました、スルト光圀公より目配せがございましたるによつて、朝比奈彌太郎が背後より勘八郎をバツと突たドブウーンとお池へ落る、光ソレ勘八に鯉を遣はせつ」と御意ある、勘八郎、鯉ぢやアないから鯉を食やアしません。

スルト田宮勘八郎、ビシヨ濡になつて上陸で参りまして、勘八戯れ御無用に願ひます」斯う申すと光圀公が、此りや、武藝者は大刀風三寸にして身を翻へすと申したではないか勘八、尊命のごとくにごさいます」云々然らば其方が只今水中に落たるは、大刀風三寸にして身を翻へすといふ答へとは相違いたしてをるではないか」勘八尊命にはござ候らへども、手前を突ましたるは朝比奈彌太郎にごさいます」朝比奈彌太郎は驚いた、背後から知んやうに突落したに何う

して此方といふことを知てをるだらふ、勘八其證據には彌太郎の袴の裾を御覽遊ばされたく」乃で光圀公も御覽になる、彌太郎も見ると、五寸ばかり袴が切てをる、是は如何いたしたのであるか、勘八夫はあ上の仰せによつて彌太郎を突落しましてござる、手前は落ながら小刀の鞘を拂ひ、袴を切り小刀を鞘に納めてドンリと落ましてございます、是れが眞劍の敵なれば、水中に落ながら敵の足を拂ひ落します、水中に落る再儕は、水練を心得をれば仔細ござらん、突き落しましたる者は其場に倒れる、元より戯れのとゆゑ、武藝者は大刀風三寸にして身を翻へすといふ、武藝者の本分を御覽に入りました、是が即ち田宮流の居合でございます」人々驚いて「甲」ア早いものだ」目に留らなかつた其くらのもので、今日松平左京大夫さまの御前にいて、菅野六郎右衛門が居合の抜分を御覽に入た、一同只感嘆をして評するに言葉なく爰で彌一二百石をもつて御指南番にお召抱といふことになりました、乃で自分も御決心をなされたによつて、安兵衛を近く招かれ、六「扱安兵衛」安、ハイ」六「今日松平左京大夫様お上屋敷に召れお手見世をいたしたところ、あ上の殊のほか御意に適はせられ未熟なる此方をお召抱え下さるといふことである、何日までも浪人をいたしをるも如何、折角の思召し、此方とても後來の考へもあるによつて、此度は主取仕官におよぶで其方は同道いたして屋敷に参るか何うら

や「生」ハイ、ア一折角此まで御道場も御丹精に相成ましたるところなれば、未熟なれども拙者代稽古をいたし、門人衆も御信用下され、有がたいこと存じます、就ては暫らく拙者は此御道場を預り申し四五年の間は捨置を願ひたい、然すれば又た私の修業とも相成り、其のち叔父上の御傍らに出て御孝行を仕つりますれば、何卒四五年の間は御道場を手前へ預け下し置れたし」云々然やうか、然らば其事に致さう、其儀も尤もに存ずる、就ては此方が左京大夫様へお召抱えになつたる以上は、必らずともに爾は心得違ひなきやう、御門人衆には深切に教導をいたし、此方を内は兎に角、一人とならば世評も如何あるべく謹慎いたして正しくいたせよ」安「ヘー、恐れ入ましてございます」乃で六郎右衛門は門人衆をお集めになつて、六倍御一統、御縁あつて當所に道場を開いて以来、各々御入門下され、斯のごとく親しく致したが、此度チト考へあつて、松平左京大夫さまへお召抱へとなり、明日は既にお屋敷へ罷り出ますから、各々方にお別れとして今日は一献あげたく存ずるから」云々は目出たいことございまして「云々就ては甥安兵衛に暫らく當道場を預けますから、安兵衛の指南にて宜しいと思し召す方は、相替らず道場にお通ひ下さるやうに」云々は若先生も共に存じたるに、お残り下さるとは我々の仕合、引續き御教導を願ふでござらうと」異口同音に答へた。

乃で菅野六郎右衛門は、ア一安兵衛の信用もナカクあるツエ、とお喜びでございます、是から門人一同と祝杯をあげて、杯は順に巡り逆に飛び、一同から贈られた祝ひ物を受納した、先生は左京大夫さまへ御奉公、お長屋を頂戴して、空兵衛といふ、八丁堀の道場で召仕つてゐた實直なる者、此をお召連になりました、乃で御自分はお屋敷へお出になりました、真に質素な方であるから萬事空兵衛に任して、御自分は君公の御指南をいたす、御家中の各方は願つて稽古を下さるやうにといふんで、お上屋敷にあつて各自家中の者へ御指南、然所が腕前優れてゐらつしやるから、御一同の御家來方が、甲「尊公、何うです先の御指南役とは」云々同日の輪にならんですな」甲「拙者が過日帯を求めました、チト安いと存じたら、直に真が悪くなつて、全で蛇が蛙を呑たやうになつた、安からよ悪からよで、宜ものは何所までも宜のでござるな」云々然やうく、マ物の道理を考へても分る、先代の御指南役は兄弟で百石、菅野先生は一人で二百石なのですから」甲「然やうです口では百石だが、百石の違ひは大したもの真にお和らかで、我々に分るやうに御指南下さる、先御指南は初めの内は豪さうだが漸々價值がなくなる謂はゆる真鍮に金鍍金、何うも此の金が剝るに従つて地金の真鍮が現はれる、餘り宜しくない、今度の先生は、金無垢へ真鍮の減金をかけたやうに、漸々金の光が現れるといふやうなわけ

大したものですな」乙「何うも恐れ入りました倍す評判が宜い、御奉公大切に一生懸命に御家中の方々へお仕込になるから、皆御上達になる、最早半年が一年と御奉公になる、此方は中山安兵衛叔父上は目の上のタン瘤のごとくでございまして、其叔父さんが左京さまのお屋敷に往てしまつたら、謂ゆる恐い者なし、至つて飲む口だから年中酒のために酔を發してゐる、ところへ、甲「先生今日はお稽古を」乙「ヤア何うも竹刀の打合ばかりも、真に上達の遅いもので、實は膽を練り、真劍立合なども時にはやらねば可ん、今日は各々、真劍をもつて立合をしやう」甲「御元談仰しやつては」酔ばらつては稽古をしてくれない、真に惜い腕前、酔てゐない時には深切、酔てゐる時には可ない、お弟子も強て願ふと、面倒つくさいと傍らの真劍を振廻し、此ちやア誰も稽古に来る者はない、乙「何うも折角惜いが御免を蒙むらう」乃で皆御門人衆が退いてしまふ安「マア宜い案配だ、ア何うも宜い案配だ、門人が来なくなつたので氣樂である」と平氣である、兼て穴藏屋萬吉が出入をしてゐるから、萬先生「マア貴君は、彼様なに入來になつたお弟子を、皆な逐拂つてしまひなすつたな」安「蒼蠅て仕やうがない」萬「エ、何と仰しやる、蒼蠅なんてマア、青山の萬先生が御丹精なすつた御門人、殊に又貴君になつても、皆さんが大騒ぎやつてお入來になるのを惜いことです」安「なアに宜い、今に何うにかなる」萬「何うです、然らう

やつてお在なざるから、一つ口を辯て頂きたい事があるんですが如何でせう」安「ウン、夫ア宜いが如何なことだ」萬「なアに私の朋友で與兵衛といふ顔役がある、其が本所の津輕さまの部屋頭の金藏といふ人と紛糾をいたしました、其ア先方も部屋の方が大勢、此方も支度をして、双方兩國の川で打合ふといふ事になつて、双方へ仲裁人も入つたんでございしますが、ナカ／＼六かし、何うか先生一つ口を辯て下せ」安「ヨウシ、其ちやア己が行て口を辯が、喧嘩は纏めるから、仲裁人は元の仲裁人にしてくれ」萬「其なら尙結構でございませう」其から安兵衛出て往て堂々と双方を説く、學問もあるし、年こそ若いが膽力はあるし、遂に双方は安兵衛の意見に説伏せられて、宜しく願ふといふ口上が出て、サア其様な仔合で和解が出来たといふから、彼方の間違、此方の間違と安兵衛を頼に来る、安「此ア斯うやつて道場を構へてゐることは出来ない、矢張己が江戸へ入つたとき、兩國橋の喧嘩以來仲裁人で馴たから此いつは矢張り存意に任して然らざるより致方がない、トウ／＼道場の物を手當り次第留拂ふといふことになる、是が叔父さんの方へ分つたゆゑ、安兵衛久々で叔父上のところへ参ると、乙「ヤ、其方は言語同断、屋敷へ参つてをれ」安「何うも恐れ入りました、手前四五年のところは願ひました」萬「然らば其方は、改心の上禁酒でもいたして此方の許へ来るの外、當時出入は許さん」、無酒氣なら安兵衛お謝を

したんだが、酔つてゐるから、安「然やうなら私も能考へて御返答をいたします」斯う言んでも屋敷を出てしまつたが、其でも菅野は御指南番だから、折々書面をもつて意見をなさるが、安兵衛の心では、なアに四五年経ちやアお傍へ行つてお心添をする、と言つてチヨイ／＼は參る、尤も叔父さまにも目通りをしないで、只だ空兵衛に、安「如何あらせらるゝ、餘りお寒さが厳しいから伺がツた」と申し、又某時は、安「此邊まで參つたから伺ふ」なんと申し、始終お叱りを蒙つてゐるからお目通りはしないが、叔父さんのことは案じてゐる、菅野六郎右衛門、其志は深く御承知になつてゐる、其うちに道場は悉く賣拂つて而して穴藏屋萬吉の裏へ住つた、萬「先生お移轉が済ましたな」安「ウン、此方が宜い、彼方だと種々な奴が尋ねて来て困る」萬「尤も貴君は滅多に自宅に居らツしやらない」安「自宅に居た日にやア面白くない、時に萬吉」萬「へエ」安「何うだ宜い喧嘩はないか」萬「さう喧嘩ばかり有アしません」其様なことをしてゐる内に光陰矢のごとし、月日に關守はなく、立て元祿七年となりました、九月の十五日、長野將監といふ左京様の御家老の御子息鐵之助といふ、此のお方の加冠の式の當日でござりました、御家中の御身分の方は皆お招きを蒙りました、一同お揃ひになりました時に將監どのが、將「是は御一統倅鐵之助、加冠の式にお招き申し上げたところ、御一統より又お祝ひ下しおかれ、過分に

存する、今日は鹿酒一献献したく、御緩くりと各々召上り下しおかれるやうに」甲「是は有がたく存じます、數ならぬ拙者をお招き」乙「拙者もお招き」丙「吾儕はチト遅れて出ました」各自答辭をする、其うちに未だ席が定らんので、彼方の方では碁を打たり何かしてゐる、此方の方ではお茶を頂戴して、暫らく座談の時を移してゐる、スルと村上庄右衛門も其お席にお招きを蒙つてをツて、村「ア菅野氏」菅「此は村上氏でござるか、今日は天氣も快晴いたし、御當家の御祝の眞にお目出たいこととござる」村「然やうでござる、兩三日前は眞に天氣も悪く、然るに昨日から今日へかけての快晴、御當家の鐵之助どの、加冠の式も御當日、眞に何かにつけて御都合宜しきやうに存じられる」菅「然やう」村「只今お次の室に於て貴君のお刀を拜見いたしました」菅「ハ、ッ」村「太層細身でござるが、失禮ながら彼のやうな腰の物では、スツ事ある時にはお役に立つものでござらうか、一寸お尋ねいたす」菅野先生心中に、否なことを質問る奴だと思し召したが、お年を老てゐるから敢てお氣にもかけず、菅「仰せのごとく細身でござる若年の頃は巾廣の強刀を帶用んでをツたがイヤモツ年を老ると腰に重みを感じ、ナカ／＼然やうな重い物は帶刀いたし兼る、夫ゆゑ五六年前より細身にいたしてござる、併しながら一朝事ある時は、若年の時の強刀より、彼の細身に充分にいたす

心得でござる「甘」ホ、ウ、イヤモウ老て倍す盛んとは貴殿のことござる、ア、恐れ入た、アハ、ハ、ハ、否に言葉に尖のあるやうな装束笑ひをしたが、昔野は大人、一向心頭にもかけずお在になる、其のうちにお席が纏つて、いよ／＼御配膳となりました、爰で祝盃をあげる、お盃は順に廻り逆に巡る、長野將監御子息鐵之助の親子は、御一統へズウツと一巡り、お盃をお受のためにお廻りになりました、一同、△眞にもつてお目出たきことござる「○」御目出たきことござると「各自より献す盃を受けてお廻りになりました、其うちに種々な話が出る、スルト正面のお床の間に、全紙三幅對、川中島合戦の密畫でございます、ア、何うも能出來てゐる、落款を見ると狩野常信先生、甲「ア、是は養朴先生ですな」乙「然うです」甲「確か尙信先生の子ですな」乙「然うです」甲「ナカ／＼優れてゐらっしゃる……、尤も幼年の時から、始終父の尙信について苦心をされたのですか」乙「然やう」此常信といふ人は、未だ右近と言つた頃ほひに毎日日竹を盡て清書をする、ところか父の尙信が、ア、此ア可ん、是でも可ん、未だ可んとい何枚畫て出しても逆も父の氣に入ん、乃で何うしたら此竹が盡るだらふ、ト膝に手を置いて茫然とした時、圖らず居睡つて何時か日が没れてしまふ、フト氣がついて見ると、月の昇りしも知らず、今しも障子に庭の竹が月影をもつてあり／＼と寫つた、ア、此だと直に筆を執つて、其

障子に寫つた竹を寫して、是を翌朝父の尙信の前に出した、スルト尙信莞爾と笑ひ、ア、出來たり天晴れ感じ入る、併し此竹は夜の竹だな、何うも葉が陰に見えてをる、言はれた時に流石の右近驚いて、障子に寫りし其竹を寫したりと言つた、尙信、然もありませんと申したといふ、此らが名人の神に入といふもの畫いたものを識別るといふは偉いもの、後に此常信狩野家を相続いたしまして本名を主馬と申し、號を古川、また兎耕、寛齋と唱え、後年法印に叙せられ、正徳の三年正月二十七日に、七十八歳で終つた人だ、其今常信先生が若盛りの時に筆を揮はれました川中島合戦、七十八歳は長命の部なり御子息鐵之助どの、加冠の式、招待の客は残らず武家なり、乃で七十八歳の長命をなした程の常信先生が畫されました、右の川中島合戦の三幅對を掛られたといふは、主人も餘ほど心得があつてなされた事だ、爰で一同が、甲「何うだ尊公、凄いほど能畫である、何うも恐れ入たものだ」スルト其中に一人、甲「尊公」乙「ハツ」甲「何うも拙者の考へでは、此の圖の中に一ヶ所分らん事がある、謙信公が大久保内膳を此ア切たところだなア」乙「然うだ」甲「如何に謙信公が名將で武勇があつたか知れないが、鐵石が切て鐵張の陣笠が切て、頭が二ツになつて咽喉まで割付るといふは、餘まり此ア畫空事ではないか」乙「イヤ、夫は尊公、然う言ては可んよ」甲「何故」乙「何故と申して、狩野家ぐらゐの大家で、後の寶

になるべきものを蓄くに、空を蓄べきものでない「甲」イヤ然うでない、空を盡くと仰しやるが一口に繪空事といふくらの、畫師の畫たものは大概空が多からふ「乙」夫は畫師にも一から六まである「甲」フウソク

乙「モウ何の某といふ、殊に狩野家は禁筆にして、斯のごとき名家が間違つたことを畫殘せば後世物笑ひ、必らず心得て盡れたに相違ない」甲「イヤ、拙者は鐵砲や陣笠が切たといふは信じられない」甲「イヤ切た」甲「イヤ切ない」乙「夫では屹と切ないか」甲「如何にも此方は切んと思ふ」グツ／＼論じあつてゐる、傍らの又一人が、「各々何を其やうに議論をなさる」甲「實は斯々」丙「フウソク、夫は御兩所で論をなさるより、彼所にお在ある菅野先生にお尋ねなされた方が宜しからふ」甲「然やう／＼、然らば伺つて見やう……」エー菅野先生、甚はだ是より失禮でござるが、此川中島合戦の大久保内膳の鐵砲に陣笠、ナヅキの骨まで切ましたのは、何うも不思議に思ひますが、是れについて先生の説を伺ひやうござる」甲「イヤ、お尋ねでござるから一通りお話しをいたします」差爾／＼笑ひながら、眞切此川中島の戦ひは最も激戦でござる、各々鐵が切ないの石が切ないといふ考へがあつては可ん、武術といふものは、其極意にいたりますれば、眞に氣合を入れて切ますれば、鐵も切れば石も切る、夫ゆゑ切ると信じて御修業なされい、

又切ないなどといふは未だ腕に精神も其所までは至らんので、屹と切たものでござる「一同水を打たやうになつて傾しんで聽聞してゐる、乃で一寸貞水が喋々と斯やうなことを申し上げると、何の鐵が切るものか、石が切るものか、と或は讀者諸君の中にも考へがある可ないから、爰に證據を擧げてお話しを致します、既に鐵の切ますことは、新井白蛾先生が牛馬門に書れました、夫は何ういふ事かと申すに、爰に政常といふ小刀鍛冶がある、其政常の鍛ました小刀をもつて、五郎政宗の鍛あげたる刀の鑄のあたりを削りますと、スル／＼と皆削れます、乃で某人が正宗に對つて、「△先生」△「何だ」△「貴君のお鍛になりました刀は、政常の小刀で能削れます」△「夫は當然だ、小刀といふものは、削るのが特色だ、夫だによつて、此削れないやうな小刀は役に立たない、私の鍛る刀は切れるやうに鍛へてある、削るんではない、然れば其の政常の小刀を數お持なさい」夫から十本ばかり持て來た、夫を重ねておいて紙ゼよりで二ヶ所結いて、正宗自分の鍛た刀を抜いて片手あろしに、「△エーイ、ブツウリ」スルト是が十本悉皆切た、△「何うだ、私の方は切のが特色だ、小刀の方は削るのが特色だから是だ」△「ヘエー」驚ろいて、△成ほど恐れ入りました」是は此説ばかりではない、名刀を持まして生金を切ときは、實に物の美ごとに切る、夫は心得のない者が名刀を振廻すときは、竹刀木刀に劣るかも知ないが、

心得あつて切るときは其ごとくに切る。

又石が切るといふのは、明治の今日、四ッ谷の絞ヶ橋に、伯爵松平直亮さま（舊雲州松江藩主、松平出羽守さまでございませす、此方様の御屋敷の御庭に、御影の天正初年に出来たる石燈籠が据つてをる、一丈もございませす、其石燈籠の棹石の真中の帯のやうに脹れてゐるところが一寸ほど切てゐる、此石燈籠は伏見の桃山の御庭に据つてをったので、夫が出羽さまの御所有となつてをる、其切てをるのは、加藤肥後守清正が御庭にゐいて、石田治部少輔三成に出會の時に、此治部は豊臣の天下に眞の忠臣にあらず、表面に忠を飾る佞奸阿諂の曲者なり、此奴の爲に迷惑なす者もある、此者生くる時は再び天下の大亂なり、此者を一刀兩断にして豊臣の天下を安泰になさん、と二三議論をなされたる後、加「爾れッ」と柄に手をかけ、智才は如何なれども武勇ときては清正公に及ぶべきではないから三成アット云ふ間に逃出す。

加「単法者めッ」と背後からスバツリと切になる、切人は豊臣の大忠臣加藤清正、得物は備前魚兼光の鍛たる、是を魚兼光といふのは、兼と云ふ字が魚の様に刻てある、夫ゆゑに魚兼光といふ、其時に三成が石燈籠の影へ逃込だによつて、此石燈籠の帯のところが大寸ほど切た、御影石は堅いものでございませす、其堅い御影さへも此通り切ませす、乃で貞水は金の切るといふこと

も、石の切るといふことも信して話したす積りでございませす、諸君も偽言と思し召ませし
たら、松平直亮さまの御屋敷にも問合遊ばせば、必らず此石燈籠は御庭に建立つてをります。』
借菅野先生は尙言葉を續けて、丁度此時が永祿の四年の九月の九日の事で、越後勢は信州の西城山に陣を取り、甲州勢三萬有餘人は川中島に、家々の旗馬印を立て取詰たり、其夜謙信公は宇佐美駿河守を召れ、高樓にあつて軍事の密談をなされると、何うも川中島に火ツ氣が昇る、夫を御覽になつて、ハ、ア此は兵糧を炊のであらふ、勿論兵糧は新で炊のであるが、是は密かに炊のであるから、煙りの登らんやう炭火で炊てをるのだワエ、と早くもお察しになつた如何にも武田方では、敵に悟られないやうにと、炭火をもつて兵糧を炊たのだが、何せう三萬有餘人といふ大軍の兵糧を炊たのだから、名將の謙信公忽ち悟りになつて、扱は明未明の頃ほひ、必らず此西城山に兵をかけること疑がひなし、然らば我より先んじて敵の本陣を討ち、有無の勝敗を決せん、ソレ支度に及べつと謙信公は下知を傳へたまふ、忽ちの間に八千五百人、龍頭龍尾十八段の車掛りの謙信公御工夫になつたる備を立て、馬は濡紙をもつて舌を巻き人は枚を含み密かに西城山を出られたり、斯て千曲川のうち敵の氣の付かん雨の宮の渡といふのを渡りになる、此千曲川の源といふのは、甲州武州信濃の三國の高山より絞り出るところ

の川にして國師嶽、金峯山、此兩山の谷間から發して海にいたるまで北に流れること、或ひは野邊、或ひは里の邊り段々に、小諸上田等を経て善光寺平に入り、八幡屋代の邊より東北の方位を取り犀川に合併す、其より越後の魚沼郡に入て、初めて信濃川といふ、水源より海の口に至る凡そ九里、其より川中島の合流にいたること二十五里、先越後の新潟に流れ入まで、大凡八十里を經るといふくらゐ

信濃なる筑具麻の河伯のさゞれ石も

君しふみては玉ところばん

といふのが萬葉集に見えます又

君ヶ代は千曲の川のさゞれ石の

苦むす岩となり過すまで

といふ新編古今に式子内親王の御歌がある又

千曲川春行く水の澄にけり

消て行方の峯のしら雪

といふ順徳院の御製がござる

此通り由緒のある川でございまして、又此を千曲川と稱する、然れども今此渡しを渡られるといふ時、如何にも軍令能く届いて、密かに信玄公の本陣をさして衝れる、謙信といふ方は、既に敵の要所へを打とに御熱練ある名將、然れば戰場に出られる時にも、總て腹巻行者頭巾等を冠られる采配等は滅多にも用ひはない、三尺ほどの青竹をもつて、是れにて指揮を取れたりといふ、刀でも御自分の必用的に、如何なる名刀でも御自分の使用ごろに摺あけてしまふといふのは實説でございます、丁度此川を渡りさられた頃に、甲州方の先陣真田源太左衛門は西城山に向はれたり、此時にモウ西城山は明城になつてゐた、此方は謙信公、八門遁甲金鎖の陣を敷たる武田の旗本を臨んで、龍頭龍尾十八段の車掛をもつて打破る、敵と味方と追ては追れ、別れては合ひ、散亂離合の手を盡して七度といふもの駆合せたり、旗と旗とは結び合ひ、解ては別れ、馬印は鮮血を浴び、死骸は積んで山と化し血汐は流れて泉のごとく、此とき謙信公は法性月毛の大馬に跨がり、長光の陣刀を振て信玄の旗本へ平一散に切入られたり、此とき謙信公の御武勇のために近寄る者はなく、宛然平地を行がごとき有様でございました、然れば信玄に近づき爾れと切下された時、薄鐵銀の軍配團扇をもつて是をハツシと受た、然れども軍配は二つになりて肩先に傷を受け、アツヤといふ其時に、甲州方の旗本の面々、スツ大將の一大事

と謙信を取巻八方より突てかゝる、此時謙信、鎧を切折ること十六本、何と各々總大將が自ら鎧を十六本切折といふは、容易ならざる激戦でござらう、其うちに信玄公が馬に跨がり川中まで引揚られたり、謙信公は残念と、尙も後を追ひと遊ばしたる時に、ドツと開ひたる其中より鎧を捻つて、向井十左衛門と名乗つて突出したり、其鎧が謙信公の青銅の腹巻を突通す、二度目に來る鎧を轉して、片手なぐりに切あそばしたる時、胸骨を割れて向井十左衛門倒れたり、其後春日山に御歸陣になつて、敵ながらも向井十左衛門は天晴れ強の者、彼が余につけたる鎧が、モウ五寸長ければ、余は川中島にて落命をいたしたり、今頃は彼は如何いたした、といふ尋ねでござりました、スルト本庄清七といふ者が、恐れながら彼は、彼の節に上のお刀にて頭を割れまして、目下は傷癒えまして無事に忠勤罷りあると承まはりました、然やうであるかと仰せられ、威状をお認めになつて、其節の青銅の腹巻を添へ、向井十左衛門の武勇を賞して贈りになる、向井十左衛門敵方の大將より威状を賜はり、是を返り威状と稱して武門の譽れである、夫は後のこととござるが、此劇しさ戦ひの中を、敵の血をお浴りあそばして、全身蘇枋の樽を浴たるとさ有様にて、法性月毛の大馬は血を浴て紅栗毛のごとく相成り、一方の血路を開いてお往でになるのを、大久保内膳鐵砲を構えて待かまへる、此時謙信公

は屹と此舉動を御覽あそばして、飛道具を向るは単法者と、内膳の方を白眼で、無禮者と大聲に呼はる、其聲天地に響き渡れるを、聞流して大久保内膳、ドゥーンと一發、然るに能狙ひは定めたのだが、御威光と勇氣に恐れをなしたるか、彈丸は空に射た、其うち謙信馬を飛してお乗込になり、左手に手綱を曳き、前輪に乗出してニイとお切になる、其片手おろしに來る太刀を、内膳己の刀を抜く暇もないから、持る鐵砲にて是を受た、スルト鐵砲が二つに切れる、冠れる鐵張の陣笠が切て、ナヅキの骨まで切下られ、血煙り立て倒れました。

謙信此を御覽になつて、莞爾と笑つてお引揚、後に春日山御城中にて、能切たと思し召たによつて、鐵砲をお取寄になりまして兩手をかけて長光の名刀にてニイとお切りになる、スルト此時鐵砲が半分しか切ません、餘り不思議でござるから、何うして川中島では鐵砲、鐵張の陣笠から、ナヅキの骨まで切たらふ、實に戰場の氣合と無事平安の氣合は又違ふもので、春日山城中には武藝の氣合でも切になつた、戰場にては御勇氣と御威勢と得物の好いので機會で切ましたので、夫だから各々も鐵が切ないの石が切ないのといふことはござらん、我れ等の流義に鐵切といふ秘術がある、此鐵切の秘術を御傳授をいたしますから、各々方は能氣を留て御修業なされい、マ概略鐵の切ましたお話は此の如くでござる」一同水を打たやうになりまして、首

野六郎右衛門先生の其お話を伺ひました、此時に一同は、「ア、何うも恐れ入りました」と申ました、

一寸申上りますが某新聞に菅野六郎左衛門と出てをります、此は菅野六郎右衛門といふのが事實でございます

スルト此時に先生の話を黙止して聞てをりましたる村上庄左衛門がグイと立上り、突然次の室へ往て刀を引提て其場に来りまして、村「ア、イヤ菅野先生」是は村上氏にござるか、何御用でござる「村、然れば、最前より貴殿の川中島軍記の抄讀を拜聴いたしまして、實に結構に存じました、然るに只今鐵切の秘術があると仰せられました尤も吾儕の流義にも鐵切の秘術がござる、併し話しばかりにては分らんによつて、失禮ながら拙者の刀の帽子先が三寸ばかり長いによつて此場において夫をお切下さい、然すれば此座中の各々も、成ほど鐵切の秘術をお辨まへであるといふを感ずることござらふ、何うか失禮ながらお切下さい各々御免」とキラリ抜て切先を菅野六郎右衛門に向けました、鼻の先へ切先を出した、大體の者なら驚きますが、菅野先生笑つてゐらつしやる、餘り笑へない兎器です、其所が其の武藝の極意に渡つてゐらつしやるから、此上先方で切ふとするには手を引なければ成ない、其内に、此方は轉してしまふ、

又切には振あげる、其間には變化する、其がために泰然自若として笑ひながら、實是は又異なることを仰せらるゝ、今日は御當家御令息の加冠の式にござる、其お目出たき當日に刀の鞘を拂ふといふは、御主人へ對して失禮でござらふ、切で適はぬ事なら明日拙者の宅へ御持参下さい、其時屹と切て差上る、併し刀といふものは切先が最も肝要でござるが……「村、イヤ、然やう仰せられんでお切り下さい、村上庄左衛門の舉動を一同が見ると殺氣を含んでをります、此時當家の主人長野將監どのが、菅「村上どのお控えあれ」村「ハ、ア」御家老の御一言は肝に銘じて一刀を鞘に納める、長「エ、只今此にて將監承まはれば、菅野先生も鐵切の秘術をお辨まエ、又村上氏もお心得あるよし、幸ひ此に茶の湯の釜がござるから此をお切下さい、菅野氏が二つにお切下されよ、村上氏も亦此れをお切下さい、十文字に切て下さらば、金の鍔をもつて此を留め菅野村上氏の釜とも號けて子孫に傳へたく存ずる、御遠慮に及ばんによつてお切下さい、イヤ、決して御遠慮に及ばんからお切下さい」床脇の櫃の櫛の基盤を一面、其へお出しになつて、其上に少々な布圍をお載になりまして、其の上に茶の湯の釜を伏て、長「サアお切下さい」とお出しになりました。

サア一同は、早大變なことが初まつたが、刀で釜が切ませうか「コ、サ、何うも我々は心得がな

いから、切るとも切らないとも申せなり「スルト菅野氏は、尊然らば仕つりますが、若盛りの時は敬度いたしたるなれど、年を老ては餘り切ませんによつて、萬一仕損じたる時はお笑ひ下さい」「スルト村上は、龜の甲より年の甲と言つて抜目のない老爺だ、前もつて断つておけば、萬一仕損じたる時には、夫だから断り置た、と扱やうといふのだらう、サア切るものなら切ってみろ、と言ねばかりに目を注てをる、此方は菅野氏はあ次の室で支度をして禪鉢巻をして、刀を提て夫へお出になる、尊御一同御免」と禮を正しく、スラリト鞘を拂ひ、體を定て釜を白眼で、刀に諸手をかけてチツと白眼で氣合をかける。

ところで一寸申し上ますが、真水の業體に兜を切といふことを能言れる人がある兜と申すものは決して刀では切れない、兜鍛冶の苦心といふものは、刀で腦天から切込まれないやうに工風をして兜鍛冶は造らへる、恐れ多くも今上天皇陛下の御前にて邊見惣助、榊原健吉、此兩大先生が兜を切ふと致しましたが切ません、山岡鐵太郎先生に仰せ付られたる時に、兜といふものは切ませんものでございすから、恐れ多いが私は切ん」と言つてお謝絶申し上た、夫で御沙汰止に相成ました、其後四ツ谷仲町の山岡先生のお屋敷に、邊見榊原の兩先生をお招きになつて、山貴君がたは、失禮ながら日本に一二の名人併し兜といふものは、何うし

ても切ないやうに鍛てあるものを、お切なさうといふは、陛下へ對して語ひになるものだ、武者といふものは然ういふものでは有ますまい、切ないと見込のついたるものへ刀を振冠つて切下すといふことは、武藝の極意にありますまい「斯う仰しやられて、御兩名ともに恐縮して、山岡先生の武術の深いのと、悟道徹底してをられるには恐れ入た、夫から兩先生とも山岡先生を見ること師弟の如く思つてをられた、明治になつて斯るお試しのござりまし

たるのが何よりの證據でございす。

菅野先生は身がまへておいて、其茶の湯の釜をギユウツト一つ引て、復刀の刃でギユウツと引く、一同の人は變に思つて、甲尊公「乙」甲「彼様なことをして切ますか」乙「然やうですな、彼様いふ風な氣長に引てゐたら切るかも知ません」其うちに菅野先生は、充分に斯う身構えて、ウーンと氣合が入ると、甲「ア」菅野先生が、アノ今引れたのは、刀の上刃を引て試されたのだと、合點した人もある、此は如何な名刀でも鐵に觸るのだから、刃壞れがあつては可んから、上刃を引て刃損れのないやうにして氣合を込られる、見る間に満面眞青になつて、髪髪ザア／＼と立上る程になりました、尊「エーイ」ブツッ引れたかと思ふうちに刀をかへして釜を御覽になる、尊何うやら切ましてござる「切ましてといふは切れましたといふ意味でござ

います、長野將監に進みになつて、伴の釜を割て御覧になると、ヤ、不思議にも物の美事に切りました、一同の人々も只驚いて、「へー、恐れ入った秘術があるもので」と何れも感心をしてしまつた。

甲「何うです尊公、刀で釜が切るとは不思議だな」乙「御貴殿の仰しやる通り、手前只恐れ入つてしまつた」甲「ヤ、恐れ入つた、刀で釜を切るとは恐れ入つた、手前どもの庖丁は妻が香の物を切つても驚かしてゐる」乙「此は怪しからん」一同思はず手を拍て賞賛をした、此のときに、將「ア、イヤ村上氏、菅野先生が美ごとにも切になつたによつて、貴殿も切下さい」将「ハ、ッ」併し彼の親父が切くらぬだから、己にも切るだらう、切るだらうぐらゐでは勿々立派にはやれませんが、充分にやれる心得があつてさへも、其場に臨んでは、萬に一つは仕損ずる場合もある、夫を己にやれるだらふなんと書いてやれるものではございませぬ、次の室へ参り充分に支度をして其のころへ出ると、将「各々御免」と言ながらキラリと引抜き、大上段に振冠つて釜を白眼で、将「エイ……エイ」と氣合をかけて打下した、全で飯炊男が薪でも割やうにスバツと切と、ガチンと音がしたかと思ふと、釜が粉になつて其破片が八方へ飛散た、切るか〜と白眼すえてゐた人たちの所へ、其破片が来て打付る、甲「オ、痛い、此りや怪しからん」乙「ア痛、此ア切たんぢや

ない、割て飛で来たんだ、御主人、斯やうに細かに割ましては、ナカ〜鏡くらゐでは留りますまい、然すれば何れ御不用となりませうから、拙者に一破片下さいまし」乙「尊公、其破片を何うなさいます」甲「然れば、是は頂戴すれば妻へ土産にいたし、鐵漿壺へ入させます」乙「成ほど……では吾儕へも一破片頂戴、妻の鐵漿壺への土産に」甲「ヤ、我等も一破片」乙「貴殿未だ妻君はないではござらんか」丙「何れ貰ふから其時鐵漿壺へ」乙「其様な御用意には及ばんではないか」此方の方では吸物の椀を取上げ箸をつけながら、甲「御貴殿の前だが、切と割とは大層な違ひですな」乙「然やう〜」と吸物の中の肴を口中へ入て、乙「ア痛」甲「何うなさいました」甲「肴の上へ釜の破片が飛込んでをツたのを知ないで、夫を噛で歯を痛めた」甲「お肴は何ですな」乙「鯛でございます」甲「ハ、ア、然やうでございますか、然らば釜の破片を噛で歯を痛めても、〇〇〇〇まはん」乙「此は怪しからん」甲「アハ、ハ」と笑ひ出した、流石の村上庄左衛門も道損じて氣まゝり悪く、其場ををりますことも成かねるによつて、忽ちの間に中座をして歸る、其後で菅野先生が、武藝の御自慢でもなさるかと思ひの外、他の話しをしてゐらツしやる、他の御人から武藝の話を向けて來ると、話しを他に轉じてあしきひになる、其奥床しきことは、人々只感心いたしてをります、斯て其日のお客さまは、無事に皆お暇を告て夫々自宅へお引取になりま

した。

スルト此方は村上庄左衛門が舎弟の三郎左衛門に對ひ、村眞に今日は残念であつた、菅野六郎右衛門のために恥辱をうけた、無念である「三、お察し申しあげる、御尤もござる、ご無念であらふ」村ウーン、彼の親爺のために残念、仕損じたワエ「二三日経て用があつて他出になると、お屋敷の前に遊んでをる御家中の子供が、甲ア、簽割の先生が入つた」是を聞いて庄左衛門恐縮をする、ハ、ア夫では、彼の時に居た者が、我小屋に退つて妻子に、彼の話をしたのに相違ない、と尙口惜く思つた。

スルト村上の窓下を通行する出入の魚屋の小僧と八百屋の小僧が、甲吉どん、何處へ行のだ「只今簽割の先生のところへ御用聞に行のだ」ヤ舎弟三郎左衛門が此を聞いて、三、お兄様、貴君が金をお割なすつたのは大分弘まりました「村黙止れ」三イヤ黙止れと仰しやいますか、魚屋や八百屋の子僧までが、簽割の先生といふくらゐでは、此りやお出入の者まで知たのでござる「流石の村上庄左衛門も面目なく、御奉公もなり兼ねるところから、残念ながら百石のお祿を捨てまして、村上兄弟お屋敷を浪人いたしました、乃で此をお届をいたしましたるから、君公へ其段を申し上げなければ成ない、お重役が左京太夫様御前へ出て、村上庄左衛門舎弟三郎左衛門

は、百石のお祿を捨てまして、無断にてお家を浪人いたしました「此時殿さまは、堅信じへさ奴ぢや、余を見捨て立去るとは不忠な奴併し何か仔細があるか」と尋ねになる其ゆゑ菅野六郎右衛門が、長野將監の屋敷にて簽を切ました、其時村上庄左衛門が、簽を切損じて打割ました、といふ一伍一什を申し上る、堅彼は己が仕損じ、主を見捨るとは、主恩の厚を知ざる奴、其まゝに致し置け、併し彼が捨たる百石は菅野六郎右衛門に與せいと仰せられる、爰で御家老御評議の上、殿さまの仰せられますところから、六郎右衛門をお呼出になつて百石の御加増を仰付けられる、ところが菅野先生は、御加増を下されるのは有難いが、何となく心苦しい、何々の功によつて加増申し付るとか、永年の勤め振によつて加増申し付るとか、其方の勤務勳によつて賞を與へるとか、何々の功によつて金鶏勳章を與へるとか、然いふやうな時は、頂戴をいたすのにも張合がある、ツン金鶏勳章功四級か、己は三級ぐらゐになるだらうと思つた、なんといふ心得でも受なざるお方も無にしもあらずだらうと思ひます、ところが菅野先生は、眞に然ういふわけでないのだから心苦しい、併し君公から下されるものを受をしないわけには往ないから、有難く頂戴をして、近々に御加増の披露をなさらふといふお心もち、だが此後に悪いことが無つてくれれば宜がと思ふと、決闘狀が参りました、左封にいたして、

菅野六郎左衛門殿と小さく書き、村上庄左衛門、舍弟三郎左衛門と大きく書てある、甚はだ失禮な手紙でございまして、開封いたして見ると、先達ては御家老長野將監御宅において、貴殿の御手の内を拜見いたし、其節吾儕大きに仕損じ、真に恐縮の至り、併し釜を切のと同立合とは又別なるものでござるによつて、吾儕來る十月八日牛込高田の馬場において、真劍をもつて御手の内を拜見仕りたく、屹と申し入る、此段御返事を待入候以上、村上庄左衛門、同三郎左衛門、花押元祿七年十月一日、菅野六郎右衛門殿、としてある、是を讀了つて、ハ、ア、先日のことを意恨に思ひ決闘状を送りしかと、其から菅野先生は立派に御承諾になつて、當日右場所へ出張いたして、真劍をもつて相手を致すべく、といふ意味を含んだ返事をお遣しになる、ところが此十月の八日といふのは、雜司ヶ谷鬼子母神のお會式の當日でございます、江戸市中のお宗旨のものは皆参詣をいたします、其多くの見物の中で真劍勝負に及ばふといふので十月の八日といふ日取をもつて申し入た。

乃で菅野氏が段々と容子を探つて御覽になると、相手は三十有餘人に助太刀がある、殊に中津川勇絶といふ、番町の蛙原に道場を開いてゐる一刀流の達人、浪人劍客で五百人からの門人を取立てゐる、其者が助太刀をするといふ、能探査てみると村上庄左衛門の爲には師匠である、

結局此中津川が自分の名前を江戸市中に弘めたために、本来なら此兄弟に篤と教訓して、心得違ひを留むべきが師の本意であるのに、然るに自分の名前を廣大にしやうといふところから、此兄弟を剣出しにかけて、煽動こんで決闘状を送らしたんだ、で菅野六郎右衛門を切て、兄弟の名前を揚さないで、中津川勇絶が助立だからやれたのだ中津川といふは豪いものだと弘めやうといふ、随分風の悪い武藝者だ、人の生命を捨てて廣告をしやう、廣告料を拂はないで名前を揚やう、物を宜しやうといふ、随分元祿の昔でも風の悪い人がありました彌よ菅野氏は其事が分りましたるから前日御殿に罷り出で主君の左京太様様に餘所ながら、別れをいたした、然れども其時は主君もお氣が付なかつた、後に、偕は彼時の菅野の一言は余に別れを告しか、とお分りになりました彌よ元祿の七年十月八日の朝まだき、含水手水をあそばして、神棚に燈火を備へて此を拜させたまひ、尙御殿の方には腹の中にて禮を正して御暇乞ひ、お米から煮あげましたお粥を召あがる、此から往て真劍の立合をするのだから、息の切んやう充分にお食事が済ました、菅「李兵衛」李「ハイ」菅「其方八丁堀松屋町の中山安兵衛の住居まで使をいたせ」李「ハイ」此一通の手紙を安兵衛かたへ持参いたすのだ」李「ハイ」菅「往はブラ／＼往て、返りには大急ぎで歸つて來て、是をお目付の朝倉権内さまへ差上よ」李「ハイ」面白使が出るもの

だ、往に急いで返りにブラ〜といふのは随分ございませうが、此は往ブラの返り急ぎといふんだ、何故斯やうに仰しやるかといふに本来ならお目附へお届を先きに出すのだ、ところがお届が出来れば必ず制止されるは必定、夫がために使を先に出して後に届けやうといふ仰せ付だ、此時に急げと云て、ドン〜急いで八町堀へ往てしまふ、安兵衛が手紙を開いて見れば、叔父上の一大事と血氣なる安兵衛が入丁堀の松屋町から牛込の高田の馬場へ飛で行く、ところが青山百人町から牛込の高田の馬場へ、老人の足でも歩行になるのだから、安兵衛の方が先に往てしまふと可ない、此方が先に往て真剣立合をしてるところへ、安兵衛が間に合て助太刀をすれば、此が真の助太刀になる 後先になると卑怯にあたる、ト萬事前後考へになるといふは、お年を老てゐらッしやるから、卑怯な行ひをして後に笑われてはならんと飽までも武士道の義を重んじ乃で斯お使が出ました、ところが空兵衛は吩咐つた通り、お屋敷を出とブラアア〜途中で満らんものを立て見て成たり急がんやうに出かけて参りました、氣の利てゐる男なら主人の舉動を見て、何でお使が出るのだらふと心配をするのが當然、ところが其様な了簡、其様な考へは更にございません、此方は其後において、最早此お屋敷は今上の見をさめ、と殘惜げにお屋敷を出られまして途中を然うも急ぎにならない、ブラアア〜と往で

になる。

先方へ往は真剣立合をして、夫から如何な働きに及ばれるのだから知らない、途中で息を切してしまへば、肝腎な場所に行て身體が役に立ない、夫だによつて途中をブラ〜と往らッしやる、能試してみるに、若い威勢のいゝ人が、甲「オイ火事だ〜」乙「火事は何所だい」甲「オイ此方角だ、刺ツ衣を出してくれ」絆纏を出さして着て、支度をするに向ふ鉢巻足袋足跡、甲「ホラア、ホラ〜此奴等ア退アがれ、ホラア、ホラ〜」威勢が宜い、此がモウ少し遠くなると 甲「恐ろしい滅法界遠いなア、豪勢遠くなりやアがった、エイ、ホラ〜」、恐ろしい方角を違えちまつた、滅法界骨が折るんだ、息が切てしやうがねエ、寶丹か何か持てゐねエか」乙「其様なものはねエんだ」甲「水でも一杯飲してくれ」初めに引かへ泣さうな聲をして、先方に行た時分にやア悉皆疲れてしまつて、甲「今晚はお騒々しいことございませう、真に濟ませんでございませうが、其所らへ寝るところは有せんでございませうか、夫ちやア人の家の混雑のところへ厄介になり往やうなもんだ、役を致しません、所が老人はソロ〜往て、其所の家の大切なものを持出してやつた、といふ話しは幾らもございませう、然れば菅野先生は緩くりと途中をお運びになつて高田の馬場へ往くと、見物は山をなしてゐる、甲「モシ〜」乙「ヘエ」甲「何か始まるん

でござりますか」「只今武士の眞劍勝負があるんでござります」甲「ヘー何所にゐるんです」
 乙「向ふの方の幕の中に大勢ゐるんでござります」甲「何てエ人でござります」乙「中津川勇絶て
 先生が大勢人を連れて来たんでござります」甲「私は朝飯を食て鬼子母神さまへ参詣に来たんで
 ござります」乙「誰が飯のお話をしてゐるんです」甲「でも貴君、イウハンと仰しやるから晩の飯
 でせう」乙「然らばやアねえんで中津川勇絶てエ劍術の先生です」甲「ア、然うですか、お名前
 したか」乙「冗談言ちやア可ません」丙「ア、少々御免なさいまし」丙「何た」丙「何うか私も一寸拜
 見をしたいんで」乙「拜見をしてエツタツて、爰のところはモウ入れねえ」丙「其様なことを仰し
 やらないで、何うか少々」乙「可ねえ」爰のところは己が買切てゐるんだ」丙「何程でも買切に
 なつたんでござります」乙「ナニ早くから来て、只今で買切たんだ」丙「其様な半口も乗なすつ
 て、私もモウ五分出しましから」乙「何だと」丙「貴君も只今五分、私も半口乗なすからタ、
 五分」乙「ア痛て、背後から来て足を踏で痛え」丁「御免下さいまし、未相手は来ないんですか」
 乙「未相手は来ねえ」此方が大勢だから相手も大勢だらう」一同が今か〜と相手の来るのを
 首を延して待かまへてゐる、ところへ菅野先生人を分て、言「御免……御免」馬場の中へ入り
 になる、其頃ほひに銀杏の大木がありました、其根方のところへ腰をかけて、控えになる、甲「ヤ

不彼所へ御老人の御武家さまが出た……オ、イ御老人、危ねえ〜只今眞劍の勝負が初まるん
 だ、オ、イ御老人、危ねえ〜頻りに聲をかけてをります、然れども先生ニコ〜お笑ひな
 され腰なる白扇を取て、多くの見物の中に安兵衛を来ていもをりはせんか、十月の頃九月と申
 し陽氣が宜いのに、多くの見物が砂塵を立ますから、白扇で斯う塵を拂ひながら前面の幕張を
 御覽になる。

乃で菅野先生は、死すべき時に死なざれば死に増る恥あり、の啓諭、最早吾儕、此境が最期の
 ところなりと、お覺悟をなされ、彼の毛利家の名臣清水長左衛門宗治の辭世に、「惜まるゝ時ち
 りてこそ世の中の、花も花なれ人も人なれ」と詠しごとく、我此境に大勢を切て最期を遂んと、
 股立を高く取あげ、襷を十字にあやなし、汗留の鉢巻を確かと結び、鯉口をくつろげデリ
 デリと身がまへをなされた、是を見て一同驚いた、甲「モシ、大變なことになりましたな、御老
 人がおやんなさるんだ」乙「ナニ、彼の老人が、其ア大變ですな彼のくらゐな年で親類はないの
 ですか」甲「然うですなア、親類が定めしないんでせうか、子供衆位有りさうなもんですねえ」
 乙「然うですなア」甲「併し一人で斯して来るところを見るとお子さんも無いのでせう、モウお
 孫さんがある年ですがねえ、何しろ此御老人が只た一人で、大勢を相手に眞劍の立合をなさる

のに、子があつて来なけりやア親不孝、然もなけりやア、腰でも扱てゐて来ることが出来ないんだ、此アマア大勢同士でやるのかと思つたら、此御老人がおやんなさるんぢやア見ちアおられない、ア一心配なことが出来た」甲「其様に心配なら爾さん、お歸んなさい」乙「斯うなりやア歸れつたつて歸へることも出来ない、其うちに菅野先生は、ツカ／＼お進みになつて彼幕張の内に向ひ、天地に響くほどの大音をあげ、吾ヤア／＼其ところに控えをられるは、村上庄左衛門舎弟三郎左衛門、其他助太刀の諸氏と覺えたり、菅野六郎右衛門武明此にありイザ尋常の勝負めされい」と聲をかける此のとき幕張の内より一同は、△スワ各々御油断めさるな、老人とは申しながら勿々なる手練、御助力下だされい」△心得たり、ソレ行け」バラ／＼と何れも其ところへ現はれる、菅野六郎右衛門は身構える、村上兄弟は、林「菅野先生能うこそ御時刻を違えず御出張下されたり、我々兄弟真剣をもつてお相手をいたせば、お覺悟をめされ」甲「心得たり」と菅野は一刀の鞘を拂ひ、吾「エイヤツ」と身構えをいたしてチリチリツと付る、村上兄弟は左右からキラリキラリと刀を扱て、廿「ヤア」三「ヤア」と聲をかけるとチリ／＼とつける、中津川勇範は小手脇當をつけましたることにて、鉢金の當つてゐる鉢巻、薙刀を小脇に挿込で其ところへ現はれ出で、中「ヤア／＼各々方は御油断めさるな、老人とは申しながら、眼の配り體

のこなし足の踏方、一々法にかなひ、ナカ／＼油断ならざる人物なるぞ」と聲をかける、其時兄弟の背後から、△我々は此度義によつて、村上御兄弟へ助太刀に及ぶ者なり」△吾儕は逸東又六、金子市内、翠浦典膳、榎村小十郎、貴田泰三、野中三太夫、栗橋小彌太、戸川伴藏、高宮又五郎、小田井傳八、小野彌源太、大浦紋太夫、青木市兵衛、貝澤大八、花井幸八、鷲池太郎左衛門、和田群太夫、中津川勇範」其他未後に控える人々、柄に手をかけ、△我々一同助太刀の者に候ふ。老人覺悟いたせ」トチリ／＼と詰かける。此時菅野六郎右衛門チリ／＼と進れたり、流石に大勢をりましても氣合で氣合を賣る、然れば劍術の目録を取たお方が六尺棒ぐらゐを持ってゐらしつて、何にも知らない者が十人ぐらゐかゝつても、逆も先方の身體へ此方の棒なり木劍なり打て入ることが出来ない、夫と同じ理屈だ。

今菅野六郎右衛門先生が、吾「エイヤツ」とチリ／＼と進むと、一同の者が氣合で賣られて後へ退る、村上兄弟も後へ退る、一同後退りになり、一列になつて、ヤア、ヤア、と聲をかける、一同の見物は刀の光を見まして眞ッ蒼になつて、何うなることかと、甲「大變なことになるぢやア宜ツた、御老人確かりなさいまし、先方の奴は大勢でヤア、ヤアと言つてやアがる、否なら止ア宜いのに」乙「滿らねエことを爾言ふな」其うちに、吾「エイ、エイ」と菅野先生踏込み切つけると、

貴田泰三といふ者は眞眉間を切れました、鉢巻が背後へ飛で血煙たつて倒れる、續いて、吾「エ」スバツと小手が返つたかと思ふと、先には右の奴、今度は左りの方の野中三太夫の肩口を切れたかと思ふと、血煙り立て倒れた、此時一同の者は恐れをなして、ヤア、ヤア、と掛聲ばかりで後へ崩れる、此時菅野先生は鬢髪逆立ち、兩眼血走り、唇の色を變て、左りの足を出して位置を取て、エイ、エイと進んだり、誰か一人此時菅野先生に向ひ来る者なく、只一同色を失なひ、ヤア、ヤア、と氣合をかける、見物いたしてをる大勢手に汗を握り、老人の其の働きに、甲「豪いぞ」と賞た、甲「何うだい、大層な御老人の腕前だなア、豪エものだ、大したものだ、一人で来るから此くれエな事はあるだらふと思つた」乙「其様なことを言つたて、先刻から心配してゐたぢやアないか、親類は無のか、一人で来る法はない、子はねエか、孫はねエかと一人で心配してゐなすつたぢやアねエか」甲「夫然うだ、口ぢやア心配してゐたが、腹の中ぢやア安心してゐたんだ」乙「巫山戯なさんな、冗談言ふな」甲「オ、イ御老人、私が附てゐるから確かりぢやんなさい」乙「止せやい、爾か附てゐたつて何の役に立ものぢやアねエ」ウ「アツツといふ騒ぎ、此時に多くの見物を押分けて、深編笠を冠りまして、黒木綿五所紋の衣類、白地小倉の袴を着て、紺色線千段の鞘の大小、其者がお助太刀と聲をかけて踏込んで来る。先彼の人物

が助太刀をするに違ひない、彼れは、御老人はお強いけれど只た一人、夫がために義のある武士が助太刀に出たに相違ない、感心なものだ、花も實もあるといふは即ち此へ出た武士、一同は、菅野六郎右衛門に助太刀をするといふ人が来たのだらうと安心をして見てをりました、其うちに菅野先生の背後へ近いたかと思ふと、冠れるところの笠を脱て彼方へ投捨て柄へ手をかけキラリ引抜き、△「お助太刀でござる、エイ」と背後から切込む、前に大敵を控えてをりまする菅野氏は、背後より不意の助太刀に、右の肩から左りへ背中をスウツと引れた、スルト襷が切て衣類がバァツと口を開と、身體の肌がツウツと白く出る、アツと思ふうちに、赤い水引を引たやうに血がにじむと、吾「無念」ヒヨロ／＼と來てダウン背後の方へ尻居にお倒れにならふとするを、左りの手をつき、刀の切先を一同に向け、吾「卑怯なり、無念」と仰しやる、△「ソレ計略は圖にあつた、やれツ」といふより一同アアツと切込む、チャチャン、チャチャン、チャチャンチャリン、吾「無念無念」と兩度ほど聲を發しりましたが其うちに大勢が小手から顔から胸のあたりへチヨイ／＼切込ましたから、お身體は膾のやうになりまして、吾「無念／＼」といふ哀しきところの聲は、此世の別れと相成り、此場に最期を遂あそばした。見てゐた一同がアツと驚いた、△「卑怯だ、卑怯だ」と八方より聲がかかる、此時に村上等一同

の者は、甲「べた、何と此ほどの腕前と心得てをッたるならば、今少々立合の心得もあつたのに、老人一人ぐらゐと侮どつたために、野中貴田の兩友を失つた、残念至極でござる、ソレ兩人の屍骸は幕張の内へ釣込め」と手足をもつて血のボタ／＼垂るのを幕張の内に釣込みました、然るに菅野先生はも身體は、其まゝ蘇枋の樽をかへしたやうに、無念の形相面に現はれてお倒れになつてをる、人々是を見ると、只呆然と呆氣にとられて、大勢の奴の卑怯のほどを白眼でをります、スルト其のところへ村上三郎左衛門が現はれ出で、扇を開き、三「ヤア／＼見物ども、相手を美事に仕留たるゆゑに賞ろ／＼」元祿の昔は決闘をいたしまして、善悪を問はず相手を切た方を賞たものでござります、豪い御武勇でござる、なぞと賞ましたものでござります、夫は一人と一人でやつたから、豪いとか何とか言つて賞る、此は只一人の御老人を大勢にて切殺したのでござりまして、謂ば計略、卑怯にも欺し打でござります、夫だから見てゐる者か承知しない、甲「馬鹿野郎」西「大馬鹿者、一人の老人を大勢で殺たのを誰が賞るものか、馬鹿ア、馬鹿武士」乙「爾、此様なことで威張てゐねエで、彼所へ出て言たら宜らふ」甲「馬鹿言ねエ、彼所へ行ア己ア殺されてしまふぢアねエか、夫だから、此所で威張てゐるんだ、先方が此方へ來さうなら己が逃てしまふ」と其くれエなら言ねエ方が宜い」甲「ナニ、言たつて構ふものか石を打

付けてやれ、石を打付けてやれ」サア職人や町人の氣の暴いものが、石を拾つて村上三郎左衛門に狙つて、ビユウ／＼と投る、三「コソ見物、賞ろ」コソソ、三「ア痛……無禮物め」甲「何吐しやアがるんだ」ビユウ、コソソ、三「ア痛……無禮者め」甲「ヤレ／＼」バラ／＼と投る、西「此ん畜生、何を賞る奴があるものか、此間扱め」丁「ア痛エ、此ん畜生己の頭だ」西「然うだらふ、何で先方の野郎まで届くものか、爾の頭で間に合したんだ」丁「冗談しちやア可ねエ」西「構ふこととはねエやつける／＼、ウツア／＼」といふ騒ぎ、又此方の方ちやア、己が力がありやア、丸太でも引提つて片ツ端から打殺して、お倒れになつた御老人の御無念を晴すんだが、生憎力がねエから此所で見えてゐるんだ」甲「己だつて然うだ、金カウンとありやア蜜の十樽も買って、彼奴等の頭から打かけて、蜂を大勢頼んで突ツついてもやるが」乙「馬鹿ア、満らねエことをいふな、蜂を大勢頼むなんて、其様な馬鹿なことをいふな」心ある人は只御老人の胸中を察しア、お氣の毒なことだ、萬一此御人のお子さんでもあつて、遅ればせにも是に來て、斯やうなお姿を御覧になつたるならば、定めし御慥きであらふ、お察し申す」と涙を流して此容子を眺めてゐる。此方はお使に出ました奎兵衛、途中をブラアリ／＼と、犬の羆尾たるなぞを眺めて、奎「オイ／＼向ふの子供、犬の尻尾を持上げてやんねエ」餘計なことを言てゐる、で

八丁堀松屋町の穴藏屋萬吉の裏、貸長家が三軒ございます、角の家が岡持の中へ糊を盛て、糊やア姫糊、と賢て歩行く婆さん、當今ちやア其様なことを言て商ひをする者はありませんが、昔は是でも稼業になつてをりました。

其糊賣婆アのお虎といふ、此隣家が中山安兵衛武府、奥の家が納豆賣の藤兵衛といふ者、何の家も工面の悪さうな、明治の今日で申して見ますれば、貯金の通帳などを持つてゐるさうな人は一人もない、と言て宜いやうな裏長家、安兵衛の家は錠が鎖てゐる、不在ですらか隣家の糊賣の婆さんのところへ来て、李「今日は、お婆さん」婆「入ッしやいまし、オヤ」李兵衛さんでございますか、マア此方へお上んなさいまし」李「お婆さん、和女毎もお健康で結構で」婆「ハイ、有難うございます、お影さまで身體だけは丈夫でございます」李「夫ア何より結構で」婆「有難うございます、貴君も毎もお異りなく」李「ハイ有難う、暫らくでございますなア」婆「然うでございます、當地に先生が居らッしやる時分には、毎日参つてお掃除をいたしたり、使をいたしたりお洗濯もいたしましたが、モウ左京さまのお屋敷へ往らしつてから、お屋敷は遠し、妾は貧乏暇なしで、存しながら御無沙汰をいたしてをります、彼の先生は毎もお異條はございませんか、李「ハイ、彼方へ往しつて極お健康で、今でも御勇健でゐらッしやるよ」婆「ア」然うでござい

ますか、マア李兵衛さんお茶を一つお飲んなさいまし」李「此ア毎度有がたう存じます、お婆さんお何歳でございます」婆「エ」モウ六十七でございます」李「ア」然うですか、私から思ふと一昔上でゐらッしやるが、マアお健康ですわ」婆「有がたうございます」李「就ては若旦那さまは居らッしやいませうか」婆「チヨイとモン、若旦那とは誰のこととございます」李「お隣家の安兵衛さまのことと」婆「マ」否ですわ」マア李兵衛さんの前ですが、大先生の彼方へお往でになつての後は、トウ」彼の通り御道場も奇麗に賣拂つて、毎日お酒浸しでございますよ、過日もね」貴君、家に錠が鎖てゐて軒鼻の聲がグウグウ聞えるんですよ、妾は不思議に思つたら、戸の節穴から覗くと、家の中に寝てゐるんですよ、何所から入つたんだらふと、オイ安兵衛さん、何所から入つたんだい、オイ起なくッちやア可ないと起しました、ヌルト頓て大きな欠伸をして、婆「モウ何時た、何時たと言てモウ辰下刻だよ、然うか、夫ちやあモウ起なくッちやア成ない、斯う言て起て、其錠を脱てくれと斯ふ言んですよ」李「へエ」婆「夫から妾か錠を脱てやつて、安さんや、爾、何うして家の中へ入つたんだい、斯う言て訊ますと、昨夜遅く歸つて来て屋根へ登つて、家根から引窓を開て、引窓から家の中へグウツと下たが、」竈の小端へ足をかけてウツと踏と、己の身體が重いから竈を踏壞してしまつた、尤も自宅で飯を炊や

うなことはないから平氣だが、時に婆ア一煙草貸してくれ、夫から妾が煙草と煙管を貸てやりま
すと、マア他人の物だと思つて皆な吸てしまつたんですよ」幸何もお氣の毒さまでございまし
て」婆ア顔が洗ひたいから水を汲でくれ、其から妾が見ると、其こそ手桶の紐が刎切てしま
つて、底が抜て水を汲ことが出来ない其から妾が彼方から水を汲でつて顔を洗はせました、ア
「快い心もちになつた、寝て起て顔を洗はないと、何んだか自分の身體のやうな心持ちがしな
い、時に婆ア飯を食してくれろ、其から妾が、安さん爾、眞實に心懸が悪いから、近所の米屋
だつて一升のお米も爾にやア貸ないぢやないか、早く爾は改心をして青山の叔父さんの方へ
謝をなさい、斯う言ました」幸其は御深切に……」

婆「スルト安さんが、婆ア失禮なことをいふな、一升の米も貸人がないなんと言て、己が借て來
ると、頓て表へ出て行たかと思ふと、暫らく經て米屋の若い衆を連れて來ました、其とき妾ども
の此米磨桶の中に水が入つてました、スルト安さんが、米屋大きに御苦勞だと二升ばかりのお
米を、其水の入つてる米磨桶の中へザツと入てしまつた何をするかと思つて見てゐると、大き
に御苦勞だ、眞に氣の毒だが料金は借だ、イエ貴君に貸たつて取やアしませんが、可けません。
だつて錢のないものは遣やアしないぢやないか、然やうでもございませうが、直に遣と仰し

やいましたから持て參りました、先方から來た若い者と安さんと押問答をして、其うちに腹を
立て、エー其方のやうな事由の分らない奴はない、夫ぢやア此米を返すから持て行け、と言て
水の中へ入たお米を、先方の桶の中へ投り込むやうにしてやつたんです、乃で米屋の若い者は
道々の體で逃つてしまふ、其跡で安さんがニコ／＼笑つてゐるから、安さん何うしたんだい、
と訊と、イヤ米屋の若エ奴め、己の計略で、此桶の中の周圍に、水で米が三合ばかり附着てゐ
る、是をお粥にして炊て食ば、三日の間籠城請合申すと言て、マア貴君幸兵衛さん、其お米を
お粥に炊て食てみましたよ」幸「オヤ／＼驚きましたなア、何といふことございませう」婆「未
だ／＼大旦那さまや貴君などが此方にゐらした時分の方が、餘ッばど宜んですよ」幸「然や
うでございませうか、夫はお世話さまです彼アいふ惡氣のないお方ですから、能くお世話をして
あげて下さいまし」婆「畏まりましたよ、モウ妾も始終他人のやうな心もちも致しませんで、及
ばずながら安さんの御面倒を見てをります」幸「然やうでございませうか、何うも有りがたうござ
います、能大旦那さまへも申し上げます、就ては今日此お手紙でございませうが、何かお歸りにな
りましたら、確とお渡し下さいまし、其様なお話しでは、お待受申しても何時お歸りにな
るか分りませんから」婆「畏まりました夫れでは大旦那さまへ宜しく申し上げて下さい」幸「申し傳

へます、然やうならチト急ぎますから」婆、然やうですか、眞にお早々さま」と糊屋の婆さんがお世辭を申しながら送りました、此方は李兵衛、路次を出ると尻を端折て、ドン／＼宙を飛やうに急いで青山百人町のお屋敷に戻つて参りまして、尙一通の手紙をお目附の朝倉権内さまへ持参いたしました、乃で朝倉権内さまは、菅野六郎右衛門が牛込高田の馬場へ出張いたして、三十餘人の者を相手に眞剣立合するといふんだから、此は一大事なりと思し召したが、此時はモウ疾くに菅野は大勢のために最期を遂ましたのだ、然れども君公に此事を申し上て、直にお支度を遊ばして高田の馬場をさしてお駆付になります。

此方は糊屋の婆さんが、其手紙を萬一忘れると可ないと思ひましたから、チャンと佛壇のところに立かけまして、糊を賣に往たいと思ひましたが、何うも今日斯うして青山から態々お使が来るやうでは、何か仔細のあるお手紙に違ひない、此まゝにして妾が出て行てしまつた後へ、安さんが歸つて来ても手紙を渡す人がない、と頻りに心配をしてをります。

ところへ何所で飲だかペロ／＼に酔はらつて安「エーイ」ヒヨロ／＼路次を入る安「オイ婆ア：…オイ婆ア」婆「マア本當に呆れてしまふぢやアないか、人面白くもない、雇ひ婆アのやうに婆ア／＼と言て来るんだよ、…チヨイと安さん、宜い加減におしよ、何うせ婆アは先から分つ

てゐるんぢやアないか」安「イヤ、此ア眞に申し譯がない、婆アと申して腹が立んなら婆ア」婆「何だお婆アなんて、お前さん何所をノタクツてゐるんだらよ」安「己アノタクツてゐたんぢやアない、蛇ぢやアあるまいし、相替らず喧嘩を搜してゐたんだよ」婆「今日は出た日から數へて見ると四日目だよ」安「夫ア三日でも四日でも外へ出て、忙しけりやア何日でも歸らない」婆「何が忙がしいんだ」安「夫ア定つてらア、人が喧嘩をしてゐるのを見付て、仲裁をして酒を飲のを稼業にしてゐるんだ」婆「本當に仕やうがないねエ」安「なアに己が出た朝、日本橋の西河岸の方にチヨイと心當りがあるから出かけると、其所へ往ないうちに、一組喧嘩が見付かつたんだ、此ア宜い案配だ、此様な仔合なら先朝ッばらから一杯飲ると、急いで傍へ往てコソ待てと、己れが毎もの通り仲裁をしやうと思ふと、忽ち喧嘩は止ちまやアがッた、何だツて喧嘩ア止たんだと、咎めると安さん、御苦勞さまでございますが、只今喧嘩の稽古だ、稽古でも仕方がない、己に見付つたんだから一杯飲ませろ、此所ぢやア稽古でございませから一杯飲せるわけにやア行ませせん、夫ぢやア己の方も朝口だから立飲に負て置ふ、ト談判たら可ねエ」婆「何うも呆れちまふねエ、夫から何うしたの」安「夫からモウ己も據ころねエ、然ういふわけだから、以來氣をつけると言て、ブラ／＼白木屋の前まで来ると、安さん／＼と呼者がある、見ると魚河岸

の若者、何か用があるか、といふと、別に用ちやアございませぬ、只今宜い葬式が参りました、傳馬町の長谷川といふ木綿問屋の御隠居さま九十八でお死亡になりました、大層なお葬禮、斯ういふから、寺は何所だと訊と、品川の東海寺、チト寺が遠いと思つたが、酒樽が二樽往たといふから、後から追かけた」**婆**「本當に爾、下素ばつてゐるね」**安**「夫から己が東海寺まで行と、何うも大層な葬式だ、己アモウ馴てゐるから、寺の臺所の方へ行て、人の働らく邪魔にならねエやうに陣取ると、安さん御苦勞さまでございませぬ、と赤飯を持って來た、ところが酒は寺のことだから、徳利ちやア持て來ねエ、土瓶で持て來る、何うも土瓶の酒は美味くねエが、酒が上等から飲た、土瓶の数は五十八までは覺えてゐたが、後は幾ら飲たか分らねエ、其うち己が寝てしまつたと見えて、モシ〜と起す者があるから眼を覺して見ると、此が寺の小坊主だ、モウ夕景でございませぬ、御見送の方は残らず引取でございませぬから、貴君も何卒お歸りを願ひませぬ、斯う言れて、己ア氣まりが悪いから飛た御厄介になりましたまた、何卒御厄介」**婆**「本當に否たよ此人は、復御厄介なんてお寺へ言葉を残して來たのかい」**安**「夫ア當然だ、何日往て厄介になるか分らねエから」**婆**「呆れちまふね」

安「夫から己が東海寺の龜の子石のところまで出て來ると、兩人の武士が眞劍を持ての立合、久

し振で宜い喧嘩を見付たから、アイヤ暫く、兩虎相争そふ時は一虎は傷つき一虎は死すの例ひ、仲裁人は時の氏神、拙者にお任せ下さい、と己が聲をかけて留やうとすると、己の腕前を知ら、年の若い方が、邪魔をするなど切込で來た、此ア眼も何も暗んでゐるから、仲裁人も分らんで切込で來た、ヒラリ體を轉して急所を一つ突と、ウーン、ドサリと轉倒かへつた」**婆**「オヤ安さん、爾人間は愚圖だが其様なことは蒙いねエ」**安**「何だか愚圖なんて、怪しからんことを言な、其うち又一人切かけてくるのを、體を轉して急所を一つドンと當ると、ドサツと轉倒かへつた、夫から兩人の懷中へ手を突込で、紙囊を出して中を改ためて見た」**婆**「本當に風の悪いことをおしでないよ」**安**「スルト婆アの前だが充分と金を持ってゐるから、此なら何處へ連れてつても大丈夫と、紙囊を密ツと元の通り懷中へ入て、活を入て一人宛づ生してやつた、兩人の者は豆鉄砲をくらつた鳩のやうに、目ばかりバチ／＼やつてゐた、夫から威嚇してやつた、拙者の仲裁人で御意に入んければ拙者がお相手をしたす斯ういふと兩人が驚ろいた」**真**「真とに御無禮をいたした、何卒宜しさをやうにお扱ひ下さるやう、甚はだ面目次第もござらん、など、言て恐ろしい恐れてゐるから、品川の橋の傍に洲崎屋といふ料理屋があるが知てゐるか」**婆**「夫ア知てゐらアね、海鰻の美味い家だね」**安**「夫ア感心だ、彼所の家へ往て食たことがあるのかい」**婆**「夫ア

妻だつて、昔から糊賣婆アぢやアないよ、此でも若い時分にやア割烹店へ往て飲だこともあるよ、其時分にやア何うか斯うかしてゐたから」安「夫ア話せる、彼所の海鯨の味を知てゐるとは感心だ、婆ア」婆「一々婆ア」と言でないよ」安「己が彼所の家に三分二朱借がある」婆「ママ呆れたもの、ママ爾、何所の家にも借があるんだね」安「夫から己が彼家へ連れてつて、サア彼の兩人の武士の懐中が宜いから、今此所で和解をさせる、就ては後で酒を飲むから藝妓を招でもらひたい、兩人を歸した後で、此方が三日ほど滯留して飲から、一日酒を一斗づゝ見込で、蟹の湯煮たのシヤコノ天麩羅、蠣の三杯酢等の好物の品は充分に見積つて置いてくれる、乃で酒肴代は彼の兩人の武士に拂はせるのだから、三分取つて置てくれる、序に己の借の三分二朱も突込んで取てくれ、斯ういふ談判だ」婆「ママ呆れたもんだね」安「夫から兩人を二階へ連込で、サアママ此方へ、兩人を其所へ並べて置いて、忠孝の道を説てウンと意見をしてやつた、……何を婆ア笑つてゐるんだ」婆「安さん、世の中といふものは廣いね」安「何が廣い」婆「爾に忠孝の道を説て聞して貰ふものがあるのかね」安「此ア怪しからん、夫ア自分で目下のところぢやア行ひが悪いか知んが、他人に言て聞することはチャンと心得てをる」婆「ア、然うかね」安「此刀の鞘を拂ふといふは、君のためか國のためか、親のためか主人のためか、我身の大事と

いふ場合でなければ、扱べきものでない、帯刀者が無暗に人を切といふは甚はだ宜しくないこと、刀の鞘を拂ふと同時に身命を抛つ覺悟は容易ならんこと、と己が能言て聞してやつた、以來は水魚の御交はりなされと、双方に盃をやつて馳走をする、兩人は真に氣の毒さうに、只今の御意見心魂に徹し肝に銘じました、お影さまをもつて大切の生命を繋ぎとめた、真に有がたいと言て頻りに己に謝禮を言て、何れ御尊宅へ謝儀に出ると言た、イヤ、此方の宅へお入來には及ばん、お引取になるなら當家の酒肴代を拂つてお去下さい、と斯う言たら兩人が飛上ツた」

婆「夫アママ誰だつて驚かない者はない、本當に安さん、爾にあつちやア及ばないね」安「夫から兩人は這々の體で酒肴代を拂つて逃出した、サア斯うなると前支拂だから、己が沈著て飲でゐる、大層周旋が宜い、今朝になると、時に安さん、御酒肴代があつてもりでございます、ト斯ういふ、己アお銚子のあつてもりといふなア聞てゐたが、酒肴代のもつてもりは今朝が初めてだ、考へてみると、前支拂に拂つてゐいたのが、お代り目になつてをるから、先方から談判が來たんだ、夫ではモウ拙者は暇をいたさふ夫から實は支度をするよ、先方が如才ないから、蠣の三杯酢に茶碗盛をこしらへて、お酒を二瓶持て來た、夫をクツと飲で快い心もちに酔ばらつて、

御機嫌ようを送り出され、高輪へブラアリ／＼やッて来ると、千波太郎兵衛の前に牛方が喧嘩をしてゐる、何うも武士の喧嘩の後に、チト牛方は種の悪い喧嘩だと思つたが、稼業だから見免すことは出来ない「婆、本當に呆れてしまふね」安、夫から、コレ朝ッばら喧嘩をする奴があるものか、喧嘩をして徳のいくことがあるものか、心得違ひであらふ、斯ういふと、眞に申し分がございませぬ、實は昨日牛のことから少し喧嘩をした、其いつが未終局がつかねエで、此所で喧嘩をしたんで、朝ッばらで未百も取ねエから何卒見のがしてくれ、馬鹿を言エ、此々見免せば是が例になつちまふ、見免すわけに行ねエから来い、何でも宜いから来い、トウ／＼引張て四方といふ酒店の前まで来て、四方の流水二杯立飲みで負てやツた「婆、本當に甚いねエ、牛方まで飲なくツても宜ぢやアないか」安「ところが其冷酒が、今腹の中で宜い仔合に醋が出来た、快い心もちになツた、サア婆ア、己が留守居をしてやるから構はず己に家を任して商ひをして來ねエ」婆、安さん、深切は有難いが、爾の留守居は當になりやアしない、寢てしまふんだから、夫ア然うと青山のお屋敷からお使が來たよ」安「ナニ、青山の屋敷から使が來た、誰が來た」婆、空兵衛さんが來たよ」安、空兵衛未だ健康か「婆、爾よりか餘ッばど發揮りしてゐるよ、此の手紙は何んでも今日の御用に違ひないんだから、サア早くねエ開いて御覽、何んでも大急ぎの

御用に違ひないのだから」安「ヤア夫ア千萬忝けない、手紙を受取つて酔眼朦朧としてをりましたが、チヨイと手紙の上書を見まして、安「ア能い御手跡だ、お年を老ても御勇氣を含んで、此筆法は生るがごとく、婆ア能い筆蹟だらふ、ナニ分らねエ、夫ア致方がねエ」上封じをバリ／＼糊を剝して、中より取出したる其書面を披いて、形を改めて今此を讀と、取急ぎ申し入候、借過つる頃御奉公致せしは、天地の間に只一人の甥、中山武廬の後來を思ふてなり、

安「ウヘエ、此ア恐れ入た、恐縮の至り」

然るに君公のお覺を目出たく、御家中日に増し御信用下され、有難く御奉公罷在候ところ、此程御家老長野將監御子息鐵之助殿、加冠の式の當日お招ぎを蒙り、お祝杯を受け有難く存候、此際座中に鐵切の論起り、是非なく秘術を現せしが意恨となり、前御指南番村上庄左衛門、舍弟三郎右衛門の兩人より決闘狀を贈られ今朝半込高田の馬場に出張いたし、眞劍立合に及び候、尤も先方には助太刀の者三十有餘名是あり、老人の事とて覺束なく、此書面手に入次第駆付、一方を助力いたし呉候様とまで讀下して安兵衛吃驚して、安「婆ア……」

大きな聲だから婆さん肝をつぶして戸外へ跣足で飛出し、婆「安さん宜い加減におし、何てエ大きな聲をもしだねエ」空「何時に此手紙が来た」婆「何だね時を訊なら其様大な聲をしないでも分かるぢアないか、今しがた来たんだよ」空「然か、夫は千萬添けない、此から参ッて間に合んとはあるまい」直に立上ると一つ籠の上に釜が掛ッてゐる、釜の上に小さな一升入の飯櫃が乗てゐる、夫を下して蓋を拂ふと、中の飯を手掴みでムシヤアリ〜、ヤ婆あさん驚いた、婆「此野郎、腹が空てるもんだから、大きな聲で人を威嚇して、他人の飯を手掴みにしてゐるよ、本當にマア憎らしい奴だよ」空「何れ返す」婆「何れ返すなんて、返した例は有アしないよ」安兵衛其まゝ鹽俵の中へ手を突込んで、鹽を一掴み飯櫃の飯の中へ振かけて、引掻廻して手掴みで食べる、婆さん驚いて、婆「冗談ぢやアないよ、残餘の飯が仕やうがないぢやアないか」空「何れ返すよ」婆「返した例はありやアしないぢやアないか」突然手桶の中の水柄杓へ手をかけると水を掻ひあげてガブ〜飲でゐる、顔中飯粒だらけ、空「婆ア其所退けッ」バアッと下坂康繼の刀を引提て駈出す。

此安兵衛の刀は、是迄貞水の同輩が、御幸の傳太とか、或ひは關の孫六だとか、彦山の僧正秀貞だとか申し上りましたが、此高田の馬場で用ひました刀は、故元帥陸軍大將野津道貫君の

御手に入り深く御愛蔵に相成て今尚赤坂新坂町のお屋敷にございます、勿論御鑑定付無反にして、俗に血流しといふのが、深アく鋸下から帽子までいッてをります、鍔先二尺八寸あまりございます、刀は古刀新刀を問はず切るをもッて銘刀でございます、實に何うも結構な刀でございます、閣下を始め是を拜見をした人のお説には、安兵衛は餘ほど力量の有し人に違ひない、又此くらゐのものを振廻す人であるから、十八人ぐらゐ打倒したのは、彼の當時の事を追想すると、全く豪いことをやッたのを眼前に見るやうだと仰しやるくらゐ、尤も島津家では、五月の二十八日に曾我會といふのを國表では、お武家も城下のお方も催ほすくらゐ又十二月十四日には義士會といふ事を催しになりました、忠孝のお話がございます、夫ゆゑ赤穂浪士の持残したるものは、島津家の舊御藩中には随分御所有に相成てをります、其中にも閣下の御所有の此下坂康繼は、貞水も兩度ほど鞘を拂ッて拜見をいたしてをる夫ゆゑ私讀者諸君に御紹介を致すのでございます。

其まゝ安兵衛路次を飛出すと、宙を飛がごとく、千里一時虎の小走り、往來の者は、甲「何だ何だ」乙「ヤ、浪人の安兵衛だ、何うだい顔中飯粒だらけ」甲「己ア伊賀餅の化物が飛で来たと思ッた」丙「退たア……其所退けッ」と折々聲をかけ、八丁堀より海賊橋（當今の海運橋）を打渡り

彼所より江戸橋を越て伊勢町河岸を真直に、神田お玉ヶ池から左りへ曲りて昌平橋を出で聖堂前よりお茶の水を後に、水戸様御門前から牛込の神楽坂を駆登り、寺町通を早くも過て、矢來を左りに見て右へダラ／＼と降り、直に左りへ折れ、突當つて右へ折て突當り、又左りへ折て宗源寺といふ寺へ突當り、左りへ付てトツ／＼トツ／＼と急ぎ、又突當つて左りへ折て突當り右へ曲つて高田八幡の神前まで来る、

ト向ふの方からゾロ／＼来る人等が、甲「夫だから己が否だ／＼といふのに、何でも爾が往て見ろつてエから行て見たんだ、スルト六十三四になるお爺さんをお大勢の奴が欺し打、無念／＼と仰しやつたお聲が己の耳に未残つてゐる、彼のお方がお子さんでもあつて、若其お子さんが後れて来て、彼様な姿を御覽なさりやア、何様にお慨さだか知やアしない、三十五六人位おでやるつてエから、戦争のやうだらふと思つて来たんだに、只た一人をお大勢で切たんだ」モウ宜ぢやアねエか、己だつて爾に珍らしいものを見せてエと思ふから誘引たんだ」甲「其誘引たのが宜ねエ」乙「夫だから己が謝するんだ」甲「爾が謝まつたつて彼人が蘇生りやアしねエ、此で己は飯が五日も六日も食やアしねエ」話をしながら来る、ドン／＼宙を飛やうに來ました安兵衛、其若い者の胸元をグイと握つて、安「コン」甲「ア痛エ、旦那何をするんだ、オイ／＼皆な逃ね」

で謝まつてくんな……旦那、ア痛て、」安「コン」甲「何です」安「只今容子を聞ば、老人が最期でも途たやうで……」甲「然やうでございませぬ、私が殺したんぢやアございませぬ、六十三四になりませぬ方で、豪いと思つて見てをりました、大勢の奴の内を兩人までお切になりました、スルト見物の中から深編笠を被りました浪人體の者が、お助太刀と出て出來ました、ア痛て、旦那、然ら咽喉を締ちやア話しが出來ねエ、モウ少と緩めておくんねエ」安「夫から何うした」甲「老人の方へお助太刀かと思ふと、大勢の方への助太刀で、突然に其御老人の背後から、お助太刀と言アがつて斜ツかけに切たんです、スルト御老人は無念と仰しやつて、ヒヨロ／＼と尻餅をおつきになると、大勢の奴が、メた／＼と言て、トウ／＼其御老人を寸断／＼に切ちまつたんで、無念／＼と仰しやつたお聲が私の耳に残つてゐるんで夫ゆゑにお可哀さうだと言て話をして來たんです、私が殺したんぢやアございませぬから御勘辨を……」安「アノ最期御老人はお最期になつたか、エ、残念至極ツ」てエと思はず其男を、傍らの大きな溝の中へボチヤアン投り込む、甲「ア痛て」安「是は失禮御免」甲「是より失禮があるものか」と其男は溝から這上る、安兵衛は其まゝ尙も飛がごとくに、安「御免／＼」と聲をかけたつ、右に左に人を分て、今一生懸命に高山の馬場へ駆入んとする時、五十二三になりませぬ、服装と言ひ人格と申し眞に品の

良い御新造體のお方、十六七にならふといふ文金の高島田、元祿時代の品の好い模様の縮緬の振袖、緋鹿子の布帯をダラリと結び、帯の間よりハコセコの鎖を下て、赤い鼻緒の中抜草履といふのを穿て、若黨草履取體の者を連れ、何れも皆涙を流して此方を見て來られる、此時安兵衛、右にも左にも避る道がないから、安「御免」と聲をかけて、其御新造と嬢さんの間をズツと抜た、スルト其後ろから老人の挾箱を擔ぎました者が、涙と鼻汁を一緒に垂しながら來る、夫に安兵衛衝突つたから、其老人は挾箱を擔いだまなま仰向けに倒れる、安「此は失禮、御免」と言ながら挾箱の棒に手をかけグイと起して、安「是は失禮、お負傷はないか」老「ハイ負傷も何もございません」安「夫は幸ひ、平に御用捨ッ」と言捨て往ふとすると、其御新造が、新「暫くお控え」と聲かけた

是非なく安兵衛立留ると、新「只今此下郎が何か御無禮でもいたしましたか」安「イヤ然やうではござらん、此馬場の中に於て只今老人の最期と承まはり、心急たるまゝに斯る失禮をいたしたり、是より大勢の奴を切てしまひ、其後ちお謝辭をいたす、御免下されい、新「オ、倍は貴君は御最期を遂になりましたる御老體のお親族にてござるか……如何にも卑怯なる大勢の者、未當馬場を去ず、幕張の内にて酒宴を催す有様、他人の妻さへも無念骨髓に徹し、只今辰

りまする途中でござる、早うお往であつて被等をお打遊ばせ」安「ハ、ッ、其御心添千萬添けなく存する、御免と」高田の馬場の内へ勢ひ込で駆込ます、此體を見て、△ソレ來たッ、アウツと、歸りかけましたる數百の人が、一時に引返して見物は以前に増つて、馬場の周圍を十重二十重に取圍んで容子如何にと目を注たり此時安兵衛武府、屹と向ふの隅の幕張を見、馬場の中をズウツと白眼廻し、此方を見ると、血汐に染で倒れてゐる菅野六郎右衛門、其傍に近寄りましてピツタリ坐つて、安「叔上叔、叔上」聲をかくれど空蟬の、尙耳元に口を添て、呼べど叫べと玉の緒の、今は何所に宿らん、只無念の形相を留むるばかりに、流石剛氣の安兵衛なれど五臟六腑も千斷るばかり、ヂツと叔父の顔を眺めるうちに兩眼よりハラ／＼と落涙安「叔父上、嘸御無念でござらふ、斯る御最期をお遂あそばすことであつたのか、ア一凡夫の淺ましき、今日まで不孝いたせしは眞に申し分ござらん、御許し下さい、疾より改心致し御傍らにをツたるならば、御身に惹あらせんものを、我等は幼年の時父母に別れ、叔父上の御丹精にて文武兩道ともに修業いたし、斯成身の上は御傍らにあるべきを、性來好める酒のために、遠く離れてをりしゆゑ、斯の如き御最期に間に合んとは何事なるぞ、叔父上三魂天に歸し六魄地に落ると、今暫時魂魄、此土に留まつて、拙者が仇打の働さを御見物下されい」と男泣に泣きし

たる時に、見物の中から、甲「ヤアイ安兵衛、喧嘩ばかり搜してゐたから此様なことになつてしまつた、アノ野郎、忘れやアしねエ、鰻屋の二階へ己を置いて行アがつた、あの時の支拂をしたために今に苦んでゐる」乙「ヤアイ安兵衛、敵は幕張の中にあるんだ、充分働らけ、片ツ端から打ツ切てしまエ」ワアワツといふ騒ぎ、此時安兵衛、叔父上の屍骸の血の垂るのを、銀杏の樹の根方のところまで抱て來まして、夫に寄かけると、後へ退つて兩手を付て禮をなし、帯を締め直して着物の裾を高く端折あげ、下緒を取て襷にかけやうとしたが、生憎下緒を賣て飲でしまつたから、其所に落ちてゐる繩を拾つて襷にかけやうすると、夫を最前の御新造體のお方が、見物よりズツと馬場の中に入つて、挾箱を立さして母娘は夫に腰をかけ、膝のところへ手を置いて屹と安兵衛の舉動を見てゐらツしやいました、新「ア、イヤ武家、真劍勝負に臨みまして繩の襷は不吉でござる、此なる娘の締る布帯、汚れたる品ならねば、妾が心ばかりのお助太刀と」娘の布帯を解して與るを、安兵衛受取つて、新「時に取てのお助太刀下さるは、百萬のお助太刀も同様、此御恩は生々世々忘却つかまつらず、忝けなや」と押頂き、忽ちかけける早襷スルト其お嬢さんが、髪の左右に挿てゐらツしやる銀の平打の簪を抜取り、若徒の手拭を取て、其手拭に巻込んで、是は妾が心ばかりのお助太刀」とお出しになる、空「ハ、ッ、有がたく存

しまする」と夫を受取てグツと鉢巻をする。

見て居る見物の中から、甲「ヤアイ安兵衛、年増と新造が味方になつた、確かり働らけ」といふもあれば、乙「緋鹿子縮緬充分働いた」丙「緋鹿子働らけ」といふもある、尤も縮緬が目立つ、衣類は黒羽二重五所紋白の博多の兩山の裂た帯を締てゐる、併し調へたては黒羽二重だつたが、年間を経てゐるから、黒羽二重が赤羽二重と變じ、白い紋が黒く汚れてゐる、だから赤羽二重黒御紋所の衣類、夫へかけたる襷が目立つから、乃で緋鹿子働け〜といふんだ、此時安兵衛武蔵は、武蔵の國の住人下坂康繼の鍛えたる名刀の鯉口をくつろげ、鍔元を確かと握りツカ〜と進んだが、彼の幕張をのぞんで天地も裂んばかりの大音あげ、空「ヤア〜、其幕張の内」に控えたるは、村上庄左衛門、舎弟三郎左衛門、其他助太刀の諸士等と覺えたり、斯いふ吾儕は、菅野六郎右衛門の甥、越後新發田の浪人中山安兵衛武蔵、叔父上の仇、イザ尋常の勝負に及ばん、何れも覺悟して來れやツ」とギラリと抜た一刀、左りの足を踏出して、右の足を後へ引き、刀の切先を後ろへ取て、肱を出して、肱のところへ腮を斯うさめて、ウーンと乗出してサア來いと身構えた、是を馬庭念流の捨構えと申します、ナカ〜真劍にのぞんで捨構えといふのは出來ないのでございます、樋口の馬庭念流の極意は、人を切ふといふ心を持よりも、人

が切かけて来るところを、毛一筋紙一枚の透に轉して、バツと敵手を切といふ心を持つ、夫だ
 から決して樋口の念流は人を切ふとは思はない、人を切ふとすれば切れる、即ち體中劍劍中體
 と申して、眞に腕前が上達をして極意となれば、右のごとくなるチリ／＼と構えた、此時幕張
 の内なる多くの者は、甲ソレ、各々御油断めさるな、兼て聞えたる浪人中山安兵衛武庸といふ
 は彼者でござる」乙「赤鞘の安兵衛といふは即ち彼者でござる」忽ち其の間に其とこへ一同、
 樗 鉢巻袴の股立高々と取り、得物／＼をもつて現はれたり、庄「ヤア／＼吾儕は村上庄左衛門
 三 拙者は舍弟三郎左衛門、覺悟致せつ」とツカ／＼と其とこへ出たり、後へ續いて △我等
 は助太刀の者にて候ふなり、逸東又六、金子市内、翠浦典膳、榎村小十郎、栗橋小彌太、戸川
 伴藏、大浦紋太夫、小田井傳八、高宮又五郎、小野彌源太、青本市兵衛、貝澤大八、鷲池太郎
 左衛門、濱井幸八、中津川勇範なりと名乗て出でたり、安「心得たり」と安兵衛チリ／＼と進む村
 上等一同抜たる切先を安兵衛武庸に向け、甲「ヤア」乙「ヤア」丙「ヤア」丁「ヤア」甲「エイ」乙「ヤア」
 丙「エイ」と聲をかける、全で安兵衛の身體は劍の林の中に取圍まれたるかと思ふばかり、一同
 の見物は片唾を呑で、手に汗を握つて、勝負如何と見つめたり、此時安兵衛の爲に大勢の者は
 切込み來ることの能はざる有様、安兵衛、安「面倒なり、エイ」スパツと切込たり、チャリン、チ

ヤチャリン、チャリン、チャチャリン、チャリンと彼より切込やつを引拂ひ、火柱を散した其時
 には一同の見物肝を冷して、ウワア／＼と後へ退る、安兵衛焦燥で、安「エイ、ヤツ」サクリサ
 クリ、と見る／＼間に六人を切る、血煙り立てバタ／＼と倒れた、是がために村上等一同恐れ
 をなして後へ退る奴を、踏込んで、安「エイ」サクウリ、一人が眞眉間を引れてドウと倒れる、
 小手が返るとスパツと又一人の首を拂つた、機會で首がツウ／＼と一間も飛上つた、胴體は此
 方へ血煙り立て倒れる、此時一同の見物は我を忘れて、△「玉屋ア」其様なことを言入しません、
 花火を見る人ちやア有ませんから、ウワア／＼と後へ退る。

此時安兵衛一刀を大上段にかまへて、安「卑怯者、來れい」と吐鳴た時には、滿面眞青になり、
 兩眼血走り鬚髮逆しまに切上り、最と物凄さ有様に、村上等一同は只遠く離れて、ヤア／＼と
 聲をかけるばかり、誰一人も夫へ進んで來る者がございませぬ、然るに此時多くの見物を押分
 ると、和「お助太刀」と呼はり和田群太夫といふ者が、兼て中津川勇範を討つて先に此で
 昔野六郎右衛門を打たから、此安兵衛も先の計略を施さうと、見物の内から駈出した、是を
 見まして一同の者が、△「ソレ背後へ廻つた、ソレ背後へ廻つた、氣をつける、背後へ廻つた」
 と吐鳴ました、頻りに大聲をあげて呼といへど、一人や兩人で呼のではない、大勢の人が一生

懸命になり、ソレ廻ったといふんだから、當人の耳へは只ウワアツと聞える、夫ゆゑ前の大敵に目をつけて白眼でをりまする安兵衛、其背後へ廻った和田群太夫、近よりさまに、冠れる笠を脱て後ろへ投げ、利「お助太刀イ」と聲をかけながら、安兵衛の右の肩から左へ引た流石の安兵衛血煙り立てゾドンと倒れたかとハツと思ふと、然はなくて、安兵衛の身はハラリと轉つたから、和田群太夫空を切て、前に俯つて出るところを、安兵衛は握れるところの柄頭をもつて、群太夫の米嚙を、安「エイ」と突た、利「ヤツ」ドウンと突俯ると、眼球が飛出して其ころへ最期を送る、我を忘れて見物が、△宜い氣味だア、宜い氣味だア、其様な奴は幾人でも殺してしまエ」甲「ヤアイ安兵衛、豪エ、是で鱧屋の支拂を背負せられた一件は帳消だ」乙「止つてエ事よ」其うちに村上庄左衛門が、庄「爾れ覺悟をしろツ」と切込で来るのをチャリンと受け、安「叔父上の警の發當人、覺悟をしろツ」と踏込で切る、庄左衛門受損じて腦天へ切込れ、馬「キヤツ」ドウンと倒れる、舍弟三郎左衛門、三「這は及ばじ」と逃んとするを、踏込で横に拂はれる腰の邊から二ツになつて、身體は一間も彼方へ打倒れる、サア斯うなると安兵衛いよく踏込で、右に切り左に突き瞬く間に十七人までを切倒したり、此時中津川勇範、薙刀を八双にかまへて、中「爾れ覺悟をいたせ」安兵衛は一刀の切先を勇範に向まして身構をなし、安「ヤヨ、爾

れは假初にも一流をもつて指南を致す武藝者ならずや、如何に師弟とは申しながら、理非を問はず非義の刃に助太刀を致するとは、武士道の心得の足ざる奴、只今爾の息の音を止るから覺悟をいたせ、爾ごとき者は有て益なき武藝者なり」中「爾れ無禮をいふな」突然ブウーンと切込で来る薙刀を、安兵衛體を轉して引拂ひ、跳り込で真ツ二つに切ふとすると勇範體を引てスバツと安兵衛の足を拂つて来る、此時安兵衛體を轉すと、今度は薙刀の石突をもつて、真眉間を碎かんと打込で来る、是を拂つて躍り込む、體を轉じて切込む、凡そ薙刀の手数は、蜘蛛手、搔繩、十文字、裏と表の手を盡し、千人拂ひ百人留、驚の羽おろし岩石碎きの、秘術を盡して切込だり、安兵衛武府は馬庭念流の極意を現はし、右と左に薙刀を拂ひ除け、切込む手際は飛鳥のごとく、暫時の間は電光石火、火花を散して戦かふ有様、人々手に汗を握つて片唾を呑でゐるうちに、安兵衛、安「エイ」と一聲、下から薙刀の蛭巻の邊を拂ひ上る、薙刀の柄半ばから切折れ、鼻「ハツ」と驚いて勇範、手に残つたる薙刀の柄を投つける、夫を安兵衛拂つて踏込で切ふとする、其間に勇範刀の柄へ手をかけ抜ふとする、ところをブツリ切れた、柄を握つたまゝ腕の付根から切れたから、鼻「アツ」といふと腕がブラ下つてしまつた、見物は △「此りや抜なからふ」勿論抜ない筈だ。

今度は勇範、左りの手を出して援ふとすると、安兵衛其左の手をブツリと切りました。勇範「と勇範口を開て飛かゝらふとすると、飛退つて、安「ヤア」見物、爾等の望み通り切つて遣はす、多くの見物の中より、甲「唐竹割を見せろ」乙「胴切を見せろ」丙「一の切二の切三の切といふのを見せろ」丁「ヤアイ、最ツと細かに切やい、奴豆腐に切山椒、羊羹屑に玉霰、銀杏大根千六本に切れ」其様に切るもんぢやアございませぬ、此時安兵衛、安「面倒なり、エイ」スバツと飛上つて、飛下りざまに切下した一刀に、中津川勇範の坊主頭が咽喉まで割付られ、足を踏張り頭が口を開て仰向けに倒れました。工合は、トンと人間の釘貫のやうな形でございました。ところへ町奉行保田越中守手附の與力神谷又三郎といふが出張に及びました、安兵衛に對ひまして、神「此は町奉行保田越中守手附神谷又三郎、神妙になさう」安「ヤ、吾儕は越後新發田の浪人中山安兵衛武庸、是に倒れたる老人の屍骸は我叔父なり、其醫討を致したる次第は、先是を御覽下されい」と書面を取出した、神谷氏は其手紙を見て、神「此は決闘にて、倒れたる其仇討を即座になされたのであるな、兎に角天下の御法でござるから、一度町奉行役宅に御入來下さう」安「心得ました」

此時青山穩田の松平左京太夫殿のお目附朝倉權内どのが御出張になりました、菅野六郎右衛門

の屍骸をお引取になり、釣臺に乗て此に附添、中間小者が是を擔いでお屋敷へお引取になる、乃で此は後に池上の長榮山本門寺、即ち左京さまの御菩提所へ、お手厚くお葬じり下された、で安兵衛を跡役にお抱えになるべき思召があつたが、當人が、真に有難いが大望ありと言て、遂に是をお謝絶をした。

此方は中山安兵衛は町奉行へ引致れまして越中守様からお調べがあつた、其の時安兵衛、叔父から贈りました手紙を證據に仇討の次第を申し上げる、乃で左京太夫様へお問合せになる、お目附へ届け出た書面と照合して御覽になると、全く叔父の頼みによつて、助太刀をなす積りで駆付たるに、既に叔父は打れて倒れて居より、其場を去せず醫討をした次第が明白に分りました。夫がために、叔父の仇討をいたして天晴な者であると、お賞になつて、八丁堀松屋町の家主吉兵衛をお呼出しになる、吉兵衛法廷へ出ると、幸「八丁堀松屋町二丁目家主吉兵衛面を上い」吉「へエ」幸「是に控えをる浪人劍客中山安兵衛と申す者、叔父の仇を打ち天晴なる者なれば其方に下げ遣はす、以來勅りとらせよ」吉「へエ」幸「退ませい」乃で吉兵衛法廷を退り、お腰掛へ安兵衛を連れて退つて來ました、吉「安さん、大層なことをやんなすつた、兎に角お奉行様のお聲が、り、サアお往でなせぬ」と安兵衛を連れて家主吉兵衛、八丁堀松屋町へ引取ました、サ

ア江戸中の大評判、乃で中津川勇範を始め切れましたる者は、一同御検視が済む、ところで安兵衛が切ましたる者は、皆急所ばかり切てある、夫ゆる御検視のお役人も御感心あつて、能此ほどまで切た、と、で先づ中津川勇範の死體は、門人もあれば妻もございますから、是へ對して屍骸の引取を仰せ付られました、武士道の意氣地とあつて妻には何のお構ひもなく、家財は妻が頂戴をいたしました、其他の屍骸も皆な斯ういふ風に夫々引取せた乃で訝しいのは今まで中津川勇範の取立を蒙りつた者は、此一件からして、貴君は誰人のお取立と訊ねられても、決して勇範の取立といふ事を申しません。

お話替つて爰に鐵砲洲の淺野内匠頭様のお留守居役堀部彌兵衛金丸は、采女正内匠頭二代のお留守居、柳の間詰のお大名で何か分らん事があれば、淺野の堀部に問へといふくらゐ、夫ア何うも世間に能く通つてをりまして、ナカク豪い人物でございます其彌兵衛どの、妻を照と仰しやる、是も女でこそあれ、夫に續くほどの器量で、御夫婦の中に子のないのを憂ひたが、三子を越て女のち子が出来ました、眞に幸を得たといふところから幸といふ名を號た、ところが眞に弱い方でございますから、丈夫に育つやうにと、雜司ヶ谷鬼子母神を御心願になつて、毎月お參詣に往らつしやる、殊に此月はお會式の當日であるによつて、早朝からお出かけにな

つたのだ、お歸りが毎もと違つて遅いので、彌兵衛どの、彌是よ「ハイ」彌未御新造はお歸りはないか「ハイ、未お歸りがございませぬ」彌宗助「ハイ」彌未御新造は戻つて參らんか「未御新造様はお戻りはございませぬ」彌何うも怪しからん話した、眞に何うも風儀が悪くなつて、雜司ヶ谷鬼子母神を題に、多分演劇見物でもいたしてをるに違ひない、不埒な話した、未戻つて來んか「未お戻りはございませぬ」丁度其所へ、未へお歸りになりました「彌然るか」彌彌方は大きに御苦勞でありました「苦へエ」中へエ「彌緩くり休息をなさい……旦那様只今戻りましてございます」彌フウん、何處へお往でになつたのだ、今朝未明の頃ほひから支度をいたして、雜司ヶ谷鬼子母神に參詣をすると申してお出かけた「彌ハイ遅なはりましてございます、彌雜司ヶ谷鬼子母神は何れへかお移轉になつたのか」彌イエ矢張り雜司ヶ谷でございます、彌其様ならモツと早くお戻りにならんければなるまい、餘り遅いではないか、近ごろ眞に御家中の評判が宜ない、お若い内と違つて年を重ねて漸々に不届たといふ、多分娘でも連れて演劇の見物にでもお往でになつたのだらう、演劇は決して見て悪いとは言ふぞ、勸善懲惡を其の日の内に仕分て見せるのであるから、眞に宜い教訓にもなるべきものだ、遣んとは言んから立派に今日は演劇に參りますと申して何故往んだ、以來はチト考へさつしやう

照「ハイ、何時妾が演劇の見物に参りました」照「然れども今ごろ戻つて来るは、多分然うであらう」照「夫れはマア貴君様にもお似合遊ばさん、餘り早まつたお言葉、遅なりましたのは申し分はありませんが、次第を一通りお聞下さいまし」照「フン聞ませう」照「アノお参詣を済して高田の馬場まで戻つて参りますと、大層な人立でございますまして、何がございませうと問せましたところ、只今馬場の内に決闘があると斯う申すので、娘も成身をいたし夫を迎へますれば、何れも武家でございませう、夫れゆゑ武家の妻の心得として、真剣決闘を見せて置ますれば、此娘の後學のため、又一つには度胸も据らふかと存じまして、其真剣決闘を見ました爲に、斯やうに遅うなりましたのでございませう」照「何と言ッしやる、高田の馬場に決闘があつた、夫を娘に後學のために見せなすつたと、此は豪い、流石は堀部のお婆さん」照「我夫、何を仰しやる、上たり下たりなさる」照「ヤ、夫は感心、娘の心得になる、實に立派な見物だ、夫と知んで逸まつて叱言を申せしは彌兵衛近ごろ不出來であつた、免してくれ」照「何も謝言を遊ばすには及びません」

照「シテ決闘といへば、總て血氣壯年の者が、互ひに意見の合はざるところより決闘状を贈るといふは、是までも彌兵衛、屢々覺えのあることで、定めし若年者同士の切合であつたらう」

照「ハイ、夫が今日のは、實にお話し申すも涙が溢れるやうな……」照「ナニ、お話し申すも涙が溢るゝとは、シテ如何な工合であつたか」照「其御當人と申しますのは、丁度貴君さまに、然やうで、三つ四つもお若いかと思ふ御老體でございまして」照「フウン、シテ相手は」照「相手は大勢でございまして、何でも三十四五名をりました、皆壯年の者ばかりでございませう」照「ヤ、夫は大變、シテく勝負の工合は何うであつたか」照「ハイ、先其御老人が、大勢のをります幕張の内に向ひ、何やら仰せられますと、其幕を絞つて大勢がドカ／＼と出ましてございませう」照「フウン」照「スルト其御老人が刀を抜て青眼に身構をなされた時、誰一人切込者が有ません、其御老人のために次第に後へ退り」照「フウン豪い、何うも老人は本鍛錬であるから、皆其ごとくである、今の若い奴等は、口は高慢に饒舌るけれど、實地へ参ると然うは可ん、ヤ、夫りア聞も愉快だ、夫から何うした」照「其のうちに若い内に當人と見えまして兩人が其御老人のために次第に後へ退りまして、後に並んでゐる大勢の中へ入つてしまひました」照「フン、フン」照「其うちに貴君、御老人のために一人が眉間を切れ、一人は肩から胸に引れまして、血煙り立て倒れました」照「フウン、豪い、夫から如何いたした」照「スルト最う大勢は、餘ほど恐れましたものと見えまして、何れも震へを生じまして皆後へ退る、御老人は折々烈しく氣合をかけまして

お進みになりましたる時は、鬢髪逆立ち兩眼血走り、見るも恐ろしき有様でございしました「
 照」成ほど、夫から何う相成った「照」其うちに多くの見物の中から深編笠を冠り、着流しにて大
 小を付ました方が、お助太刀と申して駆て参りました「照」ホ、ウ「照」假令お強くて入ッしやい
 ましてもお一人の事ゆゑ、此は御老體にお助太刀の方と思ひ妾初め見てをりました「照」ホ、ウ「
 照」スルト貴君、其奴が突然に冠れる笠を投まして、刀の鞘を拂ふと、御老體の背後からお助太
 刀と聲をかけて切ましたのでございます、スルト其御老人が無念と仰せられ、ヒヨロ／＼と尻
 居にお倒になりました「照」イヤ、卑怯未練の舉動「照」然やういたしますると、無念／＼と仰しや
 るを、べた／＼と、大勢の者が切ました時に御老人は頻りに受流してお在でしたが、何せう大
 勢の刃に、小手の邊から胸のあたりを胎のやうに切れましてトツ／＼無念と哀しいお聲を發し
 て、其場へお倒れになりました「照」エ、残念なことをした、併し其中に武士の見物は無ツたか「
 照」ハイ、お武家の見物は六分通りでございました「照」夫ほど大勢武家が見物をしてゐながら、
 其老人へ對し義のために、大勢の中へ切込だものは無ツたか「照」夫はございませぬ、相手の方
 には中津川勇範といふ劍客者がをります、夫ゆゑ誰も出人はございませぬ「照」ア、情ない、己
 の子が男子であつたなら、此彌兵衛の氣質を繼いで、必らず見てはをらん、其ところへ躍り出で

老人のために切込であらふのに、アア女の子は役に立んものだ、コレ宗助、馬の用意をいた
 せ「宗」ハ、ソツ

照「貴君さま、何方へ」照「此から己が高田の馬場に駆付け、其老人のために相手の奴ばら鎗玉に
 上るツエ」照「マア貴君 少々お待ちなさいまし、今からお往でになつたとて無益でございます、
 相手は疾に切れました「照」エ、ソツ、何者が切た「照」ハイ、妾どもお氣の毒で堪りませんけれ
 ど、逆も致方がないから立歸らふと存じますと、年の頃は二十四五にお成あそばすお方でござ
 いました、尾羽うち枯した御浪人、妾と娘の間を通り越して往らッしやらふとしたんで、供を
 して参る袂箱を擔いでをりました小者に突當り、小者が倒れました、夫をお勞りになりますか
 ら、妾がお訊ね申したら、其切れた御老人の御親類のお方「照」ホ、ウ、餘ほど御零落と見える
 ナ「照」ハイ、而して其お方が、大勢の者を切て緩くりお謝を申すと仰しやいました「照」フ、ソ、
 然やうか「照」其まゝも勇ましくも馬場の中にお駆込になりました、スルト歸りかけた多くの
 人が、ソレ來たウワアソツと皆引返して、以前のやうに馬場の周圍が黒山のやうな見物となりま
 した「照」フ、ソ、ソツとところで其お方が、馬場をグルリと一巡り見廻して、其御老人の死骸の傍
 へ參つて、頻りに大聲あげてお泣めそばしたる時は、妾も共に涙が溢れました「照」ヤ、お察し

申す「照」夫から其死骸を銀杏の根方のところへ抱て入ッしやいまして夫に立かけ、両手を付て御拜を遊ばし、夫より衣服の裾を高く端折り、下緒がないのを見えまして、傍に落ちてをります細を拾ッて襷におかけなさらふとしますから、娘に締さしてある緋鹿の子縮緬を取て、武士たる者が真劔勝負に臨んで細の襷は不吉でござる、是なる少女の締たる布帯、汚れてをりませんから心ばかりのお助太刀、と申て差上りました「照」豪い、出来した婆さん、流石は堀部の妻「照」貴君嬉しいでは寒いぢやアございせんか「照」ヤ、近頃にない大出来だ「照」スルト夫を押頂いて、此御恩は生々世々忘却はいたさんと、お襷をおかけ遊ばした時の早さ、感心いたしましてございます「照」フン、フン、夫から如何いたした「照」其うちに娘が、左右の髪に挿たる平打の簪を抜取まして、若徒の手拭に包み、心ばかりのお助太刀と申して、お鉢巻にお與へ申ました「照」夫は其方が指揮をいたしたのであるか「照」イエ、娘の心から出ました「照」ヤ、豪い、流石は己の娘だ、能其鉢巻をお貸申した「照」是また押頂き、御恩のほどは忘れんと鉢巻をなされた時に一同の見物は、ヤア確かりやれ、年増と新造が附てをると申しましたから、真に氣まりが悪うございしました「照」フン、フン、然やうか、シテ〜其働きは「照」大きな聲で何やら仰しやいましたたが、能う分りません、夫から刀を抜て切先を後ろの方に向て腕を突出し、サア来いと身構え

をなさいました、スルト大勢が刀を抜て、ヤア〜といふ聲が苑りました「照」ウーン、ハテ其構えは「照」何でも私の背後に立てをりました武家の仰しやつたには、馬庭念流の捨構へとか、申しました「照」ハ、ア、念流の捨構えを用ひるとは天晴な者「照」夫から刀を振冠ッて、全身血を浴て敵をお白僅かの間に八人倒れました「照」フン、フン「照」夫から刀を振冠ッて、全身血を浴て敵をお白眼になりますと、大勢の者は後へ退ッて、只ヤア〜と聲をかけるばかりで、更に近づくる者はございせん「照」フン、夫は又愉快だ、夫から如何いたした

「照」然う斯ういたしますうちに、復最前の深編笠を冠りし者が、背後の方から廻りました、サアモウ一同の見物は心配いたして「背後へ廻ッた、背後へ廻ッたと聲をかけた「照」フン、フン「照」幾ら背後へ廻ッたと聲をかけたしても、何しろ大勢で吐鳴ますから、更に其御浪士の右の肩から左りへ斜ッかけに、背中をスウッツと切ますと、其のお若い御浪士が血煙立て「照」エ、しまつた「照」と思ひましたのでございす「照」何だと「照」と思ひましたのでございす、夫が其お若い御浪士が切れないで、ヒラッと體を轉しましたので、一同の見物を始め、妾どもは冷汗を流しました「照」婆さん、餘談は止て話さない、切れて倒れたなんといふ

から吃驚いたした「照」夫から其奴が空を切て俯るところを、御浪士の握ッてゐらッしやる柄頭で彼の横面をお突になると、米嚙を碎かれ眼玉が飛出して倒れましてございます「照」夫は又愉快だ「照」モウ此時ばかりは大勢の見物が、宜い氣味だと騒ぎ立てましてございます、夫から殘餘は皆バタ／＼と切れまして、一番後の中津川勇絶と申す者は、薙刀を切折れまして、兩の腕を切れまして、頭を咽喉まで割れまして、全で人間の釘貫のやうな格好をして倒れましてございます、實に此時ばかりは、モウ皆な賞まして、餘り混雜をしてゐますところへ、町奉行の手附が來たとか、誰人がお出張になつたとかいふ騒ぎになつて、夫ゆゑ娘に負傷でもさしてはと只今戻りましたので、遅なりましたは右の次第なれば、何卒御勘辨を「照」ヤ、豪い、然ういふ見物をして遅うなつたのなら、何の此方は叱言は申さん、シテ其御浪士の御住所御姓名を訊ねて參つたか「照」ナカ／＼混雜で其暇はございませぬ「照」何だと、夫では御浪士の姓名を尋ねなさらんのか、何といふことだ、コレ汝は日頃から何と言てゐられる、何うか宜い婿を迎りたい、と雜司ヶ谷鬼子母神へ心願をして、毎月々參をしてゐなされるではないか、折角樽を貸し、又娘が鉢巻をと、替手拭の心添までして、夫ほどの働きをする人、夫ほどの腕前、夫ほどの人物を、鐙にしやうといふことを考へない筈はない、浪人を幸はひ君公へ願ッて、當家の鐙養子に

しやうといふ心ぐらゐはありさうなもの、此世の中に鐙にしやうといふ者の、住所姓名を知んといふ白痴者が何所にある、爰な裡婆ア……年古うして人の心を知といふに、和女のやうな心なしはない、又娘も娘だ、生涯我所夫にしやうといふ者の、住所姓名を訊ねんといふは、サア最早和女は家風に適んから離別に及ぶ、出て失い「照」此はマア怪しからんことを仰せられました、妾は十七歳から御當家へ參りまして、今日に至るまで何の不都合もなく、今更離別さるゝ覺えはございませぬ「照」覺えないとは言さん、現在鐙にしやうといふ者の住所も名前も知ん、其様な白痴者は出て往け、出て去んければ一刀兩断にしてしまふ「此御立腹を見かねて鐙さんは母親さんの味方、娘母上様、據ころございませぬから此方へ入ッしやい、お父様のお心が偏屈てゐらッしやいますから」照「ナニ、お父様のお心が偏屈てゐるとは何事だ」と憤々亂々と怒ッてゐらッしやる。

乃で堀部の妻女は毎の御氣象を御承知であるから、お言葉に逆らはないで一室へ退ッて容子を伺ッてをりましたが、彌兵衛どのは毎日腹を立て御機嫌が悪い、スルト丁度五日ばかり経まして、婢「御新造さん、只今八百屋が參りました」新「ア、然うかい」とズツと臺所へお出になりました、入へエ御新造さま、今日は芋に大根胡蘿蔔八ッ頭、蒟蒻、葱……」新「コレ／＼、然やう

な物は下女が皆引受てをるによつて宜しいが、少々尋ねたいことがある「ス」へエ「新爾などは市中のことは、大抵何も斯も知てをるであらうな」ス「へエ、何ういふことでもございませうか…何所に何があつたとか、彼所に何ういふ喧嘩があつたとかいふ事は、毎日歩行てをりますから、何でも大抵なことは存じてをります、只々分らないのが城の石垣が何個あるか…」新「コレ、其様なことは誰も聞は致しませぬ」ス「へエ、恐れ入りました」新「アノ五日許りに牛込の高田の馬場で仇打をなすつた方を知てをるか」ス「へエ、彼あ貴女何でございます、私どもの直一軒隔て先の裏にをります者で」新「オヤ、爾は一體何所から参る」ス「へエ、八丁堀松屋町でございす」新「オヤア然うかい、彼のお方は何と仰しやるお方だい」ス「家主は吉兵衛といふのでございす、彼の男の名前といふのは漸く今度分りましたので、一體が愚圖安泥酔の安兵衛、喧嘩安兵衛、仲裁人安兵衛、赤鞘の安兵衛、葬式安兵衛、なんといふ種々な名が有りましたのでございす、今度高田の馬場で百三十八人ばかり斬倒しましたので、大層なものでございす」新「オヤ、然うかい、何といふ名前だい」ス「越後新發田の浪人で中山安兵衛武庸といふのでございす、今度大變な働きを致しましたのでございす」と實地に見てゐましたお方の前で虚言を吐て話をする、新「ア、夫で大きに分りました」ス「今日は何ぞ御用は

新「ア宜しい」八百屋は驚いた、散々饒舌て何か買て頂かうと思つたんだが何も御用なし御新造は其まゝ奥へ入つて、新「良人」新「何だ」新「漸く高田の馬場で仇打を遊ばしました、御浪土のお名前が分りました」新「何所にお出になる」新「八丁堀松屋町の家主吉兵衛の店であるといふことでございす」新「お名前は」新「越後新發田の浪人中山安兵衛武庸と仰しやるらうでございす」新「ハ、ア然うか、然らば此方が参つて篇とお話をいたして…」新「ア少々お控えあそばして…是は私の考へでは、寧のこと良人様が住らせられますより、妾が参つて確とお話を申した方が宜しからふと存じます」新「然うか、然らば其方罷り越が宜い、其代り確に談判を闘へて参れよ」新「ハイ、では娘を御拜借をして参ります」新「ア、勝手に連て参らっしゃい」乃で御新造はお嬢さんにお支度をさせ、御自分も支度をなさる、供の者へも命ぜられさせたによつて、各自支度が出来上つて、鐵砲洲の輕子橋の淺野内匠頭さまのお屋敷を、堀部彌兵衛金丸の御新造、娘のお幸どのを連てお出かけになりました。此方は家主吉兵衛に伴られて歸宅しました中山安兵衛、今まで自宅にゐたことのない男が、何うしたのか少しも外へ出ない、家主は心配ですから女房に、室「婆さんや」室「ハイ」室「何うも安んが餘り外へ出ないと、私は氣になつて成ない、お奉行様から役の通り、働はり遣はせと仰せ

られたんだから、一寸往て擧動を見て来やうか」婆、往て見ても出なさい、何うしたんだね、彼様に内を外にしてゐた人が」婆、然うだ、ちやア己が往て見て来る」と出かけて来て、婆、安さん居るかい」婆、ヤア是は家主、お催促になつても、今のところちやア切々進られないよ、店賃は」婆、冗談言ちやア可ねエ、催促したつて寄越す人ぢやアない、何うしたかと思つて見に来たんだ何故自宅布團に潜り込で寝てばかりゐなされる」婆、夫はね、今までと違つて表へ出ると、ゾロ／＼人が附て己の顔を見て、小蒼蠅で致方がねエ、夫だによつて己は家にゐる方が樂で宜いんだ」婆、夫ア爾さんが、彼様な豪いことをなすつたから、如何な人だらうといふので皆が見るのだから、爾さんだつて大勢の人に見られりやア罪滅した」婆、巫山戯ちやア可ねエ、己は罪滅しをする程の悪いことをした覚えはねエ、時に家主」婆、何だい」婆、奉行の保田越中守が何と仰しやツた」婆、彼の時は、叔父の仇打をした天晴れな者、以來劬りとらせいと仰しやツた」婆、然うだらふ、然れども少しも劬つてくれねエぢやアねエか」婆、冗談言ちやア可ない、此よりか劬りやうが有はしない、家賃も取ないで置のだ」婆、其様なことを言ないで、偶には舖の刺身に酒の一升も劬つたら宜らう」婆、冗談言ちやア可ない、家賃も拂はないで其様な虫の好いことを言ちやア可ない」婆、宜しい、劬らなければ奉行所へ届ける」婆、マア少しも待よ、冗談言ちやアない

厄介な男だ」家主は驚いて安兵衛の家を飛出し、婆、婆さんや」婆、何でございます」婆、安さんが家にゐたから、何うして外へ出ないのだと尋ねると、外へ出ると人が見て可ないからと斯ういふのだ、夫から奉行が過日何と言たと言から、叔父の仇打をして天晴れな者以來劬りとらせいと仰しやツたてエと、少しも劬らねエぢやアねエか、舖の刺身に酒の一升も劬れ、劬らなければ奉行所へ届けるてエんだ」婆、然うですかい、始末にいかない男だ、お奉行所へ届られて如何な叱りを蒙らないとも限らないから劬つておやんなさい」婆、何うも致方がない」乃で家主が酒を一升舖の刺身を注文をして安兵衛の家へやつて来た、婆、サア魚屋、此方へ持て来な、酒屋大きに御苦勞だ、此方へ持て来な……サア安さん、酒と肴を劬るから飲ませエ」婆、此は有がたい、家主のことをおぼやといふ、おぼやと言は親も同然、親子の間に遠慮はない、何うだ醬油を少し持て来ておくれ」家主は致方がない、と自宅へ歸つて女中に醬油を持して遣す、如何な工合と、復来て見ると、婆、有がたい、結構な酒だ近頃は此ほどのをやらない、舖も上等だ、此いつは美味い、何うだ家主、一杯やらないか」婆、夫には及ばない」婆、其様なことを言ないで」婆、私に冷で飲たことがないから」婆、煙酒と冷酒を同時に飲のは可ないが、冷ばかりなら差支へはない、マア一杯遣なせエ……時に明日は何を劬はる」婆、巫山戯ちやア可ねエ、毎日劬

らしちやア困るぢやアないか「家主は自宅へ歸つて来て」家婆さんや、喜んで飲でゐるよ」
驚然うですか、マアお茶でもお飲んなさい」家婆恐ろしい愛嬌のある男だ、何だか憎まれ口を聞
けれども何となく可愛氣のある男だ「家婆本當ですわね、爾さんと違つてナカク愛嬌者」家婆何
だと、冗談言なさんな、私が愛嬌がないのか」其の途端に立派なお武家が門口へ来る。

武頼ウむ「家婆へ」武家主吉兵衛といふは其方か「家婆へ、家主吉兵衛は其方で」武何だ其方
とは「家婆へ、何うも恐れ入りました、何か御用で」武其方支配内に浪人中山安兵衛武府殿お住
居に相成てをるか「直、へ、お住居になつてをります……婆さん世の中は是だから嫌になつて
しまふ、家主を呼捨にして、店子を殿づけだ……貴方様は何方から」武此方は相良遠江守家來
河原十兵衛と申す者、些と用事あれば御浪宅へ案内いたせ」年の若い武家だから家主に權威
を振つて、物の云かたは何となく荒々しいところがある、頓て家主が案内をして直此家でごさ
います……安さん「家婆ヤア家主」直「お客さまだ」家婆「お武家はフイと見ると驚いた、壘が
二疊半しかない、其餘は根太板が現はれてゐる、ズツと向ふに徳利が三十五六本行列をしてゐ
る、何にもない徳利大盡、何うして此様に印の違つた徳利が澤山列んでゐるかといふのは、八
町四方の酒屋から酒を持って来る抜刀をして威すから徳利も勘定も取に來ない、夫が著つてズツ

と列んでゐる、河御免下さい」家婆此は、先ズツとお通り下さい」ズツと通れば裏へ往つて
しまふ、恐ろしい汚ない住居だと思つた、河初めて御意得るが、此方は相良遠江守家來河原十
兵衛と申す者、以來お見知置れるやう」家婆是は、申し送れて恐れ入る、浪人中山安兵衛武
府と申すは拙者」河今日吾儕罷り出たるは餘の事にあらず、其許は先頭牛込の高田の馬場にお
いて、真剣立合に十八名の人を切倒され、其武名天下に輝きわたり、我御主人は五百石をもつ
て、貴所ごとき武藝者を抱えたと仰せあり、相良家へ對し御隨身下し置れるや如何に」家婆此
は真に有がたき仕合せなれど、未だ藝道修業中にいたして、モウ兩三ヶ年修業つかまつり、御
縁あつたる節は御奉公つかまつるでござらふ夫まではお謝絶申し上ますれば、お歸りあつて君
公御前體へ宜しう、御免」と向ふを向てコロリと轉覆かへつて寝てしまつた、河原十兵衛、無
禮千萬と思つたが、腹も立ないから、二言と言ずに其まゝ憤然として歸つてしまふ、家主は見
かねて、直安さんモウ馬鹿は歸つたかい」家婆何で其様なことをいふ」直「今來た武士だ」家婆彼か
彼は馬鹿でもねエやうだ」直彼様な物を知ねエ奴はない、夫は宜が安さん、五百石は鎗一筋馬
一頭、武士一人前の御奉公だ、何うだらふ安さん、爰は御奉公をして兎も角も家賃だけ話をつ
けて貰ひたい」家婆家主、其様に心配しないでも宜い、今に己が家賃などは百層倍にして返して

やる、燕雀何ぞ大鵬の志ざしを知らん」家主は呆れて自宅へ歸つて来て、言婆さん、今の武士が安さんを五百石に抱えに来たら謝絶だよ」婆「マア慾のない人ぢやアないか、何を考へてるんだらふ」直「何を考へたつて五百石だ、亦止せばと言て、一時でも承知したら宜らふに、罪のない男だ」△頼む「直、また來たせ……是は入來しやいまし」△家主吉兵衛といふは其方か」直「手前でございます」△其方支配内に御浪人御客中山安兵衛武庸殿も住居あらば一寸案内をして貰ひたい、此方は南部飛彈守家來殿村吉左衛門と申する者」直「何卒此方へ……此は忙しくなつて來た」と口小言を言ながら 直「安さん、亦お客さまだ」安「此は、何卒此方へ通りぬされ」南部飛彈守家來殿村吉左衛門、安兵衛の容子を見て薄汚ない男だと思ひながら、△然らば申し上るが、先頃牛込の高田の馬場において十八人の人を、眞剣立合に切倒し天晴れなるお働きの主人五百石をもつて召抱たくと仰せられる、如何でございます、南部家に御隨身下しおかれやうか、御承知の通り南部大膳太夫の分家でございます」安「仰せなくとも承知いたしてをる、眞に思し召は添けないが未だ藝道修業中にいたして、兩三ヶ年修業つかまつり、御縁あつたる其節は御奉公仕る、夫迄はお断り申上りますれば、お歸りあつて君公御前宜なにお執成を願ひたい、御免下されら」ゴロリと亦寝てしまつた。

殿村吉左衛門呆れて歸つてしまふ、何人來ても未藝道修業中といふ、乃で家主が、言婆さん、幾ら往つても彼の男は可ねエ、徒勞な案内をするばかりだから、專のこと此所で断つてしまふ、構はねから」と言てゐるところへ又、△頼み申す「直、へエ」△家主吉兵衛とは其方か」直「手前でございます」△其方支配内に浪人劍士中山安兵衛武庸どのお住居になつてゐるか」直「眞に有難さ仕合せでございますが未だ藝道修業中にいたして、兩三ヶ年修業つかまつり御縁あつたる其節は御奉公つかまつる、夫まではお断り申し上る、お歸りあつて君公御前ていへ、宜しう御披露願はしう存じます、然やうなら」△何だ、其方を抱えるのではない」直「お往でになつたところが其通り断ります、態々汚ない家まで御足勞御無用、何人お往でになつてもお断りをするから、手前がお断りの言葉悉皆覺え込ましたから、取次でお断り致します、然やうなら御機嫌宜しう」何人來ても家主が未だ藝道修業中」△吉兵衛さん、冗談ぢやアねエ、私だ」直「ヤア此は隣りの御主人」△人さへ來ればやつてるね」直「私は蒼蠅で致方がない、厄介な者を店子に置た、妙な男が世の中にあれば有ものだ」と言てゐるところへ、△御免下さい」見ると五十四五になる品格の好い御新造體のお方、十六七になる嬢さん、振袖を着いたし、若徒に草履取が附て其所へ來た、直「此は誰人さまで」△家主吉兵衛殿と仰しやるは」直「へエ、吉兵

衛殿は手前でござります「△貴君の御支配内に中山安兵衛武庸といふ御浪士が住居になつて
 ぞりませるか」言へ、お住居でござります、御案内をつかまつりますでござりませう」△眞に
 相濟ませんが何卒御案内を願ひたう存じます「言委細心得ました」と腹の中で、サアベた、叔
 母さんか何か尋ねて来なすつたのだらう、然うすれば家賃が貰へると家賃の事ばかり考へて、
 頓て安兵衛の家へ来て、言安さん」△ヤア家主何うしたい、少しも来なくなつた」言来ないど
 ころの騒ぎぢやアない、毎日五人も六人も七人も尋ねて来るけれども、私がチャンと門口で謝
 絶る、眞に有がたい仕合でござりますが、未藝道修業中にいたして、モウ兩三ヶ年修業つかま
 つり、御縁あつたる其節は御奉公つかまつる、先夫まではお断り申しあげ、お歸りあつて君
 公御前ていへ宜しう御披露願はしう存じます、然やうなら、恚ういふのだ」△冗談ぢやアな
 い然う爾が獨で断つてくれても己に亦……」言迎も駄目だと思ふから断つてゐたが、今度は御
 婦人のお容様だ」言れて安兵衛ヒヨイと覗くと、高田の馬場にて仇打の際榊巻を貸してくれ
 る大恩人、ハツと驚いて表へ飛出し地上へ兩手を仕へた、家主驚いて、此野郎男には強いが、
 女にはのろい奴だ、△此は、斯やうなところへ御光來を蒙り何とも恐縮千萬」△先手
 をお擧下さるやう」△イヤ、其節御拜借をなしたる榊巻、血汐に汚れましたるから、洗濯屋

へ遣はしたれど、お住居の相分らんため未だ御返却もつかまつらん」虚言ばツかり、疾に賣て
 飲でしまつた、一時のがれの言譯、△然やうな品を御催促に参りましたのではござりませぬ、
 何卒お免し下さいませ」△眞に見苦しうござるが通下され」と安兵衛少くなくなつて手を付
 してゐる。

汚ない家も厭はず其處にビタリとお坐りになり、照さて妾は淺野内匠頭家來江戸定府の留守居
 役、堀部彌兵衛金丸の妻照と申する者でござります、此は娘の幸と申する者以後お見知あかれ
 まするやうに」△此は、拙者は浪人中山安兵衛と申す者、過日仇討の節は、御厚意の御
 助太刀を蒙り、未だ謝禮の一言も申し上ず何とも恐れ入ります、彼の御恩は生々世々忘却はつ
 かまつりませぬ」照併し彼の時は御本懐をお遂あそばして、眞に結構なことでござりましたお
 芽出たう存じます」△此は眞に忝けなう存じます」照就ましては此娘は未定婚もなく、貴郎
 のごとき武道秀でたるお方を、生涯の夫と致させたいと存じます、夫ゆる今日は夫彌兵衛に申
 し付られました、不束ながら娘の婿にお成下されるやう、御承知を願ひたく罷り出ましたるな
 れば、御不足でもござりませうが、陪臣三百石の家に入聲下し置れまするやう」安兵衛驚いた
 此は大變だ、陪臣で、殊に五萬三千石の留守居役、我は假令百石が五十石でも天下の直參にな

らふといふ望で、大藩からお抱にならふといふのを皆謝絶てしまつたに、飛たことを持込れたと身震ひして、安、何うも折角の思し召なれど、拙者は實は此先大望のある者、他家を相續つかまつること相成かぬる身分に候らへば、其儀は平に御宥免下しおかれたり」堀部の御新造はキツと開き直つて、照「サア御承知がないとございしますと、妾は夫彌兵衛への手前、何と一言の申し分もなく、實は夫彌兵衛罷り出て御相談申し上る所存でございしましたが、夫に對して妾が參つてと受合ました次第で、夫ゆる此儀御承知下しおかれませぬならば、夫の手前屋敷に歸りますること能はず、誓つた言葉も立す、又貴郎が高田の馬場にて、此御恩は生々世々忘却はせぬと仰せられ、只今しがたも仰せられ下し置れました程なれば、是非とも御承諾下されたく」安「ヤ、然やう仰せられましても、御恩の程は忘れぬとは言へ、養子の儀は……」照「御承知がなければ是非に及びませぬ、サア娘、覺悟をしやれ」幸「然やうなら母様御免あそばして」と帶の間から用意の懷劍を取出しキラリと抜て衣類の袖に包んで、母娘が此所に自害をしやうとする、照「妾ども母娘が此所に死にます、貴郎は此を見殺に遊ばしても、御承諾下しおかれませぬか」安兵衛驚いて、此ア大變なところへ挟み込れた、恩義の二字に此ア何うしても承知しなれば成ないやうに趣向をして來たな、此姑は強硬してゐる、マア一時承諾すると言つて、而して

今夜夜逃をしてしまはふ、夫が宜い、斯う腹を据て、安「アイヤ暫らくお控へ下され、不肖の吾儕を斯ばかりに思し召下され有がたき仕合、然らば婿養子となつて忠孝兩道を勵むことにつかまらる」照「早速の御承諾添けなう存じます、娘汝も自害に及びぬ」幸「ハイ有難う存じます」と懷劍を鞘に納めますると、家主は此方の方に聞てゐて世の中は廣いものだ、此泥醉漢に、此様な綺麗なお嬢さんが、何處が宜て死ぬ程惚たんだらう、馬鹿くしい話だと思つてゐる、スルト御新造は懐中から金を取出して、照「お家主」言「ハイ」照「武士たる者が浪人をいたしすると借銭等の出来るもの、萬事何程ござるか」言「へ、何ね、向ふの酒屋に三貫五百、魚屋に一貫二百ばかり借がございます、夫と手前どもの家賃が一年八ヶ月……」安「此りや、家主……餘計なことを申すな」照「然やうならば此所に五十金ございます、是をもつて諸拂ひを濟せ、残は失禮ながら貴君へ進上します」

家主は莞爾くして、言「此は有難うございます、此處は見苦るしう御座いますから手前どもへ一寸お立寄下しおかれませうやうに」と忽ち手の裏を返すやう、安兵衛、現金な奴があればあるものだ、と思つてゐる、照「然やうなら後刻亦伺ひます」と彌兵衛どの、御新造はお嬢さんを連れてお歸りになる、跡に残つた安兵衛武庸が、是は夜逃も出来なくなつた、前に恩を返す

て、今度亦金子を取出して、諸拂ひ萬端いたしてくれと言はれてみれば、夫ほどの事をされても、安兵衛恩を知らず、何れへか逃したりとあつては武士道の恥辱、斯まで思ひくるとあらば是非に及ばぬ、と安兵衛獨り考がへてをりました、ところへ、△御免下さい「安、オ、誰人である」△私は堀部彌兵衛方から参りました、中山安兵衛様のお手道具を受取に罷り出ましてございます」此時に安兵衛が、此は驚いた、此方の浪宅も實見をして立歸りながら、安兵衛殿の手道具をくれなんと言はれては堪るもんぢやアない、何にも有はしない、と致方がないから下阪康繼の鍛えたる、彼十八人の人を斬ました無反血流し付の剛刀此に襦袢袴を一枚添て、安是れをお持下さい」若徒是を受取まして鐵砲洲のお屋敷へ立歸り、主人堀部彌兵衛に是を見せたる時に、彌兵衛感心をした、最前妻が立歸り、斯やうく取計らつて婿養子といふので、元より口約束ではあるし、如何なる品を寄越すかと、無のを承知で人を遣はして見れば、此銘刀に襦袢袴、眞に淡薄なる武士の氣質を其處に現はしてゐる、他人の腰の物の鞘を拂ふといふは甚はだ失禮なんだが思はず鯉口を切て中身を見れば、下阪康繼の傑作であるによつて、只々感心をいたす、乃で神崎與五郎則保、大高源吾忠雄、此兩人を媒約人に頼みましたのは、お武家方だから二人婿約人、鬘斗目麻社社を著用いたして大小を帯してみると立派なものだ、家主夫婦は驚

いた、言何うも安さん、大した服装だね、ナカク安くは出来ない、先様が先様だによつて、惜氣もなく此だけのものを贈りになる、馬子にも衣粧髪貌と言て、男前が上ツたせ安さん」空「巫山戯るな、今までの安兵衛とはチト違ふのだ」言「大きに然うだ、大變違ひます、恐れ入たお屋敷までお送りをしやう」乃で安兵衛武府が駕籠に乗まして、鐵砲洲輕子橋の淺野内匠頭様のお屋敷堀邊彌兵衛金丸の宅へ來りました、此方は彌兵衛どの、今かくとお待受のところへ安兵衛が來た、△先此方へ」と媒約人兩名の案内にて一室へ通して暫時休息をしてゐる、其うちに舅の彌兵衛金丸が初て安兵衛に會て見ると、威あつて猛からぬ大兵肥満にいたして、口辭をしてみると、初對面の口辭が武士道の法に適つて、流石古實家の彌兵衛金丸も舌を巻いて驚いた、ア立派な者だと思つた、此度は不思議なる御縁をもつて、未熟なる娘幸の婿養子の儀御承知下され、彌兵衛身に取て如何ばかりか有がたく、主君にも此段お屈を致さば、無かしお喜び御満足あらせられること必定、我家是をもつて萬代不易と安心いたしたり、不肖なれども以來は何事も御遠慮なく」安「眞に舅御の仰せ有がたく心魂に徹し、不肖安兵衛武府、萬事お引廻し宜しう願はしうござる」夫から御親類方がズツと集りまして、早速爰に三々九度のお杯が相濟ました。

彌内匠頭様へ安兵衛を鑓養子に致した趣きのお屈を致しましたから、内匠頭様は殊の外お喜び遊ばされ、諸家からいたして大祿をもつて抱えられたのを一々拒絶つたから、夫が當家留守居の彌兵衛の娘幸の鑓養子になつて、御自分の御家來になつたのだから、十一月の二十五日に主従三世のお杯を下さるといふ事を、彌兵衛方へ御沙汰になりました、乃で吉田忠左衛門兼亮が附て、安兵衛は鬘斗目麻社杯を着用いたして御殿に罷り出ました表書院にありて、淺野内匠頭様が安兵衛にも目通り仰せ附られる、此時吉田忠左衛門お側に進みまして、恐れながら堀部彌兵衛金丸の娘幸の婿養子と相成ました、中山の姓を改め堀部安兵衛武庸、今日も目通りをつかまつり、主従三世のお杯を賜り、永く御家臣の中へお加へ下し置れるやう此段願ひ上たてまつる「安兵衛其所へ進み出ハツと平身低頭いたしました、内匠頭様熱と御覽じて、内此りや安兵衛、不思議なる縁を持ち予が臣下となりくれて、予は満足に思ふ、今日は主従三世の固めの盃をいたす、萬事届かざる長矩、能う仕へくれよ」といふ言葉、安ハ、一ツ、不肖安兵衛臣下にお加へ下しおかれ、眞にもつて身に取り有がたく存じ奉つる、自分にとりて武門の面目身の冥加、只今の言葉恐れ入奉つる、此の上は犬馬の勞も厭ひなく御奉公つかまつるごさる」乃で三寶の上に載たるお土器、其上土器の眞中に壽の字が書てございます、其お杯

で君公に御禮酒を差上る、是を召上つて直に其お盃を安兵衛に下しおかれる、安兵衛は只今君公の召上つた、濡てをりますところへ口を付まして御酒を頂く、此が主従三世のお固めの盃でございます、夫から奥様方へも目通りをいたしました、奥方からも御懇篤のお言葉を賜り夫よりお席が變りまして君公と奥様とお揃ひになり、多くの家臣ズツと控えてゐる、内安兵衛は大酒と聞及ぶによつて、今日予の家に傳はる組盃、是を與する」と仰せられる、此組盃は、正月が一合で十二月が一升二合入、残らず頂戴するには、七升八合呑まければ成ない、如何に大酒家といへども是は全部頂戴は出来ない、大抵半ぐらゐの飲ものはあるけれども、夫から先は飲ことは出来ないといふ、其組盃といふのを安兵衛の前へ下しおかれる、丁度安兵衛が座つてゐる額の邊迄お盃の数が重つてる、銀の長柄の銚子に程よく爛のついてゐる御酒が出てると、お酌をする者が、△「只今御主君から下し置れました此のお盃、頂戴いたされては如何」安兵衛此を見て莞爾と笑つた、此お盃を見て莞爾と笑つたのは、安兵衛と赤埴源藏の兩人だと申すこととございます、丁度御前に赤埴源藏が控えてをりました（能赤垣といふのが通つてをります、此は赤埴といふのが眞實で、文字の形が似てをりますところから斯く誤まつたものでございませう）源藏腹の中で好い案配で此の組盃を頂戴するのは此方一人と思ひしに、同類が

出来て安心したと、喜んでゐる、安兵衛此から其正月のお杯を押頂き、安「満々お注下され」と波々注でくれたのを、キューと一口、二月に手をかけて、二月も波々と注せてキューツ、三月のお杯を取上げてキューツ、四月も一杯注せてキューツ、宛然鯨が潮を吸に等しく、内匠頭様此を御覽あそばして、内「ウム立派なものぢや」

餘りの事に吉田忠左衛門が、初めてのお目通りに萬一飲潰れるやうな事があつては成んと思ふから安兵衛の袂を引いて、忠「初てのお目通りでござるぞ、程よく納杯て宜しからふ」安「心得ました」内匠頭さま是を御覽あそばして、内「忠左衛門、捨あけ」又五月六月七月八月九月十月を飲だ、餘りであるから忠左衛門又袂を引くと、安「お捨置下さい」と今度は安兵衛が断つた、十一月十二月の大杯を取上げて、満々と受てキューツと、物の美事に飲干したる時は、居流れたる人々只々顔と顔、目と目を見合せて驚いた、内匠頭さまは、内「天晴れ天下の英雄なり」とお喜びの面色にてゐらせられ頼て、内「此りや安兵衛、如何にも美事であるによつて今一献閏月といたせ」安「然らば閏月は十二月にて仕るでござらふ」二月か三月には閏はあるが十二月の閏なんてエのは滅多にありやアしない、人々只呆れてをります中に、又満々と受まして此閏のお杯を物の美事に飲干ました、安「恐れながら一指、未熟なれども舞を御覽に入たつまつる」内「ム

致せく」と仰せられる、安兵衛起上つて、安「是は唐子彼金山の麓、楊子の里に住むカウフウと申す民にて候」と狸々の語を、調子と言ひ、殊に足拍子をトツと打て舞ひ、浪がりのところに來ると、只々人々威心をして此を見てゐる、彌よ狸々の舞を舞納めまして、元のところに着坐をいたし、安「甚だ恐れ入奉つる」内「美事であるぞ」と仰せられましたる時に、「ハツ」と頭を低る、其まゝ何時までも頭を上ない、何うしたのかと吉田忠左衛門が見ると、頭を垂たなりでグウグウツと鼾息をかい寝てしまつた、此時に忠左衛門が驚いて起さふとすると、内匠頭様が、内「待て」とお止めになり、ツカくとお進みあそばして安兵衛の容子を御覽になつて、内「ア「天晴れ英雄である」と仰せられ、召たる黒羽二重のお羽織紐を解てお脱あそばして眠つてゐる安兵衛の背中へフワリとおかけ下され、内「一同續け」と御意あそばして、サツと後正體を失つて、宙のやうな鼾息でグウグウツと寝てゐる其のうちに稍一時も過ぎしたる頃、内匠頭さまが二三名の近習をお連れあそばして、安兵衛の寝てゐる其座敷の襖の外で容子を伺はれると、鼾息の聲は襖の外へ響き洩れます、お刀の鯉口を三寸ばかり寛ろげてパチンとおやりになると、金覆輪の鐙だからピンと鐙鳴が致しました、スルト鼾息の聲がピツタリ止むと、

安兵衛グイと頭を上げ、拳を下において座敷を一巡り見廻して、鑼鳴のいたした襖の方を
 ウンと白眼で身構をしたのは一點の隙もない、襖を越て其間から斜に御覽あそばしたる内匠頭
 さまが、此ぢや、天晴心得のある武士と御感心遊ばされる、此方は安兵衛、氣がついて見ると、
 此は先刻御酒を下されたるお席、初めのお目通りに、御前を憚らす泥酔の餘り睡眠を催せしと
 いふは申し譯がない、と心に恥て立んとすると、サワ／＼と何やら障る、振返ッて見れば丸に
 鷹の羽の御定紋の附たる黒羽二重のお羽織、流石の安兵衛此のお羽織を熨みあげまして御紋所
 を押頂いて、安、ハ、ッ、斯ばかり御仁慈厚き君とは今日まで知ず、倍は此方が臥りし其無禮を
 お怒りお咎めもなく、却てお羽織を下し置れるとは、最早他に望を捨て生涯此君に身命を抛ッ
 て御奉公仕らふ」と涙を流して安兵衛が此お席を退る。

乃で安兵衛は立歸ッて養父に今日の話をする、驚いて彌兵衛金丸御前にお謝辭に出でる時に、
 内「其儀に及ばぬ」と仰せられる、翌二十六日に安兵衛をお役所へお呼出になり、彌「御家老の藤
 井又右衛門より、此度主君よりいたして二百石下し置れる」と申し渡され吃驚いたした、と
 ころが此は、内匠頭さまがお察し、小糠三合持では御養子に行なといふ譬喩がございませう、安
 兵衛ぐらゐの腕前の者でも、三百石の堀部彌兵衛の養子になつてみれば、定めし肩身が狭いで

あらふ、彼今手に仕へて何の功なき者とは言ながら、是ほどの武士、萬一他へ参るやうなこと
 が有てはならぬ、乃で安兵衛を繋ぎ留る思し召が深いによつて二百石を下しおかれる、此二百
 石をもつて養子になつてゐれば養父に對して肩身の狭いことはあるまいといふ、眞に内匠頭さ
 まの御人情の深いところから、安兵衛の意中をお察しあそばして二百石を下しおかれた、夫が
 安兵衛に相分りましたるから、安兵衛が一層有がたく存じ御奉公大切にいたす、其年をもつて
 安兵衛を御供頭に擧げられました、御家騒動の時には片岡源五右衛門が御供頭になつたが、此時
 は安兵衛がお供頭、殿様のお駕籠がお屋敷の御門を出ました以上は、何のやうな間違がありま
 しても、此はお供頭の責任でございませう、だから供頭は、武術心得があつて、學力があつて、
 膽力が宜しうございまして、事に臨んで動じないといふ立派な者でなければ勤まらない、お駕
 籠の右手につくのが御供頭、左りに手に附のが刀番でございませう、夫ゆゑに「エーオー」とお
 行列が繰出しますと、高股立をとつて安兵衛が突袂をして、左右を白眼んで、内匠頭様のお駕
 籠の側を守護してゐる、往來の者が、甲「淺野さまの御通行だせ、大したものだな、見ろつて
 ことよ、彼は安兵衛ぢやアねエか」乙「ヤア安兵衛だ、大層立派になりやアがツたな、アノ野郎
 己を酷い目に遭せやアがツた、金太の野郎と喧嘩をした時、仲裁人をしてくれたのは宜いが、

料理屋へ置去にして己は何のくらの散財したかしらねエ」甲「其様なことをいふない、ヤイ安兵衛立派だぞ、大名は小せエが家來が大きいや何だッて百萬石の加賀様の家來にならねんだ」酒に酔てゐての悪口、當人は小聲で言つもりであるが、酔てゐるから我を忘れて大きな聲で吐鳴たのが、内匠頭さまの耳に入る、御歸邸になりますと大高源吾を召て、内「源吾」源「ハ、ッ」内「今日町人どもが予の行列を見て、大名は小さいが家來が大きいと申して、安兵衛を褒た、安兵衛に五萬三千石遣してしまエ」源「是は恐れ入ます主君は如何あそばします」公「家來どもを引連れて安兵衛方へ食客をする」其様なことは仰しやらないが、何うも安兵衛を大層御褒負御寵愛あそばされる、尤も高には似合せられず良い御家來が澤山ありましたのは淺野内匠頭様御自慢で家來を連れて歩きになる、丁度某る日のこと御本家松平安藝守さまへお客に入らせられる此松平安藝守さまへ此程武藝御指南番として召抱えになつた清水一角といふ先生、丁度内匠頭さまの御本家へお招きを蒙りました時に御末席にあつて御酒下され、尤も淺野様御親類は皆此時御招待がございました、其御親類の御家來の聞えたる者は御廊下へ召れまして、夫々お杯を下しかれます、中に安兵衛武府もとりました、乃で御本家の安藝守さまは、御分家の内匠頭さまに有名なる中山安兵衛が家來になつたのであるから、羨ましく思召てゐらッしやる、

彼アいふ方々になると、珍らしいことを酷く喜びでございますから、是は當家へ召抱えたる清水一角と堀部安兵衛と立合をさせて見たい何方が腕前が優れてゐるであらう」ヒヨいと斯う御酒のお加減でも胸の中にお浮みあそばした。

斯やうな事を御本家安藝守様がお考へあそばしましたのは、安兵衛は成ほど高田の馬場においで替討をいたして立派な腕前に相違ない、夫が分家淺野内匠頭の家來の堀部彌兵衛金丸の娘の御養子となつて、今日中山の姓を堀部と改めた、眞とに彌兵衛は先年悴の彌一兵衛を失つて以來、親族より姪にあたる幸を貰ひ受け、夫に安兵衛を娶合せることに相成つた、併し眞にしては天晴優れた武士だ、仕合せものであると、御本家の殿様が、何うして斯ういふことを御存知か、前申した通りの事をお考へ遊ばしたところが、淺野家の堀部彌兵衛の血統は宇多天皇の後胤、近江源氏の統領佐々木から出てゐる堀部でございます、乃で略歴を申し上げる、委しいことは堀部家についてお尋ねになれば相分りますから、爰に堀部の系圖の大略をお話しいたします

倍讀者諸君、眞に未熟なる貞水の義士傳を御愛讀下さる段は眞に有がたい、乃で今日は甚だ恐れ入たが一寸申し上げたく、殘らず御覽にならざる中に、今まで御投評下されたのは、千萬

忝けない、中山安左衛門の家は、新發田にある頃ほひは沼垂の附近であつた、夫から貞水は

新潟通ひと讀ました、然るに新發田の城下の某料理店の娘に中山安太郎が通つたといふ御注
告を下すつたが、夫も眞に有がたいから尙取調べて演しませう
夫から水戸様の家來に和田平助といふ家來はあるけれども、田宮勘八郎といふ者はないとの
御注告であつた、是は田宮勘八郎といふ者が主君の内命によつて、周防の岩國の國次宗左衛
門大先生の許に參つて、總身相當入身の小太刀といふ極意を得てから、和田の家名を相續を
して和田平助と後年に名乗る、夫だから年代は古いし、確に然うであるといふことは貞水は
確言はいたしかねるが、貞水の調べたところでは然うなんだ、で、是が田宮勘八郎の講談で
ございましてなれば和田平助になつた事のお話もするんだが結局居合を扱たといふ引事
すから、言葉を省きましたんで、マ斯やうなわけに故に今回も國民新聞の編輯長山川先生が
ら左の御書面を頂戴しました、

無事御歸京の由大慶に奉存候、却説堀部直臣氏本日本來社、一日貴下に面會、堀部安兵衛の
事に關し、充分貴下の話も聞き、自分よりも話した事あり、紹介し呉よとの事に有之候、
堀部家の後が熊本に残りをる事は貴下も御承知あるべく同地には堀部安兵衛に關係ある者四
家あり、堀部直臣氏は即ち其一にして家系よりすれば、安兵衛の後を其儘維持しをる者は他

家なるも、血系よりすれば、直臣氏は安兵衛に最も近き者に有之候、就ては同氏に御面會有
之候は、種々の材料も可有之、遺物等も二三残りければ、お目に掛るとの事に有之候、又
堀部直臣氏は、右の如く血統上安兵衛氏に縁故深きと共に、熊本に於ては頗る有力家にして
目下芝高輪南町三十番地に老を養ひつゝあり、徳富社長とは固より阿部氏及び小生等とも大
懸念の間柄に有之候、若一日お繰合御訪問被下候半ば、同氏も大に喜び可申と存候、實は此
方より訪問すべくとの儀に有之候も、遺物等拜見の都合もあり、乍失敬貴下より訪問する事
に致さんと話置申候、就ては一日是非御繰合御訪問相願度、若御訪問下さるべく候半ば、
其日取小生迄御一報被下度小生より先方へ通知可仕候、歸京早々御多忙の所へ御無理を願上
候拜具

六月十六日

山川 瑞 三

眞龍齋貞水様

貞水も去十六日(六月)に韓國より歸朝いたしましたして、直越後の新潟へ出張いたしました、稍
四十日程韓國に參り家を明置ましたから、關係のごさいます新聞、又博文館の雜誌、其他
に種々用も重なつてをりました、ところが國民社の山川先生は斯ばかりに愛讀者諸君に對し

て心を盡してお在であるによつて、貞水の方も亦影をもつて、正しき堀部の家系を材料に頂けるのだから、夫ゆゑ去(六月)二十四日午後一時に堀部直臣君のお宅に出ました、スルト御主人は早速御面會下されました、夫から系圖を出して段々と貞水にお話を下しおかれましてたによつて、爰に其御愛讀者諸君、又我業體、其他義士に關係の深き御方々も、堀部家の事について、何ういふ家系があるといふことは、恐らく委しくは御承知なからふかと存じます、併し御存知の方であつたならば、成ほど能調たと考へあるに違ひない、乃で大言のやうだが、文明の講談士の貞水でございませうから、山川先生から御書面を頂いて、堀部直臣君の御直話を拜聴して、濟アしこんで、自分一人が是だけの物を調べてゐるといふゑらからふ面は致しませぬ、斯る得がたき材料を得まして、御愛讀者諸君に、未熟ながら斯ういふ折柄でございませうから、堀部家の系圖と申し、安兵衛を養子にされた、彌兵衛金丸の深き所存のあつた點をお話しいたします、で、今まで口演しましたところは、是まで我業體の者も話し、尙貞水も注意に注意を加へて講演をいたしてをりました、是から先は、随分面白いところもあり、又面白くないところも有ますかも知ませんが、暫らくは貴重なる日月御兩眼を御拜借をいたします。

ところが此は委しく系圖のお話を先祖から引て参りますと、餘ほど面倒になりませうから略しまして、先づ佐々木太郎定綱、此方の方の五男が佐々木五郎左衛門廣定、其人の子の佐々木三郎左衛門成綱、此が近江國北方淺井郡堀部の庄といふのを初めて領地にしたんだ、で此堀部の庄を領地にしたによつて、姓を改めて堀部三郎左衛門成綱と言つた夫ゆゑに堀部家は皆四つ目を定紋にする、其成綱といふ人に子供が八人あつた、總領を堀部次郎左衛門成勝と言ひ、末を堀部彌兵衛金丸と云た、ところが成勝の代に片桐家に抱えられて二百石頂戴をした、で此成勝は文武兩道に優れてゐるをもつて、遂に家老職になりました、尤も此時片桐家は一萬石であつて、家老順席になつてをツた、ところが何うも新參ではあるし、何となく先聲と意見の合んところから、寛永の十二年に浪人をした、スルト今度は細川家からお抱え、此細川家へお抱えになります時に、八人兄弟のうち男子が五人ある、總領が成勝で、四郎、與左衛門、勘三郎、彌兵衛、乃で女の方は兎に角、男は皆細川家に参るかといふ、其際他の者は兄と同道して細川家に参ると言たが、一人彌兵衛金丸は、私だけは聊か淺野家に知る人があるによつて、此淺野家に参りたい、成、夫では爾は淺野家へ参るのは宜が、併し大淺野家であるか御分家であるか、御分家の方へ参りたい、大淺野の方は大藩にして、殊にお家柄でもあるし、皆古參の人で然るべき

者がございませう、夫ゆる采女正さまの方へ参りたいんで申すは、當時柳の間の大名で、淺野采女正、岡部美濃守、加藤遠江守、龜井能登守、此四家の評判は日本國中に響き渡つてゐる、文武兩道を磨かれる家柄である、容子を伺ふところ、上は御質素にして、家中は君臣の道を能心得、學問を修業して武術を勵み、聊かも奢侈に流れるといふ事のないのは實は此四家である、其うち吾儕の望むは淺野采女正さまである、兄上方は細川家にお往であつて、何せう三齋公は彼の如き御氣性の方で、武士をお抱えある時に、關の兼元兼定の刀を帶たるものは、全く武士の心得ある者なり、と言つて高祿をもつてお抱えあらせらるゝくらゐの御方様なれば、兄上の細川家を望まるとこと大慶至極に存じまする」

乃で未だ年若き彌兵衛金丸、兄弟七人に別れを告て、是から江戸表をさして来る、爰に江戸の木挽町一丁目に常陸屋六助といふ淺野采女正様への人入業がある、其所へ彌兵衛來て、彌免せし「へエ、入ッしやいまし」彌當家の主人六助はをるか「へエ誰人様で」彌「ヤ、此方は堀部彌兵衛といふ者だ、六助がをるなら少々會ひたい」彌然やうなら暫らくお控を願ひます」丁度六助が奥で帳面を記てをりました、ところへ、彌「親分、申し上ます」彌「何だい」彌「只今堀部彌兵衛といふ二三四のお武士がふ入來になりました、何だか知ねエが六助六助と、親分の

ことを呼捨にして、會て話しをしてと仰しやるんで」彌然うか、一度でもふ入來なすつた事はねエ方か「へエ」然うでございませう、六助と頻りに言てお在なさる、だから私が六助に然ういふ、續けて六助「〜といふんですから三六八助」彌「何をいふんだ、お上申してあげ」彌宜しうございませうか「六」宜いとも、常陸屋六助を知てゐらしたんだ、夫だからお目にかゝらなけりやア宜ない、應忽があつちやア成ねエによつて、能可嚀にお通し申せ「へエ」入口のところへ出て來て、彌「此ア何うも旦那、お待遠でございませう、何卒此方へお通り下さいまし、親分がお目にかゝります」彌然やうか、然らば免せ、案内に従がつて一室へお通りになる、流石はお武家様を始終お扱ひをしてゐるから、失禮のないやうに坐布団、お煙草盆、其うちにお茶を持て來る、お茶を召上つてゐらッしやるどころへ、年ばい四十一二、小肥滿に肥滿てゐる、鼻の高い、兩眼パツチリしてゐる美い男だ、夫へ出て、彌「お入來なさいまし、私が當家の主人常陸屋六助でございませう」彌「ア」然やうか、拙者は堀部彌兵衛といふ、以來は見知りあいてくれ「六」へエ、恐れ入りました……エ」何ういふ御用向で入せられました」彌「ヤ、他のこととで參つたのではないが、實は此方淺野家へ御奉公をいたしたいと思ふ」彌「六」ア、然やうでございませうか「彌」ところが拙者は、本來なら肥後國飽田郡熊本の御城主、細川家に參つて御奉公を

致すべきなれど、チト考へあつて、と申すは當時武張の四天王と稱される、淺野家にお召抱えて願つて忠勤を勵みたいと存ずる、夫ゆゑ其方へ頼みに罷り越たのである、ところで此方、餘の事は一通りであるが、優れて出来るといふは手跡だ「無」へエ「無」だによつて、マア成べくは祐筆にお召抱えを願ひたいと存ずる「六」然やうでございますか、ヤ、宜しうございます、丁度私が今日は鐵砲洲のお屋敷へ出ますから、伺つて御返答をいたします「無」然やうなら六助其方かたに厄介になつてをる、決して迷惑はかけん、何かにつけて當家にをる方か都合が宜と存ずる「六」御尤もでございます、併し見苦しうございました御歴貴様「無」様が……「無」イヤ、必ずず心配に及ばん、此は甚だ些少であるが、其方妻に土産として何を與てくれ「六」此では恐れ入ります「無」イヤホンの参りし印だ「乃」で、六助の女房のお吉といふのが夫へ出まして御口辭をしてお謝を申す、で堀部様へと申して自宅にお置き申して夫から六助、鐵砲洲の淺野家のお屋敷に罷り出ました。

乃で常陸屋六助は、誰人について、お周旋をしたいと、思ふ機会に、お國の常陸の笠間から城代家老の大石頼母さまが御出府になつた、此頼母さまは六助を大の御最負で丁度宜いから、他の方に申し上るより此お方に申し上りたいと、思ふから、六御祐筆に住込たいといふ、堀部彌兵衛

衛といふ方がござりますが、如何でございます「其時に頼母、大丁度好い折柄である、今度お國替を仰せ付けられるについて、御家中に手跡の確な者を現時選む最中、其りや主君へ申し上て何とか取計つて遣はさふ」六「然やうなら宜しくお合を願ひたうござります」其日は二三も屋敷の御用を聞いて、常陸屋六助は木挽町の自分の宅へ戻つて来る、彌兵衛は「大」大に六助御苦勞であつた、何うだ宜い工合になりさうか「六」然やうでございます、マア如何にか斯うにか宜からうと存じてをります「無」然うか「六」御沙汰のござりまする迄はお待受を願ひたうござります「無」ア、夫は宜いとも、何日までも待て遣はす「ヌ」ト三日目に、六助同道にて主取仕官の望みある者を運參れとの御沙汰此御沙汰があつたから六助は、六「エ」堀部の旦那「無」何うした「六」今日お屋敷から御沙汰がござりましたから、貴方をお連申して参るのでござります「無」ア、然うか、夫は千萬忝けない、なやア參らふ「此からお支度をなさつて鐵砲洲のお屋敷に出ました時に、大石頼母様がお掛りで彌兵衛を一通りお尋があつた、近江源氏の佐々木の末流江州の堀部の庄を領地に賜つたので、夫より堀部を名乗つて堀部彌兵衛と申し立て、御祐筆といふ名義でも抱になつたんだ、夫から先づ百石下しおかれる事になりました、乃でお書物の六かしいものが澤山出た時に、御奉公をして儘に十日ほど経てだ、ヌルト彌兵衛が、無甚だ恐

れ入た次第、祐筆とは申し上げたが、此書類を手前が認めて大公儀へ差出すといふ力はございません、斯う言ので御重役が、重御祐筆に抱えてくれと言た者が、筆を執て御奉公が出来ないといふは、甚だ不都合だ、何ういふわけで然やうな事を言れるか、鬨兵に恐れ入たが、御祐筆ぐらゐのところへ云て出なければお抱えは無らうと、實は右やう申し出た次第にて、夫と申すも大分御祐筆のお入用なる噂を、二三耳に致しました、夫ゆゑお抱えになつてから斯様な事を申しは恐れ入が實は祐筆を勤める力はない、大藩の細川家へ兄弟がお抱えになり自分も共に参るべきところを、當時柳の間詰の諸侯の内にて、淺野家とあらば、世間へ文武とも響き渡つてゐるをもつて、同じ御奉公をいたすならば、御當家様のごとき武備嚴重なるお屋敷に御奉公をしたいと右やう申し出た次第、と斯う申し上げた、何うも偽つて御當家へお抱え願ふとは怪しからん人物だ、と大分殿しい事を申した者もあつたが、頼母どのから主君へ此を申上げた、スルト采女正さまが、其方の見たところでは、堀部彌兵衛は何ういふ人物か「大何うも私は一廉役に立べき者のやうに存じてをります」然うであらふ、予も然やう心得てをる、當家において文武を勤むといふ事を聞及んで當家へ参りしとあらば、決して惜いとも思はん、何か是は一廉役に立べき者は相違ない、其ま、抱え置け」と仰せられ夫なりお抱置になりました。

堀部彌兵衛が淺野家に仕へてより丁度一ヶ年を経ました、が未何の御奉公振も見せない、然るに御主君采女正様が、赤坂見附の方角火消お警備を仰せ付けられました、此は皆様方も御承知でございませうが、江戸は火事が多いところでもございまして、夫ゆゑお大名は三十六見附を残りお警備をした、三十六見附といふは、淺草御門、筋違御門、昌平橋、水道橋、小石川御門、牛込御門、市ヶ谷御門、四ッ谷御門、赤坂御門、喰違御門、虎の御門、新し橋、幸橋、山下御門、數寄屋橋御門、鍛冶橋御門、吳服橋御門、常盤橋御門、神田橋御門、雉子橋御門、一ッ橋御門、清水御門、田安御門、半藏御門、外櫻田御門、日比谷御門、馬場先御門、和田倉御門、大手御門、平河御門、竹橋御門、内櫻田御門（是は常今は桔梗門となりました）坂下御門、西丸大手、お濱大手、蓮池御門、等でございませう、乃で相撲は天下の力士、スワ戰場といふ時には、お馬印、旗、楯の板、其他御軍用を足すをもつて力士といふ、此三十六見附の彌よ非常の時に駆付まして、多くの相撲を分配をして、重いお見附の御門の扉を開たり開たりするのが力士の役で、夫ゆゑ三十六名の年寄といふ者を爰に現はしたのでございませう、然るに嘉永年間の雷、權太夫が、追々相撲の年寄が殖るからでんで、見習の三十六人を殖したから、當今では相撲が年を老て親方株を引受ると言たやうなことで三十六人が七十有餘人となりました、相

撰も徳川時分には、寺社奉行支配の下にございまして、スワといふ時には此だけの役を勤めるのが、相撲の役目でございます、其様なやうなわけでございますにございまして、大名のお警備なんといふものは六かしいことで、淺野采女正様の赤坂御門お警備の時、頃は萬治二年の十一月の下旬、茲に初代の不破數右衛門正實、是れが淺野家のお馬廻役兼奥御祐筆、文武兩道に秀でたる者でございまして、私用あつて八丁堀まで供の丈助を連れて参りました。西風がビュウービュウと強く吹く、用事を済して歸り道になりますと、チャン／＼、チャン／＼、丈旦那さまへ「不」何だ「丈」何うも半鐘を打付るやうでございまして「不」半鐘を打てをるか……オ、成ほど、斯やうな大風であつてみると大火にならふ、方角は何の邊であるか、聞けツ……彼通り家根に人が上つてをるから尋ねて見い」家根へ人が上りまして火の見から見てゐる、丈助が、丈「モン／＼、火事の方角は何の邊でございまして」丈「丁度赤坂青山見當でございまして」丈「ヤ、夫は大變旦那さま」不「何だ」丈「赤坂から青山の見當だと申します」不「然うか……コン／＼、火事は大きいか」丈「然やうでございまして、御武家さま、風が強うございましてから火は下を這てをりますが、煙は餘ほど廣がツてをります」不「然やうか……ソレ丈助急げツ」と宙を飛がごとくお屋敷へ引返して参りました、スルト既に主君は御出馬に相成り皆御供をいたした後でございまして、夫ゆゑ數

右衛門は、心も心ならずも厩へ飛で参り、不「コン／＼」△「是は不破の旦那さま」不「お馬を出せ」△「モウお馬は残らず出さりました、主君の御出馬で、火事が赤坂の新町だてエんで、夫ゆる赤坂御門のお警備のために御出張になりましたから、モウ馬は一頭もございませぬ」不「然う言んで馬を出せ」△「御無理なことを仰しやツて、馬はないのでございまして」不「然うか、馬がなければ詮方がない……ア、其所に繫いでゐるのは何だ」△「此ア未だ仕付ない方で、目下仕込中の馬で、迎も駄目でございまして」不「ヤ、夫で構はない、夫を出せ」△「迎も駄目……不」イヤ、準備をしろ、己が乗んだ」△「夫ア貴君の事ですから宜しうございませうが、萬一間違ひでもございまして、私どもの落度になります」不「決して差間違はないから其準備をしろ」火事装束を着て不破數右衛門が控えてをります、△「夫では」といふんで、未だ野から出たての馬でございまして、夫に轡を啣して、鞍、笠、充分支度をいたしました、不「ヨシ／＼此で宜い」とヒラリと跨がりましたのは、馬術心得の不破數右衛門。

鞍は船、櫓櫓に、帆は手綱

乗れば海路を走る一鞭

ト大坪道禪の詠れましたるところの極意は即ち此なり、鞍上に入なく鞍下に馬なき有さまなり

夫ほどの荒馬を、不「ハイヨウーハイヨウー」バツバツと馬聲をかけて乗り出した、往來の者は立留つて、此數右衛門の乗ざまを見て感心をした、不「ホウラ、カラ〜、ウワァー」と群衆の中を馬聲をかけて乗切る有様、其うちに、不「ハイヨウー、ハイヨウー」聲をかきまするが、馬乗といふものは勿々六かしいもので、人を踏まするやうなこつては可ない馬乗の法を失なつて終ふ、頻りに乗切て参ります、スルト其時分の火事だから、チャン〜、チャン〜、ドワン〜、太鼓の音が聞える、ポウ〜、板木の音も聞える、何しあふ江戸が其頃ほひに、明暦の三年の大火の後でございますから、火事といふと人が震えてゐるくらいで、用心に用心を致しまするから勿々の騒ぎ、ところが此火事場の騒ぎに物馴ない馬だから乗人は上手いが馬の氣が狂つて、丁度溜池から赤坂の田町へかゝると、俄にバァ〜と左へ翹られた。乃で數右衛門は大音を揚て、其混雑の大勢に負傷をさせじと、不「ヤア此方は不調法ものだ、馬が狂つたによつて、其方どもに負傷があつてはならんから道を避てくれ、避ろ〜」と口續に大聲を發しながら、頻りに乗鎮めやうといたしますが、ナカ〜鎮まらない、馬はいよ〜狂つて駈る、既に紀州侯の御門前へ近づくと、其御門前には、紀州侯の物頭大塚半右衛門、同心を二十人ばかり従へて其ところに出張てゐて、御同家へも見舞に來る人々の手札を貰

は、一々謝辭をしてゐるところへ、數右衛門の馬が荒に荒て參るのを認めましたから、忽ち御三家の威風を示して彼者を驚かしくれんと、部下の同心に、大「コレ、早く彼の狼藉者を取押へろ」と命じました、乃で大勢同心が手に〜六尺棒を携へバラ〜と駈寄る、此時數右衛門は馬を乗廻しながら、不「アイヤ暫く、如何にも不調法ではござるが、此馬が翹ましたる儀でござる、お騒下さると尙更馬が狂まする、武士の情をもつて、其ところを開いてお通し下され〜」と兩三度高らかに聲をかけるといへど一向な諾す、甲「御當家を何と心得てをる、紀州家にあるぞ、三家の家來は陪臣にして陪臣にあらず、爾等ごとき小身者の家來として、其馬術の現狀は見苦しきことである、白痴め、武士の情であるから取押へて遣す」と既に押へんとする、馬は荒て〜荒廻り、忽ちの間だに同心一人馬のために蹴倒される、不「這は危ない、お退下され〜」といふのを諾すに何れも六尺棒を振上げ打込で來る。乃で數右衛門が、不「餘りといへば御無法千萬なり、お聞き召れんとならば是非に及ばん」と乃で一刀を抜く、尤も切ふといふ了簡はない、威赫すため密打をくらはせやうとすると、小手が狂つてスバツと同心一人を切倒した、血煙りたつて打倒れる、又一人蒐る奴を横に拂ふ、是が切倒される、斯と見て物頭大塚半右衛門、去「己れ不屈き千萬、此方の同心二名を切倒されては

最早捨ちけん」と鎧を取寄た、馬乗を防ぐは鎧に限るものでございませうから、大「無禮者ッ」と鎧を扱いて突かける、不破數右衛門體を轉して、ブツリ鎧の柄を半から切折る、半右衛門は透さず、手に残った鎧を投つける、夫を突然に横に拂つたから、半右衛門が夫へ切倒される、斯三名の者を切倒して數右衛門、大勢追て來る中を漸うの事で、ブツと逃げましたが、馬が尙留らずして、是より四ツ谷見附、市ヶ谷御門、牛込御門小石川御門、聖堂前を過て神田の薬店、筋違見附外、佐久間町の河岸から七曲り、淺草へ出て、雷門に行留り、右に曲つて吾妻橋を渡り、本所竹藏前、彼所を越ぐらに永代橋まで近づき、漸々馬が疲れて、乗人も大いに疲れたが、強氣の數右衛門、殊に馬も餘ほど強かつたが漸う留りました、乃で馬から降て口を取り、馬の口を洗つてやりました、で數右衛門が、モウ此ア致方がない、切腹だと、覺悟をして鐵砲洲のち屋敷へ歸る、でも底へ來る、不「コレ、馬を返す」此ア不破さま、如何でございませした乗になりましたか「不「乗たから歸つて來た」斯う言てお底へ馬を入れましたが、モウ此は存命ではゐられない、併し逆も死ぬなら立派に死なふ、と覺悟はしたもの、倍何うも残念至極、何しろ誰かに此事を申して最期を遂やう、といふので、間瀬久太夫の許へ参りました、此人は未若かつたが此時大目附を勤めてをったから、是へ其の、不「倍間瀬氏、拙者は飛たこと

を致しました實は今日、紀州侯の御門前で斯々の過失をした、是れから私は切腹いたすから、萬一紀州侯より御當家へお談判があつたら、過失の趣きを御辯解下さい」圓マ、何しろ切腹は暫らく止まらつしやい」乃で數右衛門の死を止めておく、其うち主君が引揚になる、ところが紀州家においては、物頭大塚半右衛門、同心兩名、此が即死を遂てゐるから、早速御老中へお届をする、此時御老中の月番は秋元但馬守様であるから、此但馬守様より淺野家へ御沙汰になつた、乃で淺野家にては御重役方が御相談になり當家の家來と相分つたによつて、此ごとく紀州家からお届になつたのだ、是は何とか始末をしなければならぬ、と早速江戸家老御重役が采女正様の御前に集まつて、御一同の方々より右の次第を言上し、不「主君の思し召は如何あらせられませうか、此上は是非に及びません、相手が紀州家でございませうから、數右衛門に切腹を申し付、其首を打て紀州家にお謝をするより致し方がござるまいと存じます」斯う申し上ると、公其首を打つは余が自身に手にかけて遣はすと「仰せられましたるから、御家臣一同眞とに主君の思し召、有がたいことと申し上げ、乃で彌よ數右衛門に對して切腹仰せ付られ、主君が首は討下さるといふ事になつた。

乃で數右衛門は間瀬久太夫に對つて、不「倍間瀬氏、國表には妻八重、忤彦三郎、殘し置ました

れば、何卒宜しく御取計ひを願ひたい」四、其儀は必らず主君にお執成をして、其許か最期を遂たる後は、御子息彦三郎をもつて、不破の家相續の儀を取計ふにより、後のことは御心配なく、眞にお氣の毒のことをごさるが、此も致し方ござらんから美事御最期をお遂なされい」

不「夫は無論のことをごさる」と爰で數右衛門が最期の支度をして、御殿のお椽の先に平伏をした、時に君公采女正様初めとして重なる御家臣其ところに控えをツたり、御一同の方々數右衛門の事を他人ごとくは思はん、只惘然千萬なこと存じてる、此時采女正さま、公「此りや數右衛門正賢」不「ハ、ッ」公「其方は今日の出火につき、紀伊家の御同勢に理不盡なるところの無禮をいたせしは不法千萬ならずや何故其方は馬乗の心得をもつて致さん」不「恐れながら今日、八丁堀に用事此ある爲に罷り越たるところ、此風の烈しきに出火でございまして、主君は既に赤阪御門のお警備、此ア後れてはならぬと存じましたるから、急ぎお小屋に立戻り、火事装束に身を固めお腕に参りまして馬を出せと申した時、残らず出拂ひ馬は此なく、尤も一頭此あるは野より出たてゝあつて、未だ名前も付んから可ん、と申したのを、开は構はん、斯る非常の折柄である、乗人は數右衛門であると大言を吐き、右に打跨つて乗出しました、然かるところ赤阪田町にかゝりし時、馬が何に驚いたるか剪ましてござる、留やうと致しましたが痾強の逸物

夫がために最早此上からは是非に及ばん、往來の者は負傷なきやう、馬が剪たり不調法ものである、負傷あつてはならん、避よく、一心に人を踏ざるやう心を用ひ、紀伊國阪に差かゝり混雜の中を馬を乗扱ました時に、紀州侯の御門前にをツたる同心ども無禮におよび武士の情なり通し下され、と幾重にも馬上から聲をかけるといへど、御當家を何と心得てをる、と馬の剪たるは問はず此方の不調法を怒り、夫より次第く打てかゝり尙是がために馬も荒立つに如何んとも詮術なく、乃で速やかに乗扱やうと心得るうち一人の同心拙者を六尺棒にて打ましてござる、餘り御三家とは申しながら御無法なる有様であるによつて、密打をかけやうと致したるのが、過まつて手先狂つて、同心兩名、大塚半右衛門を夫れへ切殺しましてござる、此も是非に及ばざる次第仍で、只今お届をいたしましたるところ、切腹の御沙汰眞に不肖數右衛門に切腹の御沙汰下しおかれるとは、武門の面目に御座候らう何のお役も勸すいたして、御奉公半途にして御高恩も報ひ奉つらず、此數右衛門の不忠の段平に御有免下し置れたく」公「數右」不「ハ、」公「其方が妻子のことは案するな」不「恐れ入たてまつる」公「余は今爾の介錯をしてとらせる」不「甚だ恐れ入り奉つる」公「其方の悴彦三郎に數右衛門の名義を相續致させ、其方の家の無事は余が心得をる恐悟いたせ」不「ハ、有がたき仰せ、恐れ入奉つる、爰で數右衛門、既

に腹切んとする折から、彌「ア、イヤ暫く、其切腹止り候らへ」一同何奴なればこそ數右衛門の切腹を止めるやと見ると、堀部彌兵衛が夫へ出て來た。

彌「暫らくも控え下され、數右衛門、暫く待ッしやい、死は一旦にして易し、生は萬代に得がたきものでござる、死するは何時でも死せる、併し貴殿は淺野の家來不破數右衛門と名乗しツたか」不「イヤ、然やうな事はない、不調法者でござるとは申した」彌「然やうなら死するには及ばん……恐れながら秋元閣老よりの御沙汰は、如何なる次第にござりませうや」不「夫は采女家來に相違ないのと御沙汰、明日は秋元の役屋敷に出て申し開きを致すのである」彌「然やうでございまするか、然らば其申し開きの儀は吾儕に仰せ付られたく」不「何と申す」彌「私が閣老邸に罷り出で、御當家の御耻辱にならぬやう、又數右衛門の生命も捨ざるやう、萬事不肖彌兵衛金丸の方寸のうちであれば、何卒御任せ下しおかれたく」乃で彌兵衛が御留守居見習といふ格で參ることになりました、然れども此に差添といふ者がなければ成んから、間喜兵衛光延、是を差添として彌兵衛金丸、秋元家のお役屋敷に罷り出るとになりました、ところが他の人々は、彌兵衛が參つて、何うか首尾克行だらふか、間違へば五萬三千石に協の付く次第である、と心配する、主君も、御承知は遊したが、併し首尾克參れば宜しいが、と頻りに御心中では御心配を

そばされてをる、是から間を運で彌兵衛が秋元家へ罷り出で、彌「淺野采女正家來堀部彌兵衛金丸、差添間喜兵衛光延、罷り出ましてござる」で、秋元但馬守さま、早速お會下さるとも目通りへ罷り出ましたる時に、但馬守さまは威儀を正してお控えになる、御前遙かに罷り出ましたる彌兵衛金丸、差添間喜兵衛禮を正して「彌「恐れながら何か御尋ねの廉此あり、淺野采女正留守の者に罷り出よとの御沙汰、折節留守居なる者病氣につき見習堀部彌兵衛罷り出まして、差添として間喜兵衛光延控えをります」秋「然やうなるか、早速罷り出たる段満足に存する」

秋「恐れ入奉つります」秋「今日其方どもを呼出せしは、赤阪新町出火の節、其方ども主人采女正、赤阪お見附お警備役仰せ付られたり其節采女正家來某なる者、馬上にて紀州御家來の内に乗入、亂暴狼藉を働らいて、同心兩名および大塚半右衛門と言ふ物頭を切捨乗振たるよし、紀州家より月番の此方へ達したり、依て其不法なることを相糺すため、留守居の者を當役宅に呼出せしなり、サ其者を速かに紀州家に相渡しまするやう」彌「仰せながら伺ひ奉つる、采女正家來は江戸詰五百人も此あり、何者でござるか御承知ござりませうか」秋「夫は何某と申しての届なり」彌「ハ、這は又奇なる御尋を蒙るものかな、斯やう申し上るは、甚だ恐れ入たる儀にはござりますれど、主人采女正は既に播州赤穂へ新城を築き、五萬三千石を賜り、殊に弓

板倉、鎗淺野と申すくらゐの噂を受し家、板倉に弓の噂をいたするな、淺野采女正に鎗の話は無用といふほど、世上に沙汰いたされまするくらゐ、失禮ながら我主人に仕へる武士は、何れも弓馬體槍劍を實地修業をいたした者なれば馬に乗つて出まする者は、必ず乗損するやうな事は是なく、又馬に乗まする者が、馬を御すことが能はんとあれば、夫りや馬乘にあらず、采女正家來は、大言のやうには候へども、馬に乗て出る時は、鞍上に人なく、鞍下に馬なき有様でござる、然れば右様なる御無禮あるわけも是なく、殊に紀州家の御届は姓名も是なく、何をもつて采女正家來と仰せられるや、恐れながら確と采女正家來といふ御調も此なく、御沙汰有之候ふは實もつて主人の迷惑、殊に主人の恥辱でござる、主恥しめらるゝ時は臣死すの習ひ、斯る仰せを蒙りまして、此彌兵衛何阿容く〜と主人屋敷へ歸られませうや甚はだ恐れ入たる儀に候らへども、御當家様を御拜借して切腹つかまつる、アイヤ間氏、自分は御主人の恥辱を雪がねばならんによつて、我切腹の現狀を能見届られよ」と既に腹切んの有様。

此時秋元但馬守様驚かせたまひ、秋「アイヤ暫らく待て、此は内調のことであるぞ、其方切腹いたすまでには及ぶまい」彌「ハ、ア然らば御内調にござりまするか、然らば是非に及ばん、以來は斯やうな御内調のないやう御免を蒙りたく存じまする」秋「此りや彌兵衛」彌「ハ、秋「然らば

其方紀州家に罷り出て、其方主人の家來でない越き申し開きをいたせよ」彌「委細承知つかまつりましてござる、紀州家に罷り出て談判を申し必ずとも謝罪證文の一通を取て恥辱を雪ぎ立歸るの心得でござる、其にもつて御内調の御念のこと有がたく、随分御機嫌御宜しう、泰然自若として秋元家を退ります、此から御門の外へ出る、間喜兵衛は、堀部氏」彌「何でござる」彌「何うも御老中秋元但馬守様の御前で、能彼様なこと申された」彌「ア、申し上なければお分りはない」彌「是から貴殿は紀州家へ」彌「ア、罷り出る」後で秋元但馬守さまは御家來にお對ひ遊ばして、秋「此りや、淺野采女正かたには勿々優れた家來があるものぢや、彼の容子にては紀州家より謝罪證文も取兼るツニ」家「御意にございまして、ナカ〜以て辯舌爽かな人物にございます」乃で此方は紀州様へ罷り出ました、彌「淺野采女正家來堀部彌兵衛金丸、間喜兵衛光延、御重役にも目通りをいたしたい」と申し入る、早速是を執次ましたから、頓て兩名を案内される、紀伊家御重役は、安藤飛騨守、水野土佐守御月番、夫ゆるお月番上席三浦長門守どのへ是を申し上る、此ち方は一萬五千石の大身、三「ナニ、淺野采女正家來堀部彌兵衛罷り出たるか、三「如何なる次第なるか、此方よりは秋元閣老へ届け置たるに、直接に當家へ参るとは……併し此は何か仔細あつての事ならん、是へ通せ」乃で紀州家の御威光を見せてやらふと、何れも重

役大勢威儀を正してズウツとキラ星のごとく揃ひあそばした、堀部彌兵衛御案内に連ま
 て其お席に通る、着座いたして兩手をつかへて「御へエー」此と云ふ三浦長門守は、「三」ア此りや、
 淺野采女正家來堀部彌兵衛、今日重役に目通りいたしたいとは何事ぢや」「彌」恐れながら吾儕は
 留守居見習、然れども留守居役の者病氣につき、吾儕をもつて留守居役とお見なし下しおかれ
 なく」「彌」吾儕は差添間喜兵衛光延と申する者」「三」シテ其方が罷り出たるは何ぢや、苦しうない
 最少と近う出い」「彌」御免下さい」と長門守の膝元近く進みました」「彌」其方が御當家へ罷り出た
 るは赤坂新町出火についての儀なるか」「彌」御意にございまして」「三」其儀は兼て秋元閣老に届
 いた筈ぢや」「彌」其秋元様には御届をいたし、御當家も届の次第を直々御返答申し上る心得に
 て罷り出ましてござる」「三」然らば相尋ねるが、其新町の火事場近くの混雑の中に、其方主人の
 家來一名、馬上にて狼籍におよび、人馬人足多くの者を惱まし、其上當家の同心兩名、殊に大
 塚半右衛門と申す物頭を切殺し、其ま乗扱しは如何に扱ふにや、サ、其返答速かにいたせ」
 「彌」ハ、其儀について伺ひたきは、采女正家來にて右人殺をしたと仰せあるは、何者でござるか
 姓名を伺ひたい、主人は小身五萬三千石なれど、弓馬の道は家來共に勵ませをれば、然やうな
 未熟な者はござらん筈、多分人違ひでござらふと存する、併し采女家來に相違ないとあらば、

名前は何と申す者にや伺ひたうござる」「三」ヤ夫は火事場の混雑につき姓名までは分らん」
 此時彌兵衛は屹となり「彌」ヤ、此は怪しからん、姓名が分らずば無證據でござる、何をもつて
 采女家來とお認めになり、御老中を煩はして主人かたへ御沙汰ありしや」「三」夫は采女家來の襟
 印、紺地に横三つ引、夫ゆる采女正家來と存じ届出たのである」「彌」ハ、ア、夫を證となさいま
 すか」「三」如何にも」「彌」ヤ、此は、失禮ながら長門様には襟印のことを深く御承知ないと見
 える、此印は諸方に付る者がござる、即ち五家ございまする、巾一寸にして間を隔つる三分是
 れは我主人の本家松平安惣守、巾八分間五分、即ち主人采女正にござります、巾七分間七分、
 分家淺野式部少輔にござります巾一寸間一寸、松浦肥前守殿なり、巾五分間一寸秋元但馬守殿
 にござる、火事場のことゆゑ此印を確と御突留はあるまい、無證據でござる、斯る無證據をも
 つて御談判に相成は、御當家御家老様方には、天下の政事をお取扱ひあるを御存知ござらんか、
 此ごとき事をもつて采女正方へお談判なさるるは、甚はだもつて主人の恥辱、君恥しめらるゝ
 時は臣死すの道理、然れば此に對し何とか我等の役目の相立やう願はしく、其儀能はんにあれ
 ば、御迷惑ながら御當席を汚し速やかに切腹つかまつる、此りや喜兵衛どの速かに切腹の用意
 をいたしたい」「彌」承知いたしてござる」「三」三浦長門守是を見て「三」此りや暫らく待れよ」「彌」何と